

柚ノ木遺跡

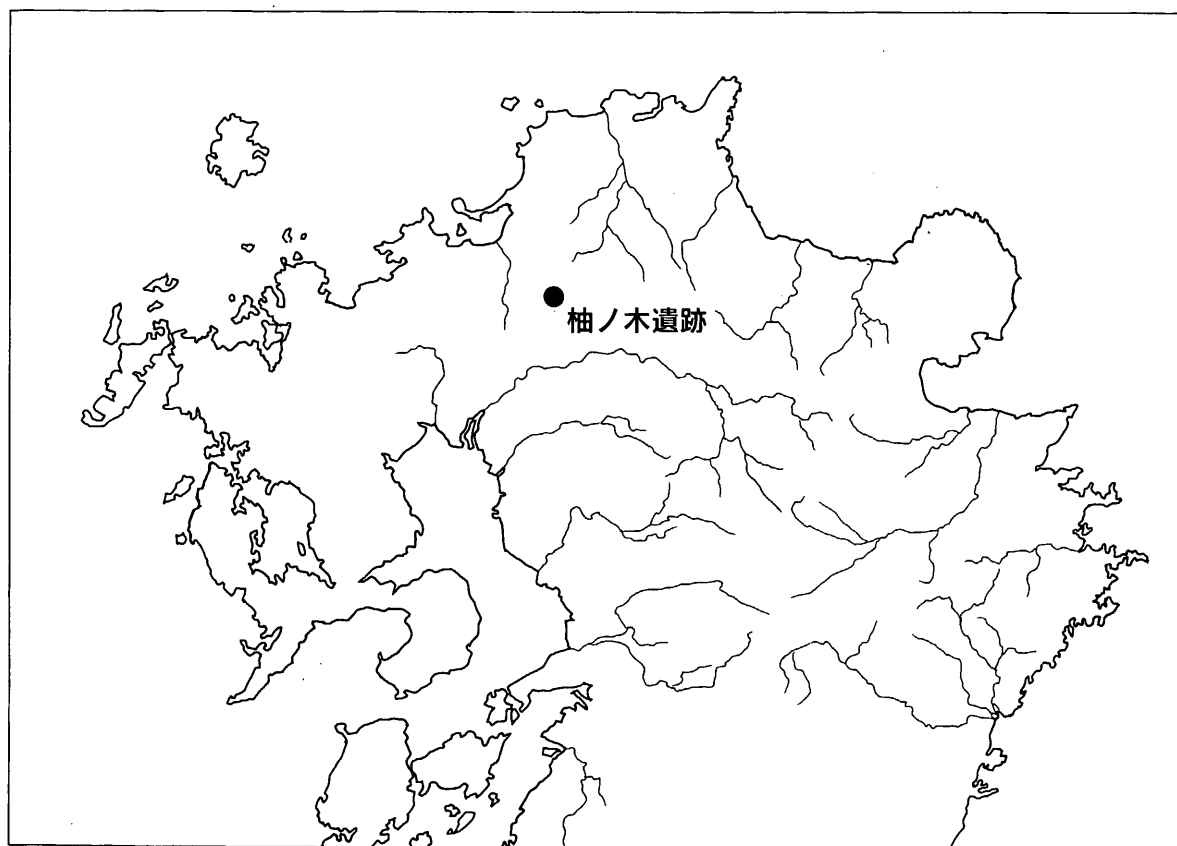
筑紫野市文化財調査報告書

第67集

2001

筑紫野市教育委員会

ゆきのせき 木遺跡



例 言

1. 本書は宅地造成に伴い筑紫野市教育委員会が実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、東邦土地開発株式会社から委託を受けて実施した。
3. 調査対象地は筑紫野市大字阿志岐2519-4である。
4. 現地での調査にかかる実測および写真撮影は奥村俊久が行い、甕棺墓の実測、また人骨の取り上げに際し橋口達也（当時：福岡県立九州歴史資料館）、小池哲史（当時：福岡県教育庁福岡教育事務所）、中橋孝博（当時：九州大学医学部）の協力を得た。
5. 出土遺物の実測は奥村と福田京子（(有)埋蔵文化財サポートシステム）が行った。
6. 製図は藤村佳久恵（(有)文化財テクノアシスト）が行った。
7. 出土遺物の写真撮影は岡紀久雄（フォトハウスOKA）が行った。
8. 報告に当たっては、2号墳丘から検出された甕棺墓にSK、墳墓にST、土壌にSDという記号を冠し、番号を付した。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	1
III 調査内容	4
1. 遺跡の概要	4
2. 柚ノ木第1号墳	4
3. 柚ノ木第2号墳	9
4. 1号石棺墓	12
5. 墳墓	13
IV まとめ	37
附 福岡県筑紫野市柚ノ木遺跡出土の弥生人骨	44

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図（縮尺1／25,000）	2
第2図 柚ノ木古墳群古墳分布図（縮尺1／5,000）	3
第3図 柚ノ木1号墳測量図（縮尺1／200）	5
第4図 柚ノ木1号墳石室実測図（縮尺1／60）	6～7
第5図 柚ノ木1号墳出土遺物実測図（縮尺1／3）	8
第6図 柚ノ木1号墳出土遺物実測図（縮尺1／1）	8
第7図 柚ノ木1号墳出土遺物実測図（縮尺1／2）	8
第8図 柚ノ木2号墳墳丘測量図（縮尺1／150）	9
第9図 柚ノ木2号墳墳丘断面図（縮尺1／60）	10
第10図 柚ノ木2号墳石室実測図（縮尺1／40）	11
第11図 柚ノ木2号墳出土遺物実測図（縮尺1／2）	12
第12図 柚ノ木1号墳墳丘下遺構検出状況（縮尺1／200）	12
第13図 1号箱式石棺墓実測図（縮尺1／30）	13
第14図 弥生時代墳墓遺構配置図（縮尺1／150）	14
第15図 SK01～06実測図（縮尺1／30）	15
第16図 SK07・08実測図（縮尺1／30）	16
第17図 SK09～14実測図（縮尺1／30）	17
第18図 SK15・16実測図（縮尺1／30）	18
第19図 SK17・19～21・23実測図（縮尺1／30）	19
第20図 SK24実測図（縮尺1／30）	20
第21図 SK01・05～07甕棺実測図（縮尺1／8）	22
第22図 SK08～10甕棺実測図（縮尺1／8）	23
第23図 SK11・12・14・15甕棺実測図（縮尺1／8）	24
第24図 SK16・18・19甕棺実測図（縮尺1／8）	25
第25図 SK02～04・20・23甕棺実測図（縮尺1／8・1／6）	26

第26図	SK17・21・24甕棺実測図（縮尺1／6）	27
第27図	ST01～03実測図（縮尺1／40）	33
第28図	ST04・05実測図（縮尺1／40）	34
第29図	ST06～08実測図（縮尺1／40）	35
第30図	ST09・10実測図（縮尺1／40）	36
第31図	木槨墓検出遺跡遺構配置図（縮尺1／400）	39
第32図	木槨墓検出遺跡遺構配置図	41
第33図	北部九州出土木槨墓実測図（縮尺1／80）	42
第34図	甕棺内人骨出土状況実測図（縮尺1／15）	46

写真図版目次

写真図版1	(1) 遺跡全景（南から）	(2) 遺跡全景（北から）	
写真図版2	(1) 柚ノ木1号墳全景（西から）	(2) 柚ノ木1号墳石室（上から）	(3) 柚ノ木1号墳石室（西から）
写真図版3	(1) 柚ノ木1号墳石室（北から）	(2) 柚ノ木1号墳北側墳丘断面	(3) 柚ノ木1号墳東側墳丘断面
写真図版4	(1) 柚ノ木2号墳全景	(2) 柚ノ木2号墳全景（北から）	
写真図版5	(1) 柚ノ木2号墳石室（上から）	(2) 柚ノ木2号墳石室（西から）	
写真図版6	(1) 柚ノ木2号墳奥壁（西から）	(2) 柚ノ木2号墳側壁（北から）	(3) 柚ノ木2号墳側壁（南から）
写真図版7	(1) 柚ノ木2号墳1T周溝	(2) 1号石棺墓	(3) 1号石棺墓内部
写真図版8	(1) SK01	(2) SK02	(3) SK03
写真図版9	(1) SK04	(2) SK05	(3) SK06
写真図版10	(1) SK07	(2) SK08	(3) SK09
写真図版11	(1) SK10	(2) SK11	(3) SK12
写真図版12	(1) SK13	(2) SK14	(3) SK15
写真図版13	(1) SK16	(2) SK19	(3) SK20
写真図版14	(1) SK21	(2) SK22	(3) SK23
写真図版15	(1) SK07人骨出土状況	(2) SK08人骨出土状況	(3) SK11人骨出土状況
写真図版16	(1) SK16人骨出土状況	(2) SK19人骨出土状況	(3) SK19人骨出土状況
写真図版17	(1) ST01	(2) ST03	(3) ST04
写真図版18	(1) ST04	(2) ST05	(3) ST06
写真図版19	(1) ST08	(2) ST09	(3) ST11
写真図版20	出土遺物2～14		
写真図版21	SK01～SK07甕棺墓		
写真図版22	SK08～SK14甕棺墓		
写真図版23	SK15～SK20甕棺墓		
写真図版24	SK21～SK24甕棺墓		

I 調査に至る経過

平成元年10月31日付けで、宅地造成、分譲に伴い東邦土地開発株式会社から筑紫野市大字阿志岐2519-4外、9,668㎡の文化財の有無について照会がなされた。当該地は柚ノ木遺跡および柚ノ木1号墳、2号墳という周知の遺跡となっていた。筑紫野市教育委員会では、これを受け平成2年1月20日に確認調査を実施した。この結果、古墳以外に遺構は確認されず、その旨を同年1月23日付けで回答し、開発にあたっては文化財保護法上の措置をとるよう指導した。平成2年2月3日付けで、文化財保護法第57条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が市教育委員会に提出され、直ちに県教育委員会に進達した。3月6日付けで県教育委員会から当該事業者に対し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知があった。この指示を受け、東邦土地開発株式会社は筑紫野市教育委員会と埋蔵文化財発掘調査の委託契約を3月13日付けで締結し、教育委員会は4月2日より発掘調査に着手した。試掘の結果、文化財が確認されなかった一部について発掘調査開始前に工事の着手を了解していたが、この際に誤って柚ノ木1号墳の墳丘が鋤取られる事故が発生した。市教育委員会では施主、および施工者より事故の再発防止を明示した始末書を徴収し、県教育委員会に報告した。発掘調査は柚ノ木1号墳から2号墳へ順調に進んだが、2号墳調査中に墳丘下より甕棺墓群が発見され、当初契約における発掘調査の履行が困難となった。このため、事業者と協議の上、調査費用増額の変更契約を6月21日付けで締結した。

現地の発掘調査は7月21日で終了した。しかし、整理、報告段階で事業者が倒産するという事態が生じ、調査費の未納金があることから作業を中断していた。その後、債権の引継者が決定し、文化財を始め公共施設関連の負担金も納入されたことから、作業を再開した。

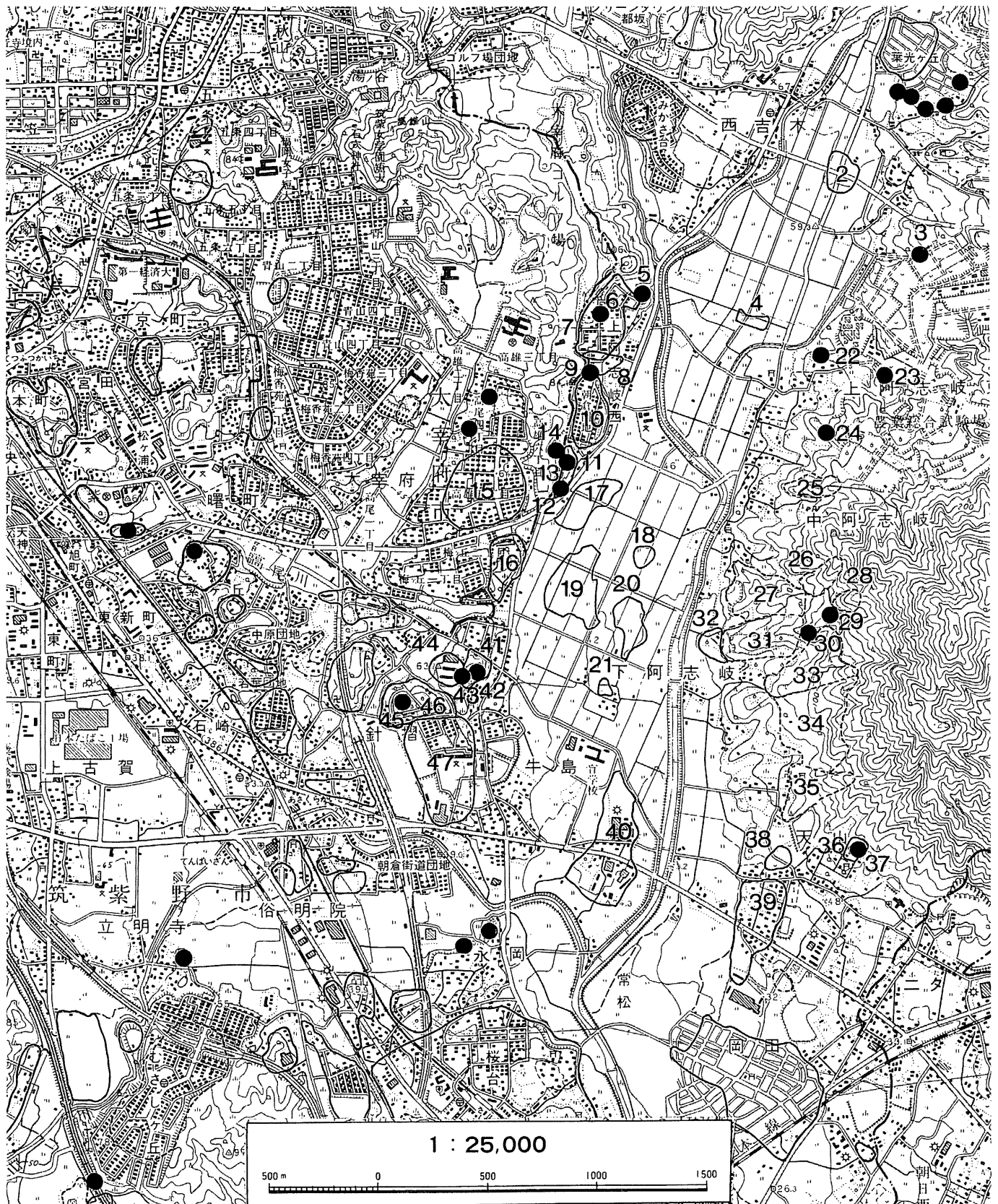
調査組織

庶務	筑紫野市教育委員会	教育長	永渕正敏
	社会教育課	課長	川原孝之
	社会教育課	文化財担当係長	山野洋一
		文化財担当主事	奥村俊久
発掘調査	筑紫野市教育委員会	社会教育課	文化財担当主事 奥村俊久

II 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。市の東西から三郡山塊、背振山塊が迫り、その間に狭長な平野部を有す。市の北西には鷺田川が流れ、太宰府市で御笠川と合流し博多湾に注ぐ。東には筑後川と合流し、有明海に注ぐ宝満川が流れ、市の中央部は分水嶺となっている。宝満川は三郡山を源に、その東麓を回り込むように流れた後、吉木・阿志岐の平野を潤し、永岡付近で九千部山に源を発す山口川と合流する。

吉木・阿志岐の平野部は北に宝満山（868m）、東に宮地岳（339m）、西に高雄山（151m）から延びる丘陵に三方を囲まれる。この平野部には御笠地区遺跡があり弥生時代から古墳時代に至る集落跡のほか、奈良時代の蘆城駅家と推定される遺構も見られている。宝満川東岸の宮地岳西麓には現在80基を超える古墳が確認されているが、実数はその数をはるかに上回るものと考えら



第1図 周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

- | | | | | |
|--------------|---------------|---------------|--------------|------------|
| 1. 杉の谷古墳群 | 11. 柚ノ木2号墳 | 19. 御笠地区遺跡E地点 | 27. 阿志岐古墳群B群 | 35. 天山古墳群 |
| 2. 御笠地区遺跡A地区 | 12. 柚ノ木1号墳 | 20. 御笠地区遺跡F地点 | 28. 阿志岐古墳群C群 | 36. 峰古野遺跡 |
| 3. 六度古墳 | 13. 柚ノ木遺跡 | 21. 御笠地区遺跡G地点 | 29. 阿志岐古墳 | 37. 峰古野1号墳 |
| 4. 御笠地区遺跡B地区 | 14. 下高尾古墳 | 22. 尺ヶ浦古墳 | 30. 宮崎古墳 | 38. 天山宮崎遺跡 |
| 5. 六本松古墳 | 15. 吉ヶ浦遺跡 | 23. 大谷古墳 | 31. 阿志岐古墳群A群 | 39. 日焼遺跡 |
| 6. 柚ノ木4号墳 | 16. 高雄遺跡 | 24. 星隈古墳 | 32. 宮崎遺跡 | 40. 牛島宮崎遺跡 |
| 9. 柚ノ木3号墳 | 17. 御笠地区遺跡C地点 | 25. 杉の谷古墳群 | 33. 脇道古墳群 | |
| 10. 六本松遺跡 | 18. 御笠地区遺跡D地点 | 26. 阿志岐古墳群D群 | 34. 老松神社古墳群 | |

れる。現在までに、割竹形木棺を内部主体とする阿志岐古墳群B群22～26号墳、横穴式石室を内部主体とする杉の谷古墳群1～3号墳、阿志岐古墳群B群21号墳が発掘されている。また阿志岐シメノグチ遺跡では弥生時代中期後葉の祭祀遺構が検出され、筒形器台や丹塗り高坏等が出土した。また、近年、宮地岳頂上部に古代山城と考えられる遺構が発見され注目を浴びている。一方、宮地岳西岸の高雄山から延びる丘陵は開析され、低い丘陵部と谷部が入組んだ地形を呈している。四基の方形と円形周溝墓からなる峠山遺跡や横穴式石室を内部主体とする上ノ浦古墳が発掘調査されているが、高雄山の北側の塚口古墳を除き、際立った群集は見られない。また、柚ノ木遺跡と谷を隔てた吉ヶ浦遺跡からは数多くの甕棺墓が発掘調査されている。

柚ノ木遺跡は高雄山から延びる開析された東端、中央の丘陵部にあり、東側に宝満川や阿志岐の平野部、宮地岳を望む。丘陵部は南北に延び、古い宅地造成により原形を留めないが、頂部の幅は比較的狭い。

Ⅲ 調査内容

1. 遺跡の概要

丘陵の先端に横穴式石室を内部主体とする柚ノ木1号墳が、その北側100mに柚ノ木2号墳がある。また、柚ノ木1号墳の墳丘下から箱式石棺墓が、柚ノ木2号墳の墳丘から甕棺墓や木棺墓等が検出された。昭和46年の踏査による分布調査では、調書に「…造成で削った部分に甕棺箱式石棺が多く露出しており、中期の遺跡と考えられる。宅地造成地域外は雑木林で遺跡の把握ができない。少し離れたところにピットが断面に出ており、その中より多量の炭化米が出土する。」とあるが、炭化米が出土するような生活関連遺構は検出されなかった。その後の小規模な工事で消失したものと考えられる。

2. 柚ノ木第1号墳

墳丘

墳丘は大破しており、規模、形態は明確ではない。昭和46年の踏査記録によると「…一号墳は直径約15m、高さ2.5mの円墳で主体部は横穴式石室である。現在、宅地造成で墳丘の半分は切断され、石室が露出している。…」とある。さらに、調査着手前にブルドーザが古墳の上を通り、その際に墳丘が大きく削り取られた。

古墳は丘陵の軸に直行する主軸をもつ。このため丘陵の奥にあたる北側は腰石の高さまで墓壙が掘り込まれ、裾部側の南側の墓壙は浅い。北側腰石裏の墓壙内に比べ、南側は低い腰石の上半部から丁寧に土が積み上げられている。また、石室の中心から南西7～8mの所に長さ7.5m程の溝が巡る。遺物は出土しなかったが、前述の踏査記録の墳丘規模等から周溝の一部である可能性が高い。

石室

北西側の半分ほどが完全に失われ、残った部分も腰石とその上の若干の石材のみである。石室はN-69°-Wに開口する単室両袖の石室である。袖石は既に失われている。玄室は奥幅2.94m、前幅2.85m（掘方より推定）、右壁長2.98m（掘方より推定）、左壁長3m（掘方より推定）を測る。腰石の構成は奥壁が蒲鉾状の平石1石、左壁は長方形の石材を横に寝かせ、更に一石を加える。左壁は奥壁側の1石しか確認できなかった。玄門部には框石がのこり幅67cm

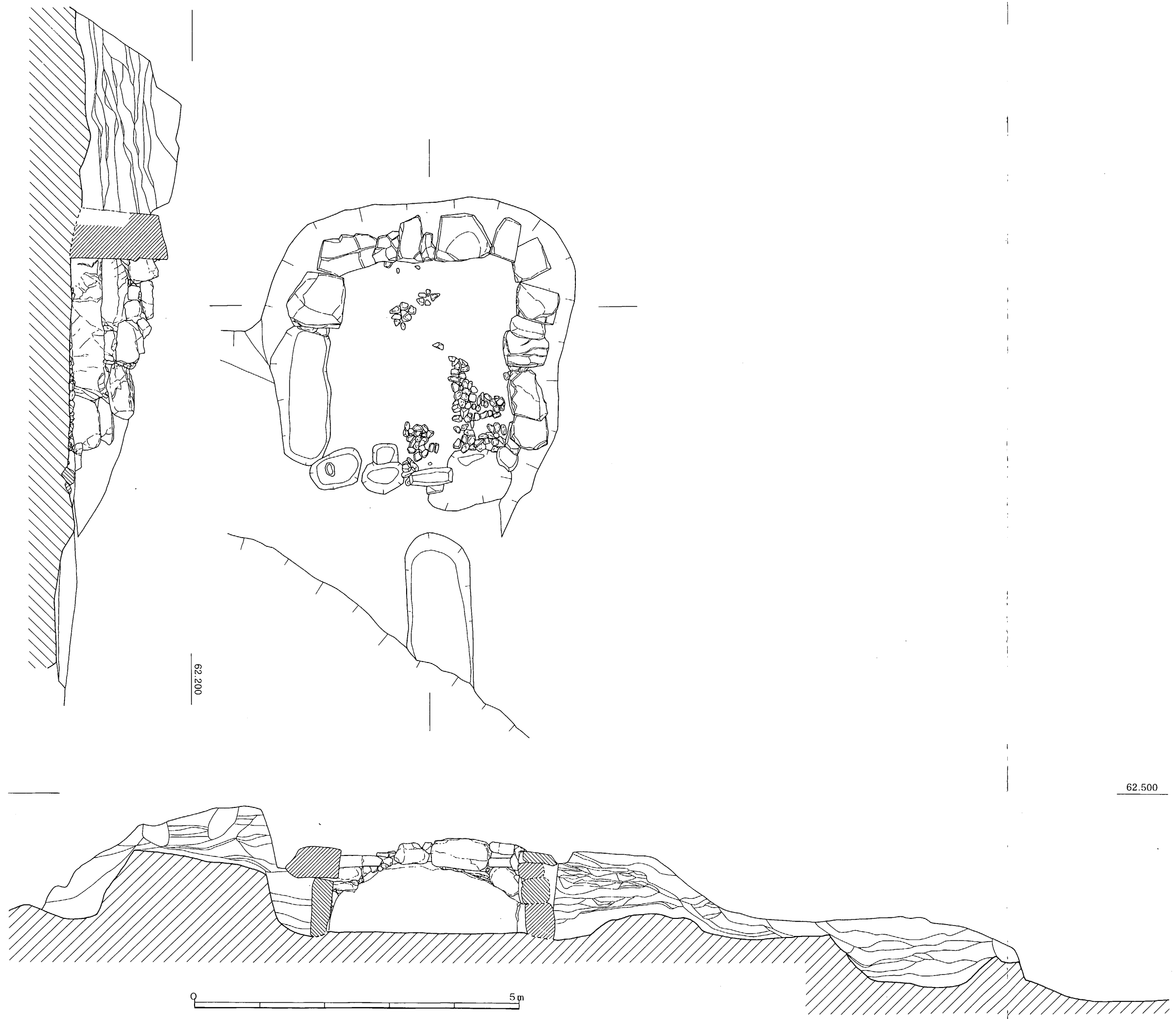


第3図 柚ノ木1号墳測量図（縮尺1／200）

を測る。框石の前方72cmには墓道が確認でき、羨道部の構築を考えるには無理があるように思われ、無羨道の石室である可能性が高い。

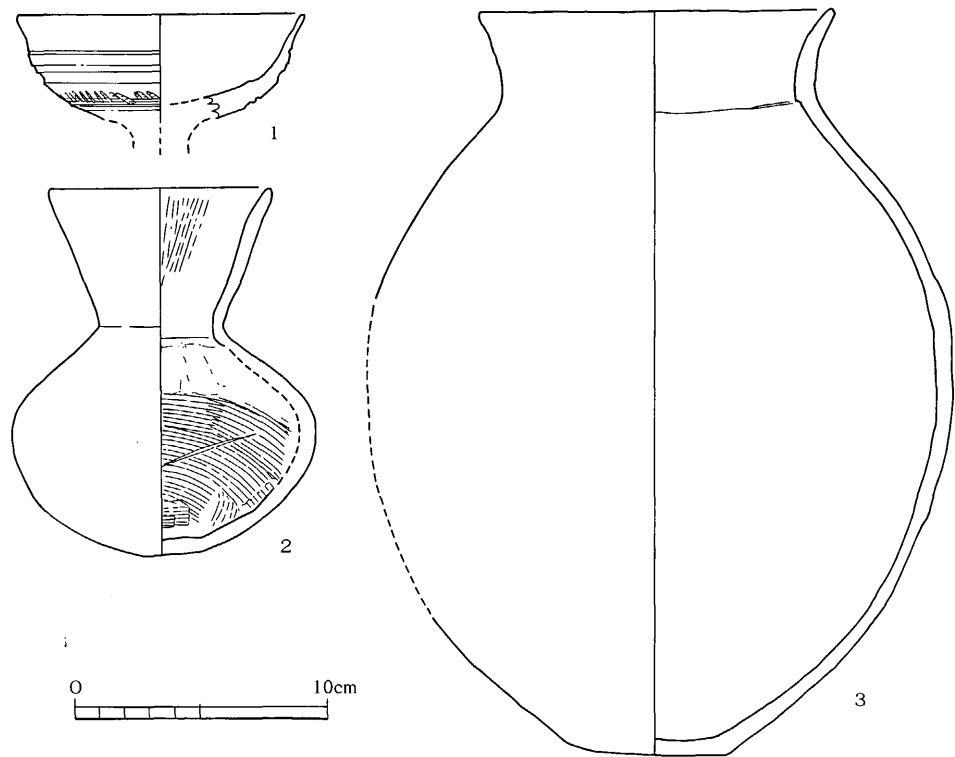
出土遺物

1は墓道中から出土した須恵器の高坏である。坏部の1／5程の小片である。復元口径は11.4cmで、口縁部は僅かに外反する。体部の上中下位には3本の沈線を巡らし、上位の沈線のすぐ下から回転ヘラ削りが行なわれる。中位の沈線は段状を呈し、下位の沈線との間に櫛状工具による斜方向の刻みが施される。2・3はブルドーザーで押された後の古墳の上部から出土した。2は土師器の長頸壺で、ほぼ完形である。口径9cm、器高14.6cm、胴部最大径12.1cmを



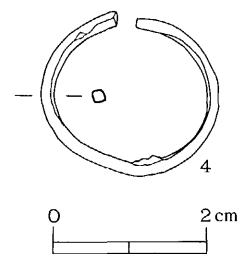
第4図 柚ノ木1号墳石室実測図 (縮尺1/60)

測る。口縁部はほぼ直行して開き、胴部は丸みのあるソロバン玉状を呈し、底部は径2cm程の平坦面を残す。外面は荒れ、調整はほとんど確認できないが、最大径位下からヘラ削りが施されているようである。内面は口頸部が縦方向、体部は横方向の刷毛目が施される。3は土師器の甕で、胴部を中心に2/5を欠失する。口径14cm、器高29.4cm、胴部最大径約23cmを測る。口縁部は外反し、やや長い胴部の中央に最大径をもつ。底部は径6cm程の平底をもつ。器面は荒れ、調整は確認できない。4は玄室南隅床面から出土した耳環である。一辺1.5mm程の断面方形の銅体を環状に曲げたものである。表面に金または銀等は確認できなかった。5～8は鉄製の留金具で5・7は玄室南隅床面から出土した。一辺2.2～2.7cmの方形を呈し、厚み2.5～3mmを測る。鉤は5が4本、6・7が3本を有し、8も3本と思われる。いずれも鍍金が認められる。5・8の一部の鉤回りに緑青が僅かに見られる。鉤体は鉄製なので頭部に何らかの装飾があったことも想定できる。9は鉄鏃で、4・5・7と同じく玄室南隅床面から出土した。茎部を欠失する。残存長5cmを測る柳葉形式に属するものである。10・11は刀子、12は鉄鎌である。13は長さ10.2cmを測る釘状のものである。

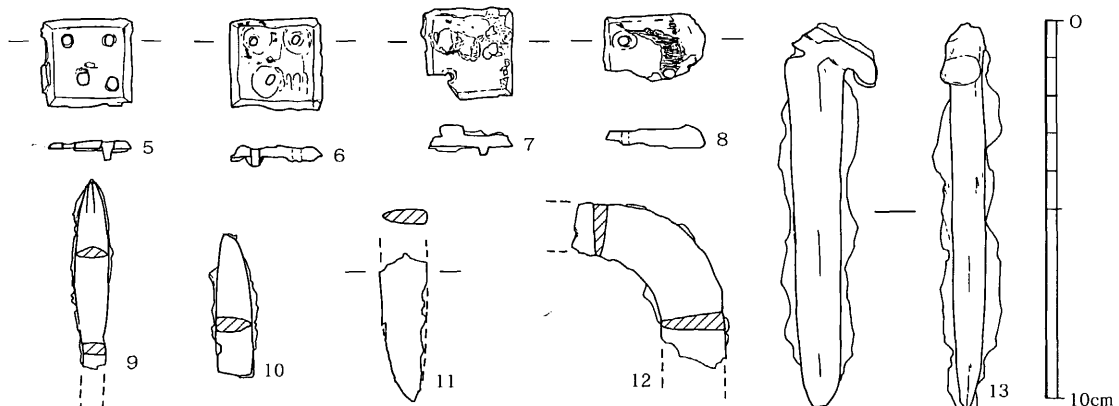


第5図 柚ノ木1号墳出土遺物実測図（縮尺1/3）

部を中心に2/5を欠失する。口径14cm、器高29.4cm、胴部最大径約23cmを測る。口縁部は外反し、やや長い胴部の中央に最大径をもつ。底部は径6cm程の平底をもつ。器面は荒れ、調整は確認できない。4は玄室南隅床面から出土した耳環である。一辺1.5mm程の断面方形の銅体を環状に曲げたものである。表面に金または銀等は確認できなかった。5～8は鉄製の留金具で5・7は玄室南隅床面から出土した。一辺2.2～2.7cmの方形を呈し、厚み2.5～3mmを測る。鉤は5が4本、6・7が3本を有し、8も3本と思われる。いずれも鍍金が認められる。5・8の一部の鉤回りに緑青が僅かに見られる。鉤体は鉄製なので頭部に何らかの装飾があったことも想定できる。9は鉄鏃で、4・5・7と同じく玄室南隅床面から出土した。茎部を欠失する。残存長5cmを測る柳葉形式に属するものである。10・11は刀子、12は鉄鎌である。13は長さ10.2cmを測る釘状のものである。



第6図 柚ノ木1号墳出土遺物実測図（縮尺1/1）

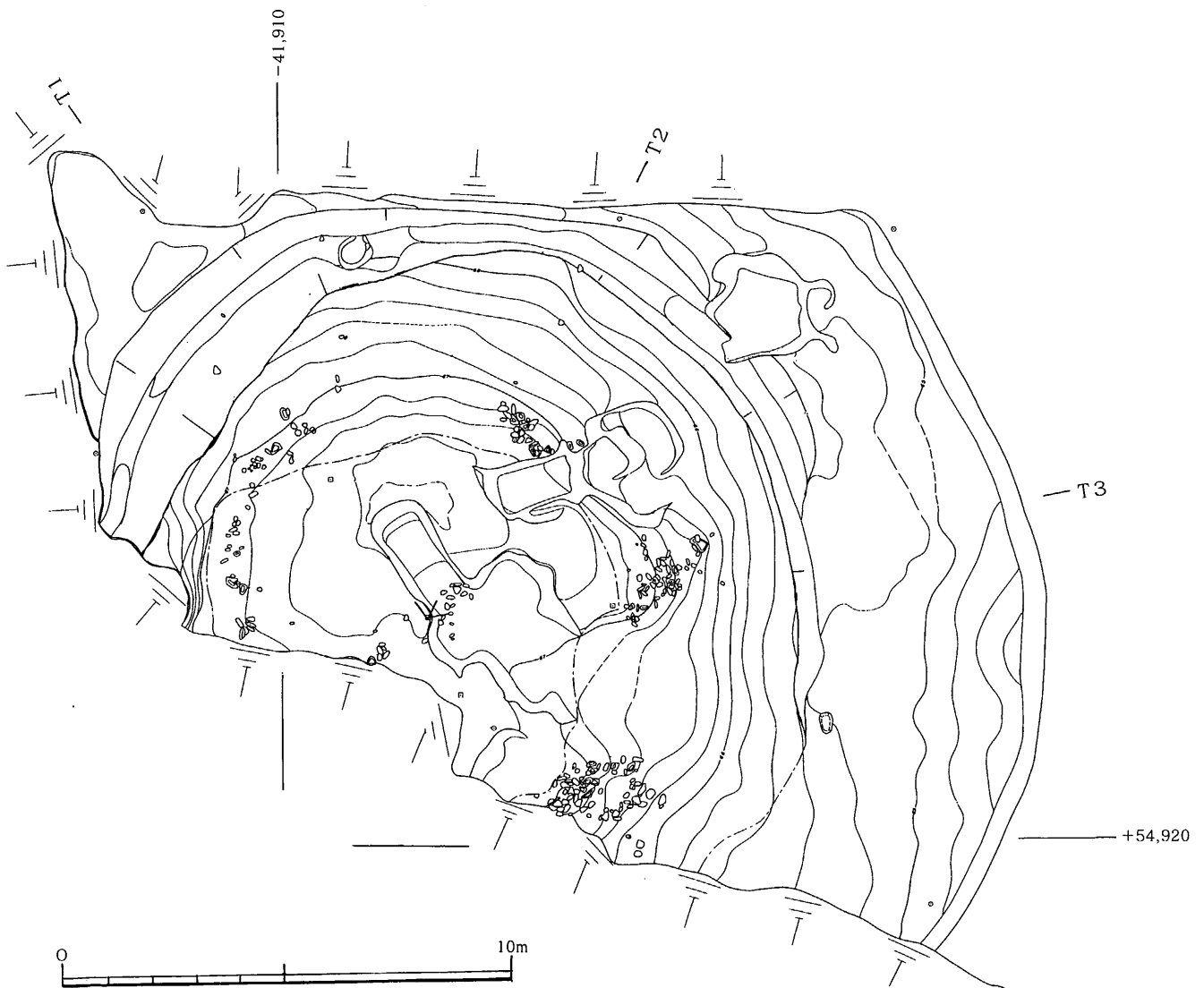


第7図 柚ノ木1号墳出土遺物実測図（縮尺1/2）

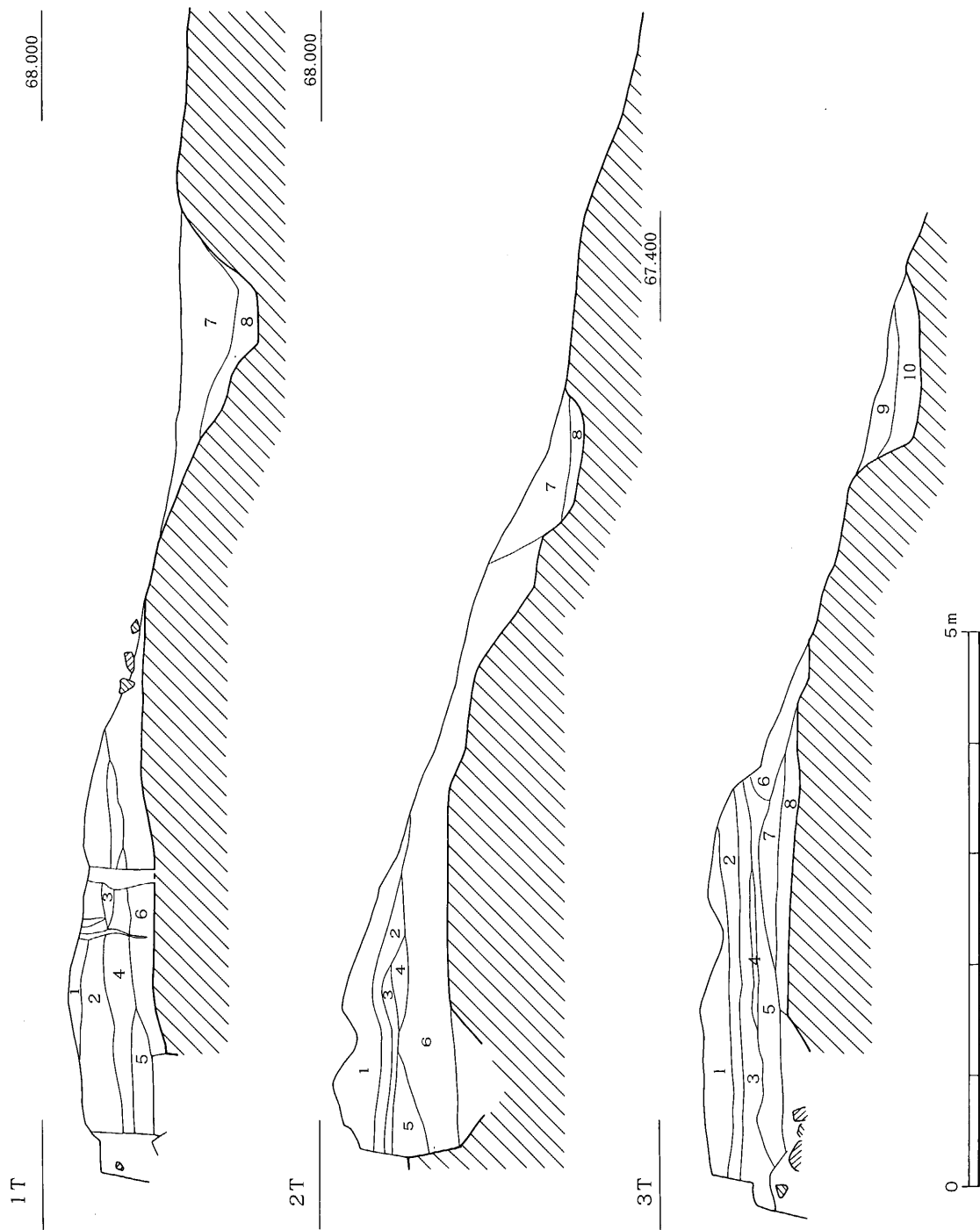
3. 柚ノ木第2号墳

墳丘

古墳は周辺が削り取られるため、丘陵のどの位置に築かれていたのかは明確ではないが丘陵の幅から見て丘陵頂部の東側に築かれていたものと推定される。墳丘の南半は失われているが、石室北半に周溝が巡り、径約16mの円墳と考えられる。周溝の外側の肩は流失しているが、幅1.6～2mを測る。墳丘は東側で高さ2.2m、西側で1.4mを残す。墳丘の表面には中心から5m程の位置に礫の集まりがみられるが、この位置で全周していたのかどうかは確定しえない。盛土は旧表土の上に土を積み上げるが、版築状の細かな盛土はみられず、かなり平面的な盛土を行っているようである。



第8図 柚ノ木2号墳墳丘測量図 (縮尺1/150)



第9図 柚ノ木2号墳墳丘断面図（縮尺1/60）

1 T

1. 明褐色土 (7.5YR5/6)
2. 明赤褐色土 (5YR5/6)
3. 明褐色土 (7.5YR5/8)
4. 明褐色土 (7.5YR5/6) 30%
明赤褐色土 (5YR5/6) 70%
5. 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 20%
褐色土 (10YR4/4) 80%
6. 旧表土
7. にぶい褐色土 (7.5YR5/4)
8. 明赤褐色土 (2.5YR5/8)

2 T

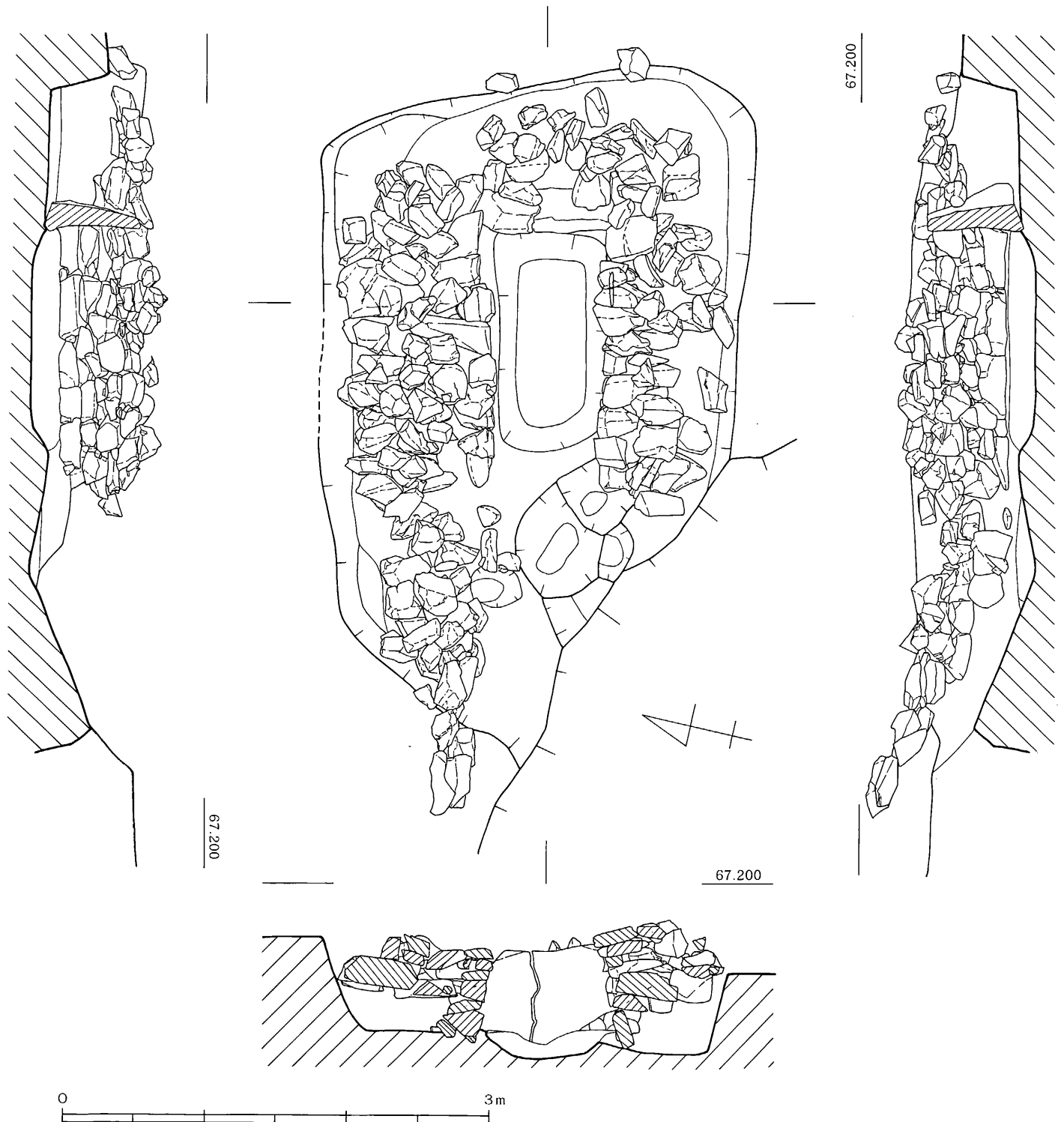
1. 明赤褐色土 (5YR5/6)
2. 明赤褐色土 (5YR5/8)
3. 明褐色土 (7.5YR5/8)
4. 明褐色土 (7.5YR5/6) 30%
明赤褐色土 (5YR5/6) 70%
5. 明褐色土 (7.5YR5/6) 30%
明赤褐色土 (5YR5/6) 70%
6. 旧表土
7. にぶい褐色土 (7.5YR5/4)
8. 明赤褐色土 (2.5YR5/8)

3 T

1. 明赤褐色土 (5YR5/6)
2. 明褐色土 (7.5YR5/8)
3. 明褐色土 (7.5YR5/6) 30%
明赤褐色土 (5YR5/6) 70%
4. 明赤褐色土 (5YR5/8)
5. 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 20%
褐色土 (10YR4/4) 80%
6. 橙色土 (5YR6/8)
7. 明赤褐色土 (5YR5/8)
8. 旧表土
9. 橙色土 (5YR6/8)
10. 明赤褐色土 (2.5YR5/8)

石室

石室はN-102°-Wに開口する竪穴系横口式石室である。石室の天井部、および墓道、玄門部の南側は失われる。玄室は奥壁に高さ78cm、幅110cm程の方形板状の石材を用いるが、残存する側壁の最も高い部分より15cm程低く、奥壁板石の上にも若干の石材が積まれていたと考えられる。側壁は最下段に40～50×20～30cm大の石材を横長に置き、その上はやや小振りの塊石・割石を小口積みする。奥壁や側壁の裏には、腰石から2～3段目の位置から上方に厚い

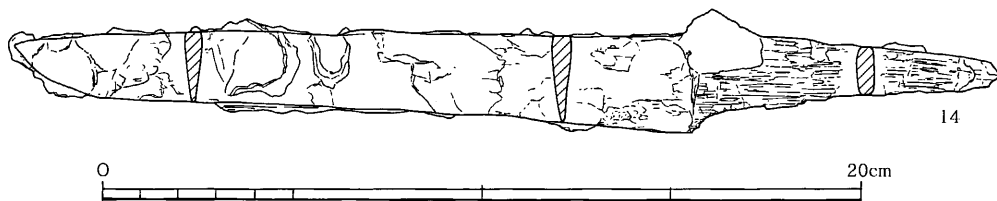


第10図 柚ノ木2号墳石室実測図（縮尺1/40）

控え積みが掘り方いっぱいに行なわれる。左側壁は玄門部周辺から前の部分を失うが、左側壁は奥壁から245cmの所までは最下段の石材が同じ高さで並ぶが、その先のピットを境に途切れる。このピットには方柱状の石材を立て、袖石としていたものと考えられる。玄室のプランは奥幅106cm、前幅は残存壁を延長すると75cm程度と推定される。長さは奥壁から袖石を立てたと推定されるピットまで240cmを測る。石室の高さは最もよく残っている部分で74cmを測る。床面奥壁側は幅80cm、長さ156cmの船底状の窪み設けられている。

出土遺物

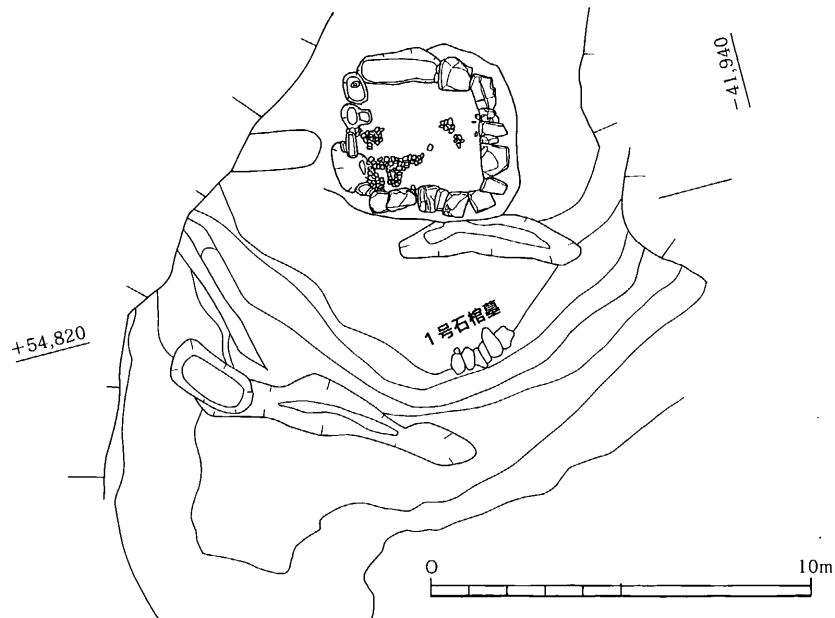
14は玄室中央左壁際から出土した鉄刀である。全長を25.4cmを測り、把や鞘の木質が残る。茎は7.8cmで、身との比率は約1：3である。身幅は4～5mm、茎幅4mmを測る。



第11図 柚ノ木2号墳出土遺物実測図（縮尺1／2）

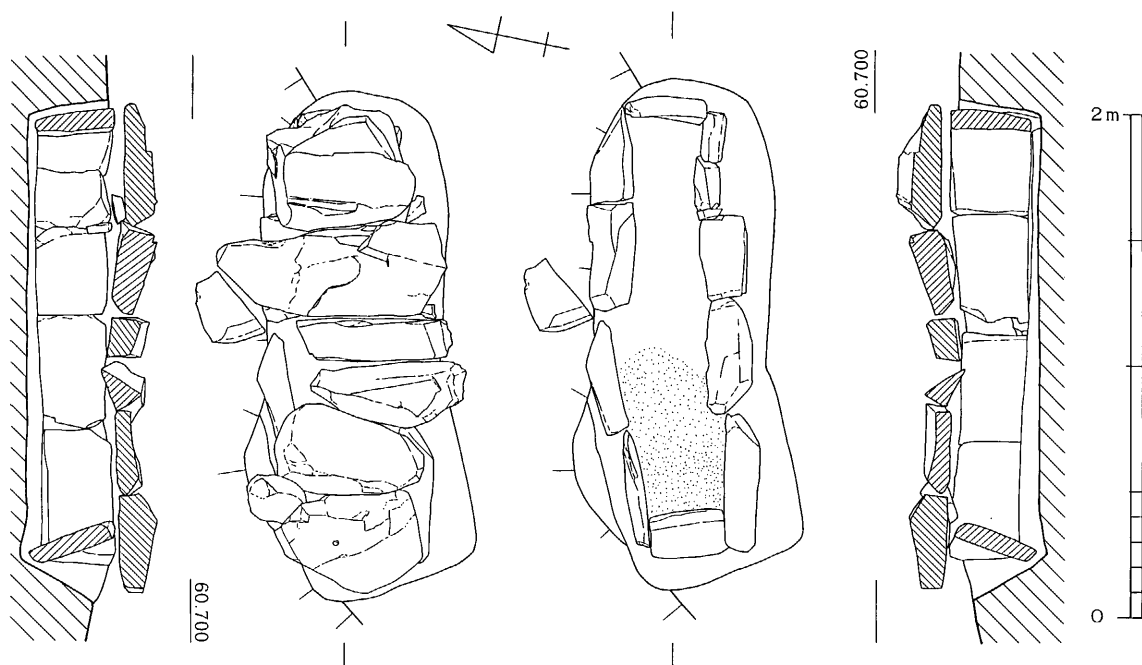
4. 1号石棺墓

1号墳石室中心から南側約6mの墳丘下で検出した。N-78°-Eに主軸をとる箱式石棺墓である。墓壙上部は既に失われ、石棺の主体部のみ出土した。掘り方は主軸上で長さ202cm、幅70～75cmを測り、その中に花崗岩製の方形板状の石材を東西に立て木口とし、木口を挟むように南に4石、西に5石の板状の石材で側壁を造る。西側壁の東側は石材の



第12図 柚ノ木1号墳墳丘下遺構検出状況（縮尺1／200）

都合か外の石材に比べ小振りの2石をあてる。石材は内部の法量は東木口幅30cm、西木口幅29cm、南側壁152cm、北側壁159cmを測る。棺内床面の西半には赤色顔料が残るほかは何も出土しなかった。石棺の蓋は両端それぞれ2石をやや大振りの板状の石材、中央の2石を方柱状の石材を用いる。中央の2石は南側に少し動いており、石棺中央部北側の一部が露出している。東端2石の北側継目に小振りの石で隙間を詰めており、石棺中央北側に落ちる石も隙間を埋めるための石材であった可能性もある。



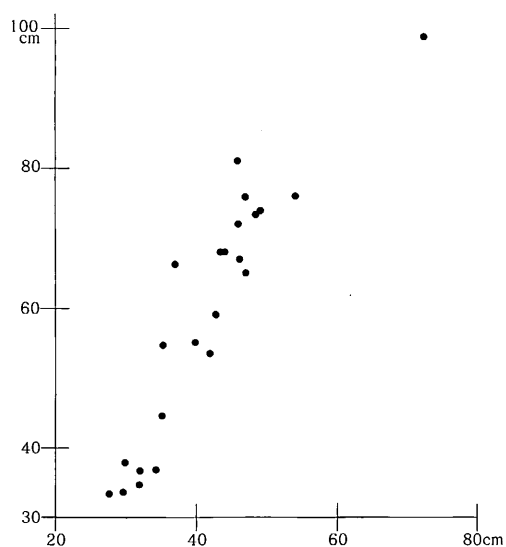
第13図 1号箱式石棺墓実測図（縮尺1／30）

5. 墳墓

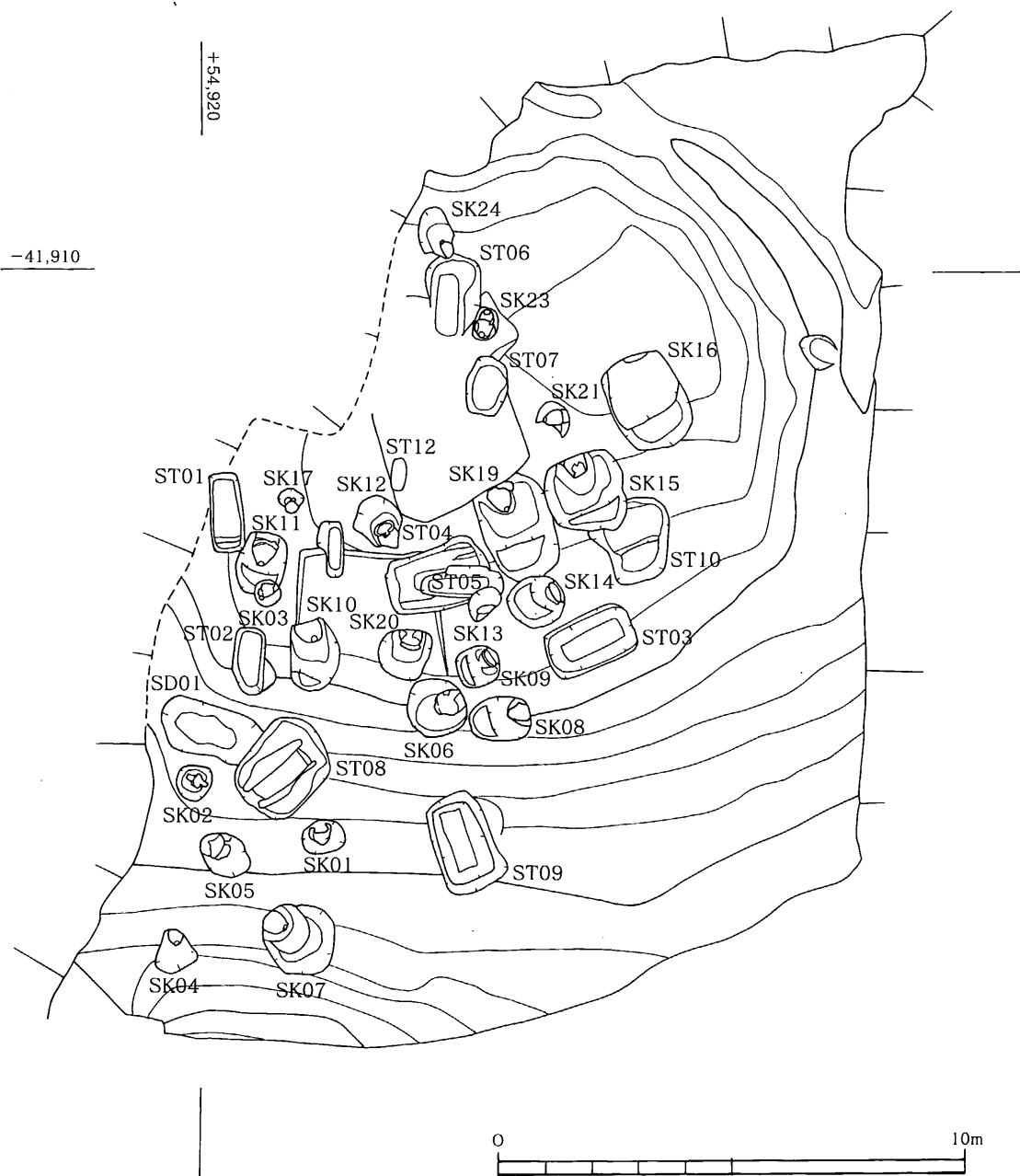
柚ノ木第2号墳の墳丘下から東側にかけて検出された甕棺墓、木棺墓を主体とする墳墓群である。甕棺墓が22基（SK18・SK22欠番）、木棺墓・土墳墓が11基、木郭墓が1基検出された。南側から西側にかけては土取りにより失われている。

（1）甕棺墓

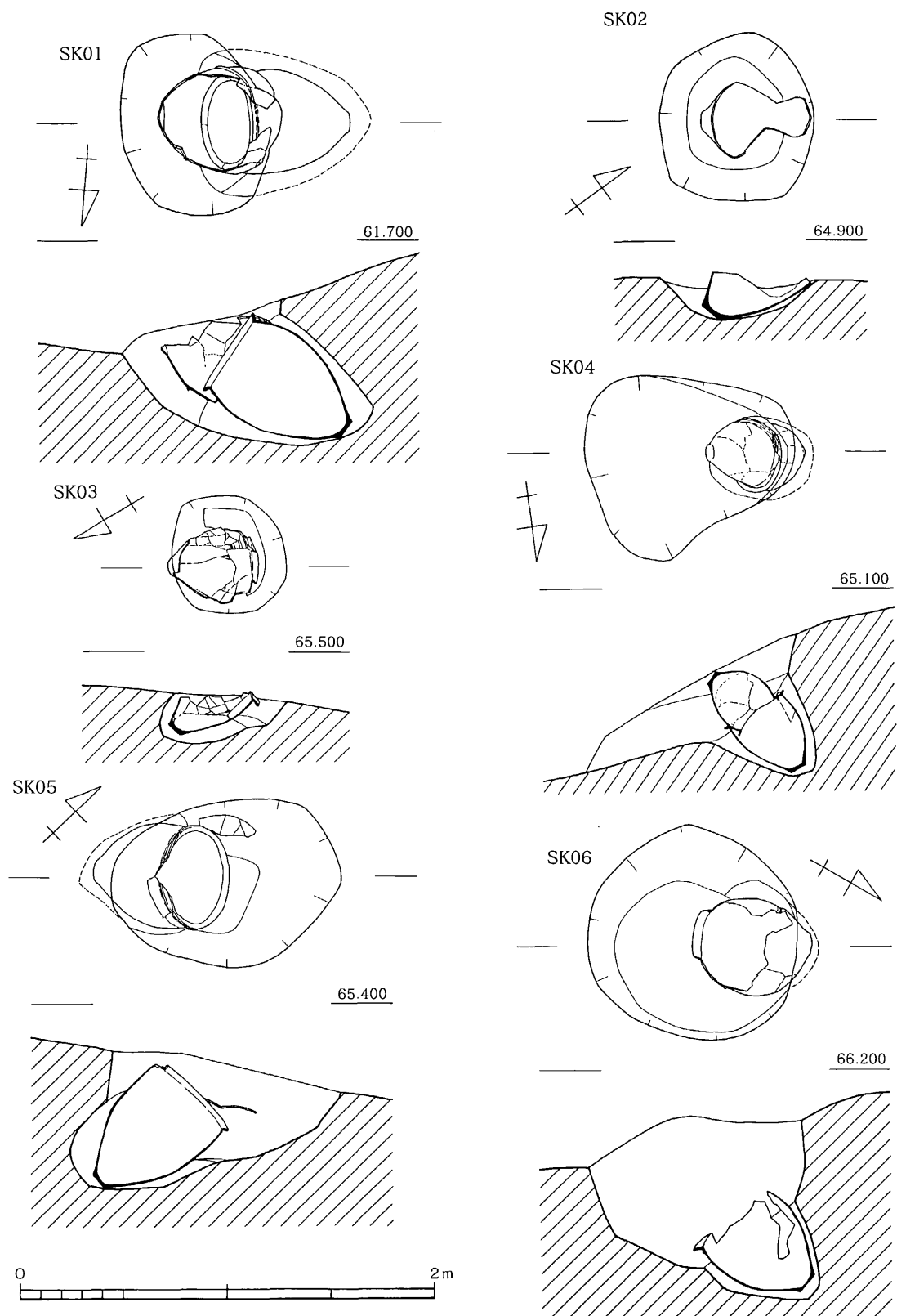
甕棺墓は、単棺7基、接口8基、覆口5基、不明2基により構成される。甕棺に用いられる甕で口径と器高が計測可能なものをグラフにすると概ね3群に分類できる（図表1）。口径30cm前後、器高30～40cmの小型のもの、口径40cm前後、器高50～60cmの中型でも小振りのもの、口径45～50cmを中心とし、器高65～80cm程度のいわゆる中型のものである。これらの群に入らないものとして、SK17下甕（口径35cm、器高44.5cm）とSK16（口径73cm、器高107cm）がある。SK17は小型と中型の中ほどにあるが、法量的に近い小型として取り扱う。また、SK16は中型より口径、器高ともに20cm程上回る大型のものである。



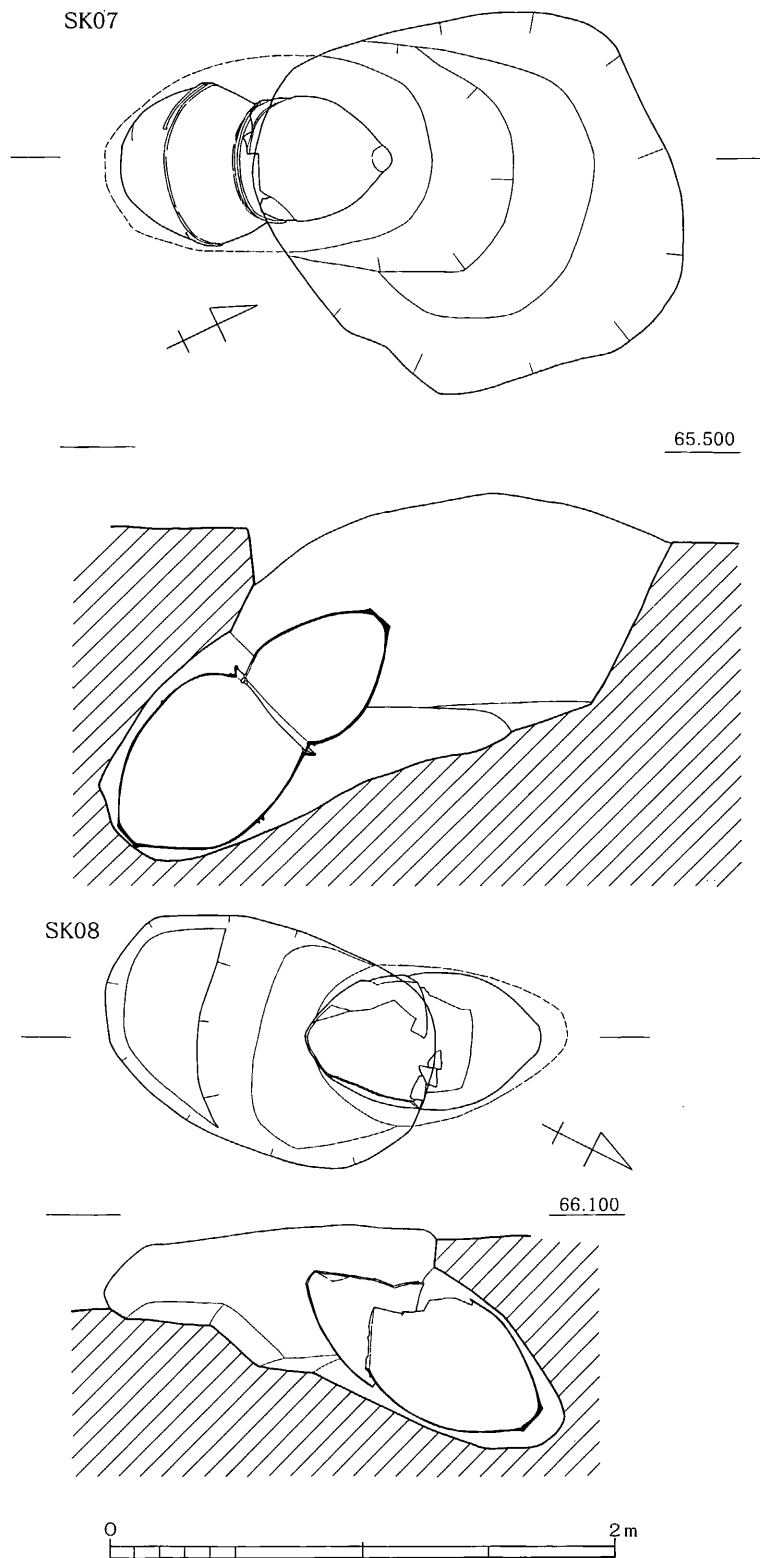
図表1 出土甕棺法量表



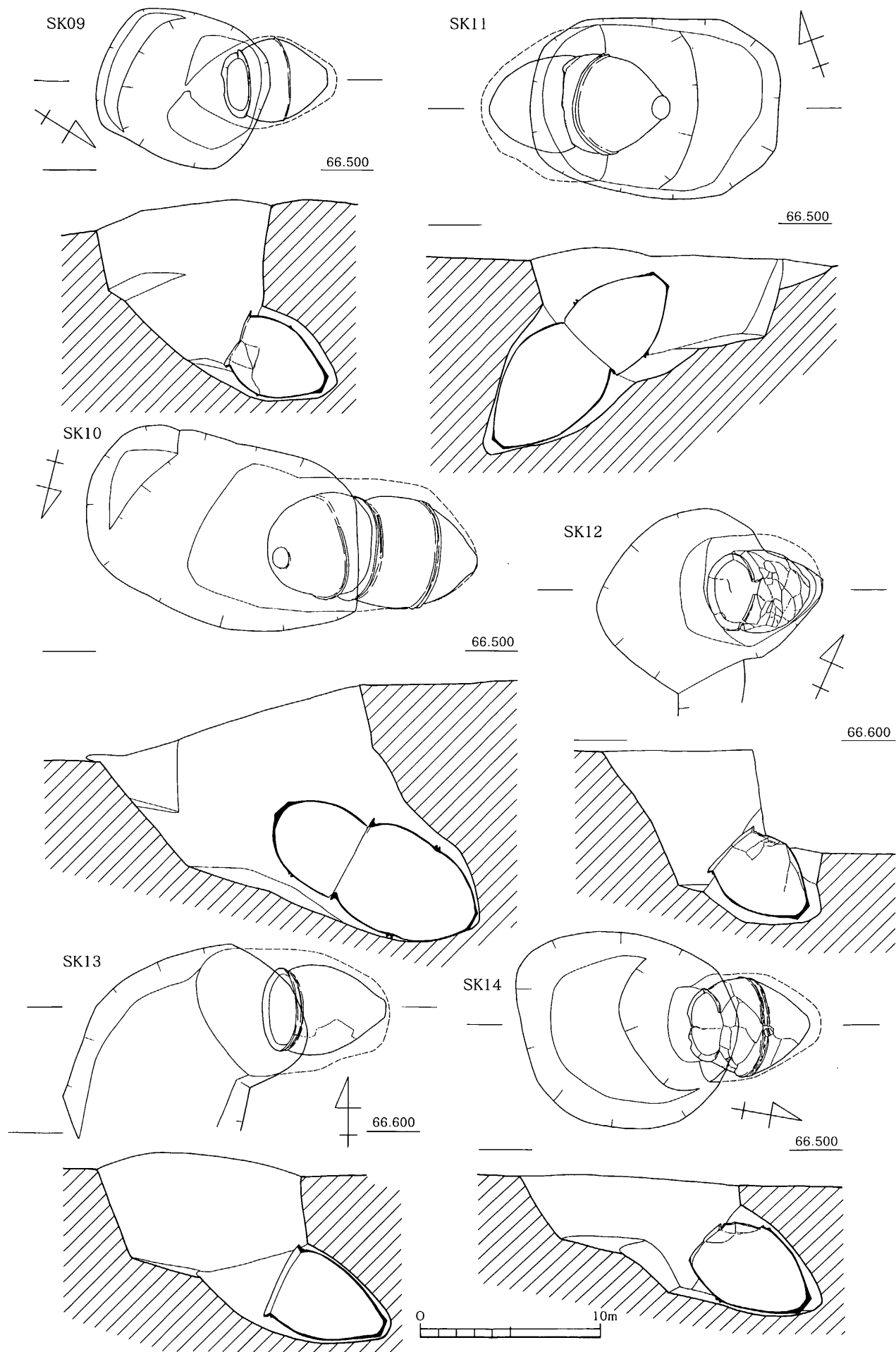
第14図 弥生時代墳墓遺構配置図（縮尺1／150）



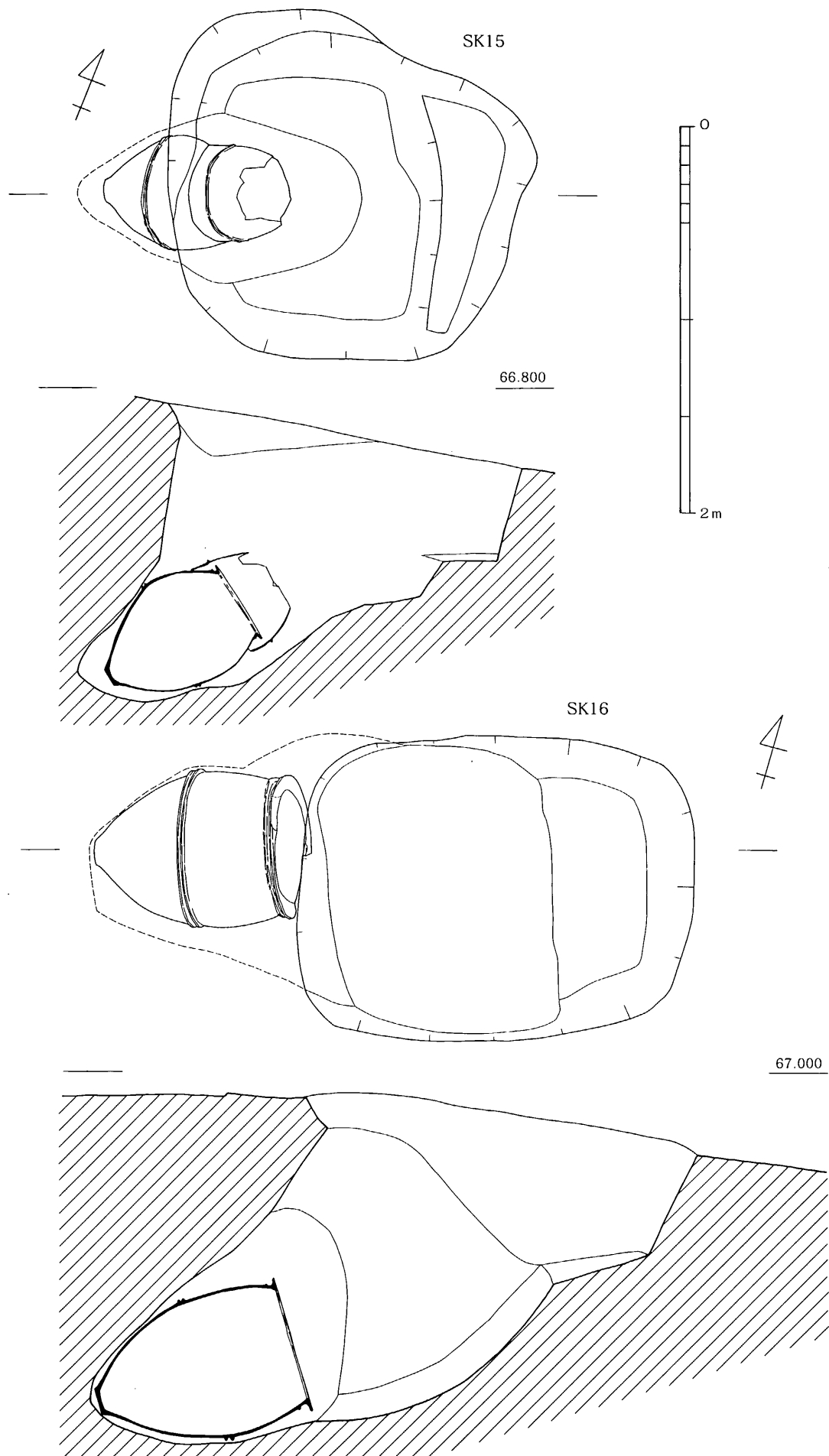
第15図 SK01~06実測図 (縮尺 1 / 30)



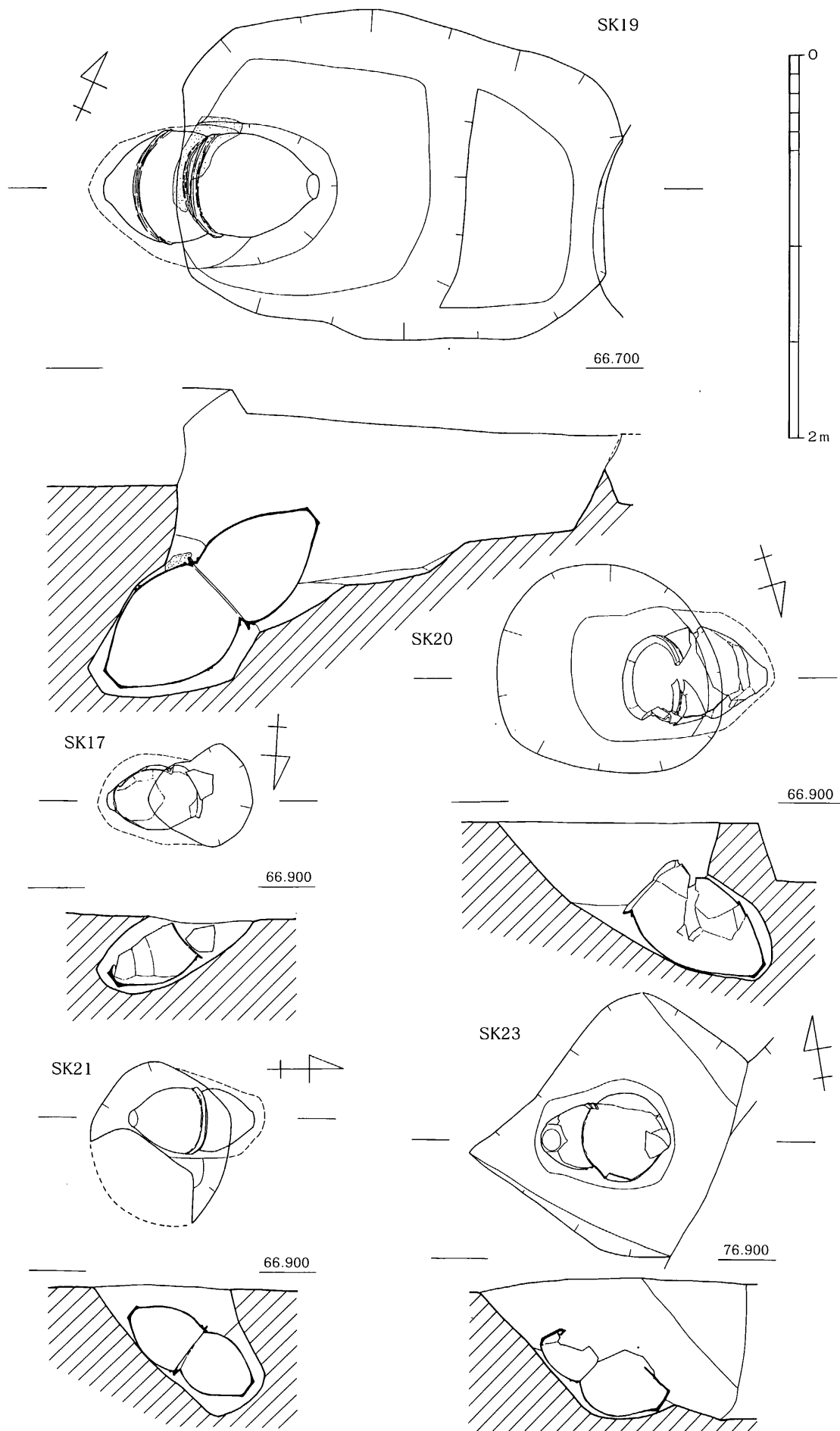
第16図 SK07・08実測図（縮尺1／30）



第17図 SK09~14実測図 (縮尺 1 / 30)

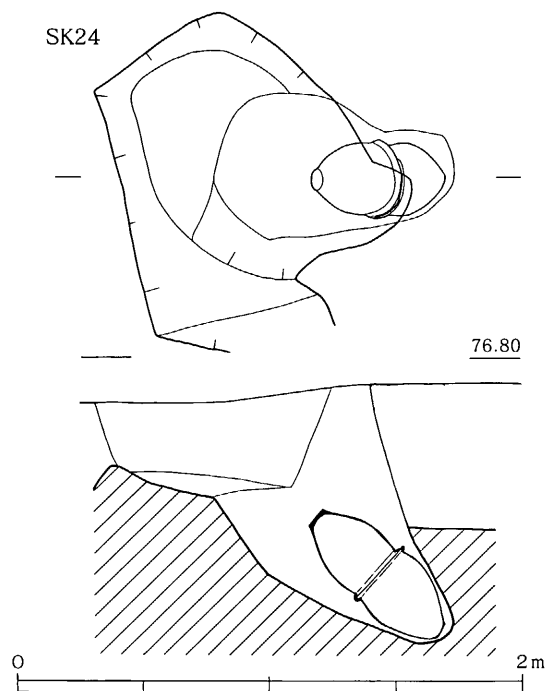


第18図 SK15・16実測図 (縮尺1/30)



第19図 SK17・19~21・23実測図 (縮尺 1/30)

中型としたものは基本的に同様の形態を呈すが、胴部中位が強く張り、この部分に2条、口縁屈曲部直下に1条の凸帯が巡るもの（A群）と、胴部上位に最大径をもつが、張りは弱く、口縁屈曲部直下に1条の凸帯を巡らすもの（B群）がある。さらに口縁部の形状によりT字、逆L字状口縁の形状を残すもの（Ⅰ類）、角度が深い「く」字状口縁を呈するもの（Ⅱ類）、「く」字状口縁の角度が浅く口縁部上面が内湾気味となるもの（Ⅲa類）、「く」字状口縁の角度が浅く、口縁部上面は平坦なもの（Ⅲb類）に分けることができる。Ⅰ類としてはSK16とSK10下甕、SK19下甕、SK15下甕が上げられる。SK16は胴部中位に最大径をもつA類であるが、張りは強くない。口縁部はやや内傾する逆L字状を呈す。



第20図 SK24実測図（縮尺1／30）

番号	規模	上甕	下甕	合口	主軸方位	埋置角度	備考	切り合い
01	成人	中型／打欠	中型	覆口	N-85°-E	34.5°	上甕胴部下半を欠失する。	
02			中型		N-36°-E	47°	下甕下部のみが残る。	
03	小児		小型		N-28°-E	43.5°	下甕上部から上が欠失する。	SK11←○
04	小児	小型	小型	接口	N-82°-W	53°	検出時は上甕口縁下部が下甕内に落ちる。	
05	成人	中型	中型	覆口	N-44°-E	40°	上甕の大半が欠失する。	
06	成人		中型	単棺	N-35°-W	44°	墓壇は径1m程の円形プランを呈し、床面北西隅に斜穴を穿ち、棺を埋置する。	
07	成人	中型	中型	接口	N-25°-E	41°	墓壇は1.5×1.4m程の略方形プランを呈し、西コーナー部に斜穴を穿ち、下甕を埋置する。東半は三日月状に段をもつ。	
08	成人	中型／打欠	中型／打欠	覆口	N-26°-W	36.5°	墓壇は1.3×0.9m程の楕円形プランを呈し、南壁下に斜穴を穿ち下甕を埋置する。北半は段状を呈す。	
09	小児	—	中型	単棺	N-34°-W	28°	墓壇は0.9×0.8mの方形プランを呈し、北西隅に斜穴を穿ち、甕を埋置する。南辺に狭い段を有す。	
10	成人	中型／打欠	大型	接口	N-76.5°-E	29°	墓壇は1.6×1m程の楕円形を呈し、西壁下に斜穴を穿ち下甕を埋置する。東端に小さい段状を有す。	
11	成人	中型／打欠	中型	接口	N-72°-W	36.5°	墓壇は1.4×1m程の隅丸長方形を呈し、東壁下に斜穴を穿ち下甕を埋置する。東半に平坦な床面を残す。	○→SK03
12	小児	—	中型	単棺	N-60°-E	43°	西側が削平を受けるが、1×0.8m程の丸みの強い方形のプランをもつ墓壇の東コーナー壁下に斜穴を穿ち棺を埋置する。	

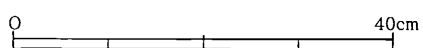
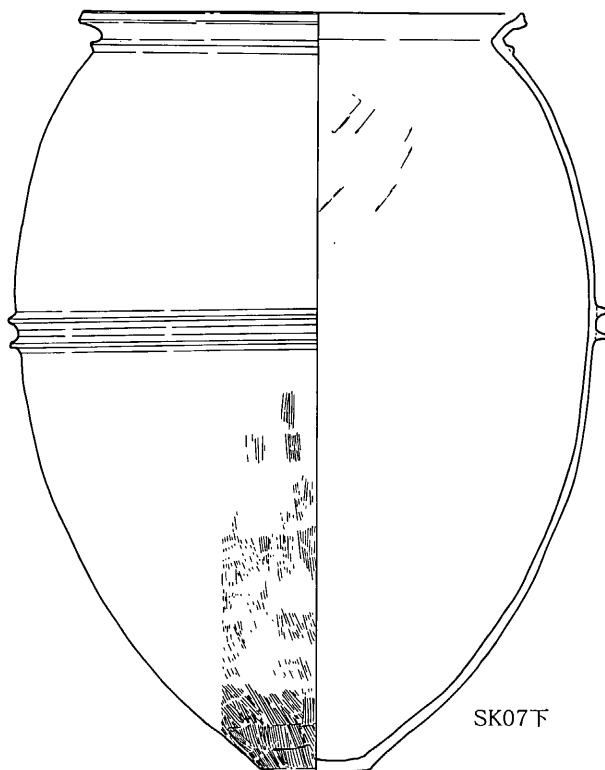
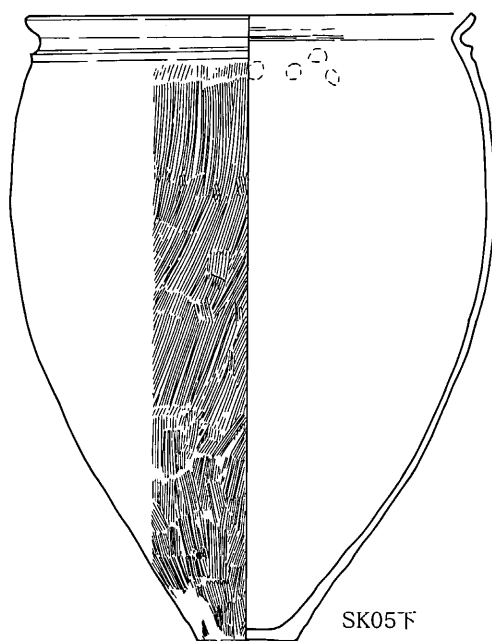
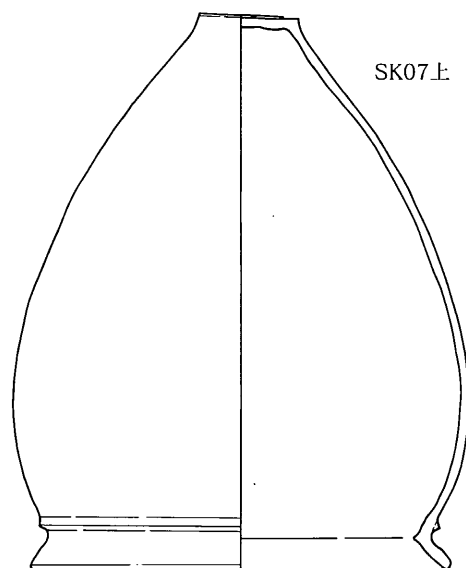
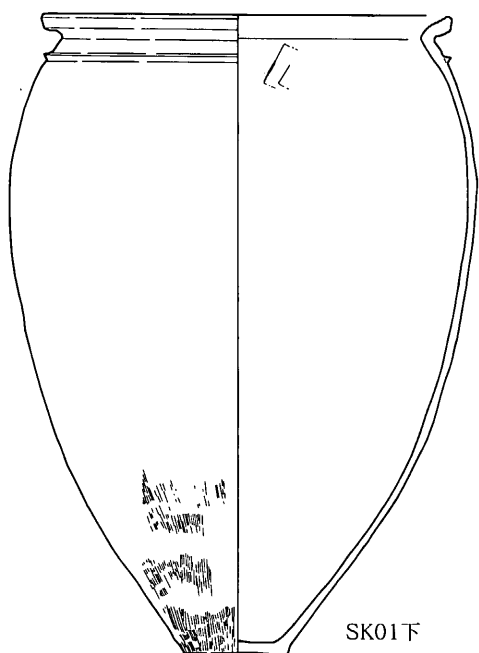
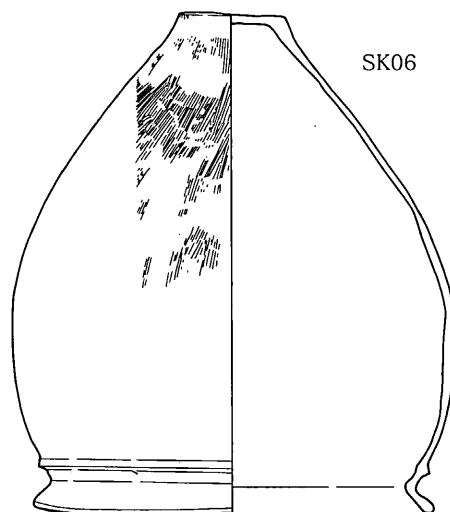
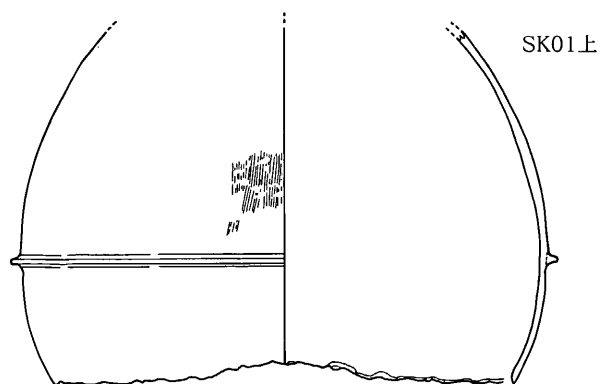
表1 甕棺墓一覧表

SK10下甕も他の土器のように強く張らず、やや下がった位置に凸帯が巡るA類である。口縁部は上部平坦面が僅かに内側へも延びる「T」字状を呈する。SK19下甕は典型的なA類の形態に、水平に延びる口縁部が付く。SK15下甕も口縁部内側が打ち欠かれているが、口縁部の屈曲の深さ等からSK19のような形態を呈していたものと思われる。Ⅱ類は、SK01下甕、SK06下甕、SK07上下甕、SK09、SK11下甕、SK12、SK14、SK19上甕がある。SK09は口縁部の屈曲角度が深く、Ⅰ類に近いのかもしれない。Ⅲa類はSK18とSK20下甕である。Ⅲb類はSK5下甕が上げられる。

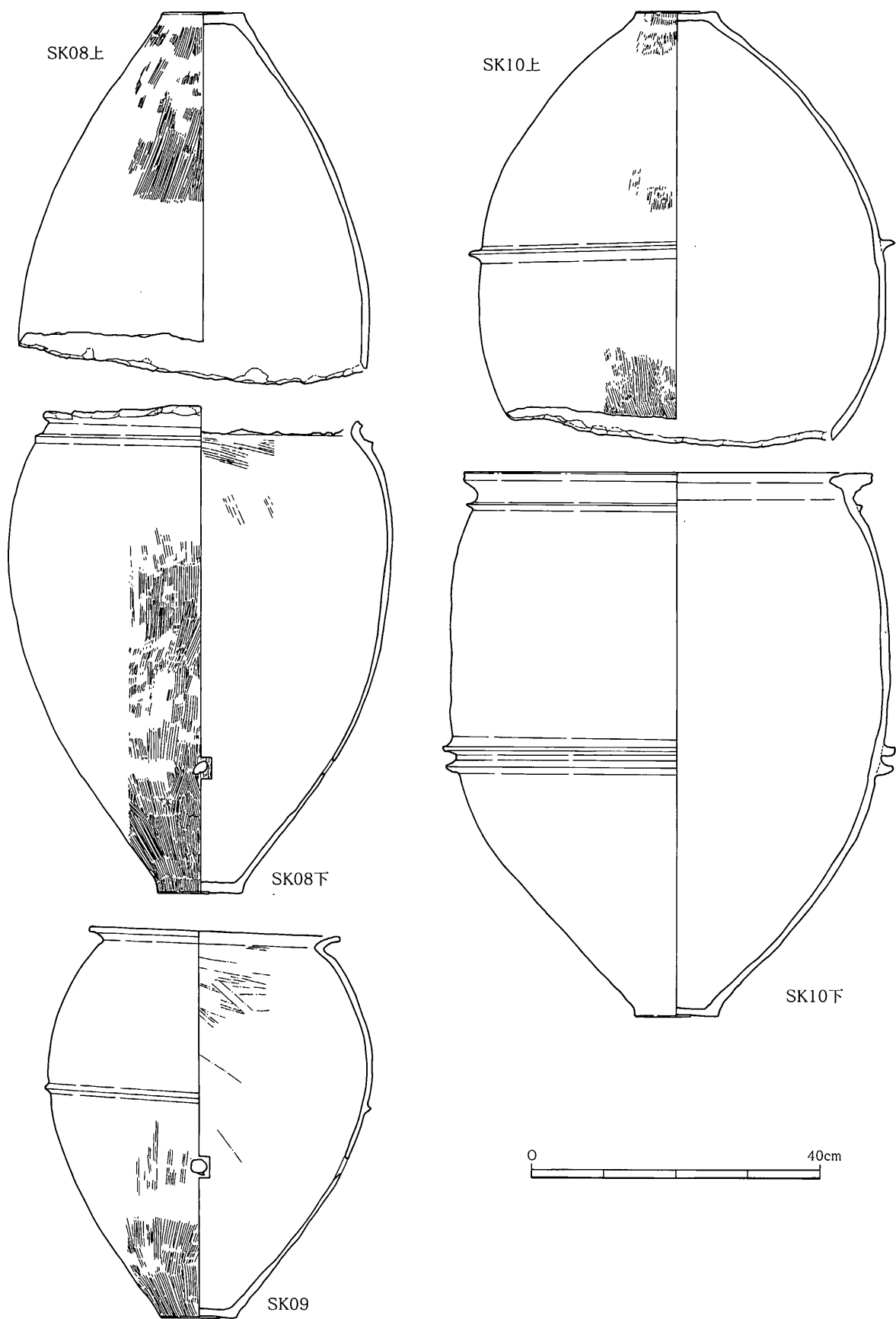
これらの分類は橋口達也氏の編年案でⅠ類がKⅢcにⅢ類がKⅣaに比定できる。Ⅱ類は口縁部が「く」字状を呈すものの、角度が浅く、A類の胴部に貼付される凸帯の位置も高いことから、Ⅰ類とⅢ類の間に位置すると考えられる。この時間軸に沿って中・大型棺の遺構配置をみると、頂部に最大規模の甕棺をもつSK16が造営され、ほぼ主軸を平行にしてSK15、SK19が南東側に隣接して造営される。その他の甕棺も南東斜面に造営されるが、等高線に対し主軸を平行に取る1群（SK14・19・06・08）がSK19の東に造営され、その南に等高線に対し主軸を直交する1群（SK20・10・03）が造営される。最も低い位置に造営されたSK05・07は等高線に対し主軸を平行に取る。

番号	規模	上甕	下甕	合口	主軸方位	埋置角度	備考	切り合い
13	小児	—	中型	単棺	N-90°-E	27°	ST4に切られ墓壇は明確ではないが、大きな規模のものではない。	ST05→○
14	小児	—	中型	単棺	N-11°-W	37°	径1.1~1.2m程の略円形プランを呈す墓壇の北壁下に、床面から一段下げて斜穴を穿ち棺を埋置する。	SK19→○
15	成人	中型	大型	覆口	N-69°-E	31°	墓壇は一辺1.8m程の略方形プランを呈し、東側に段を有す。床面は正方形に近く、西壁下斜穴を穿ち下甕を埋置する。	ST10→○
16	成人	—	大型	単棺	N-73.5°-E	16.5°	墓壇は約2×1.6mの長方形プランを呈し、床面西半から西壁下にかけ大きく斜穴を穿ち、棺を埋置する。	
17	小児	小型	小型	接口	N-88.5°-E	34°	上甕の大半は欠失する。	
19	成人	中型	中型	接口	N-67°-E	49°	墓壇は約2.3×1.7mの丸みの強い長方形プランを呈す。東側に広い段を有し、床面は正方形に近い。西壁下から斜穴を穿ち、下甕を埋置する。	○→SK14
20	小児	—	中型	単棺	N-73°-E	42.5°	墓壇は径1.1~1.2mの円形プランを呈し、西側に斜穴を穿ち棺を埋置する。	
21	小児	小型	小型	接口	N-S	33.5°	検出面から斜めに真直ぐ穴を穿ち、上下甕を埋置する。	
23	小児	小型／打欠	壺／打欠	覆口	N-80°-E	33°	攪乱の下で検出されたため墓壇は明確ではないが、斜めに穴を穿ち上下棺を埋置したものと思われる。	ST06→○
24	小児	小型	小型	接口	N-51°-E	43°	1.1×0.8m余りの楕円形プランを呈す墓壇からさらに斜めに逆円錐状の穴を穿ち、上下棺を埋置する。	ST06→○

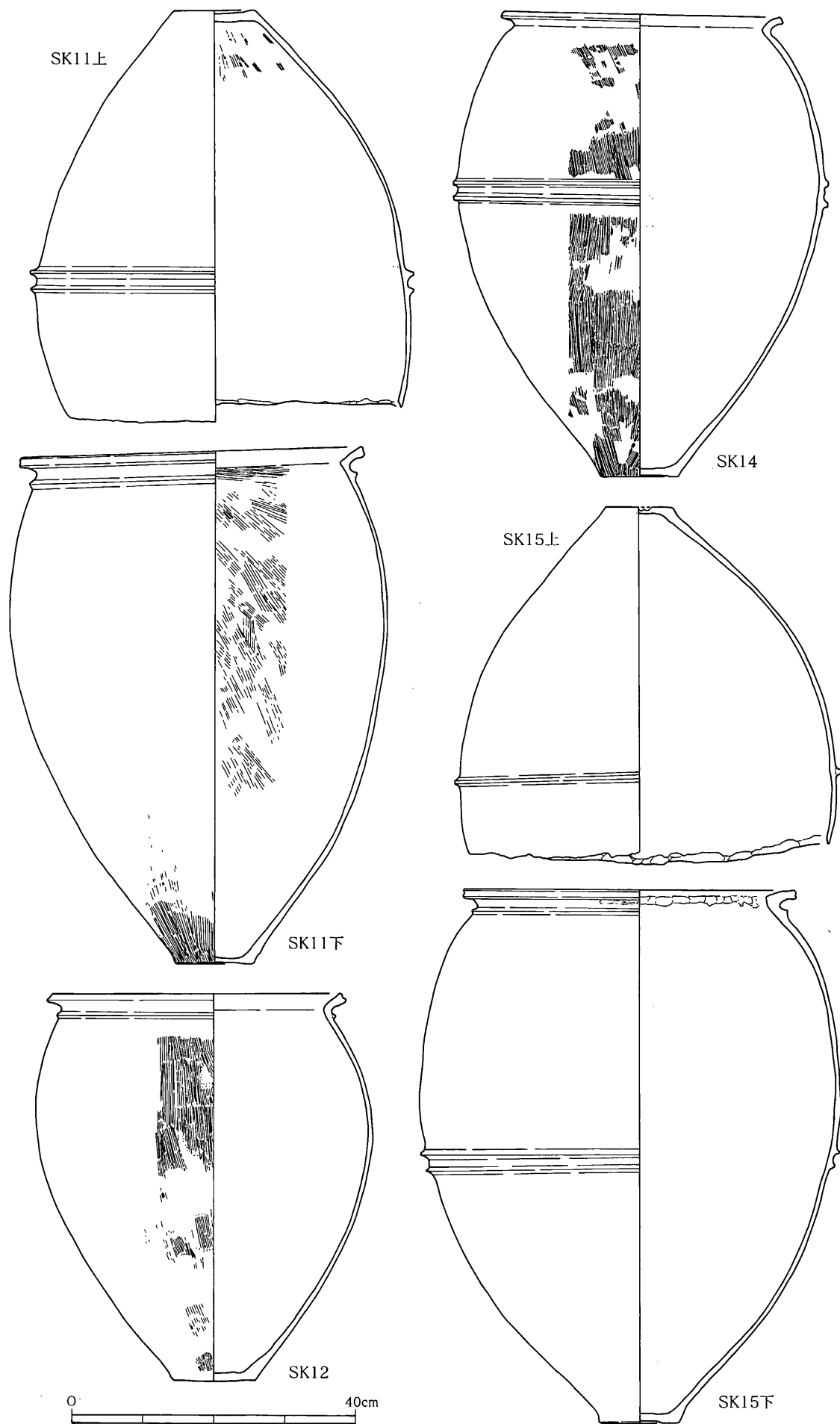
表2 甕棺墓一覧表



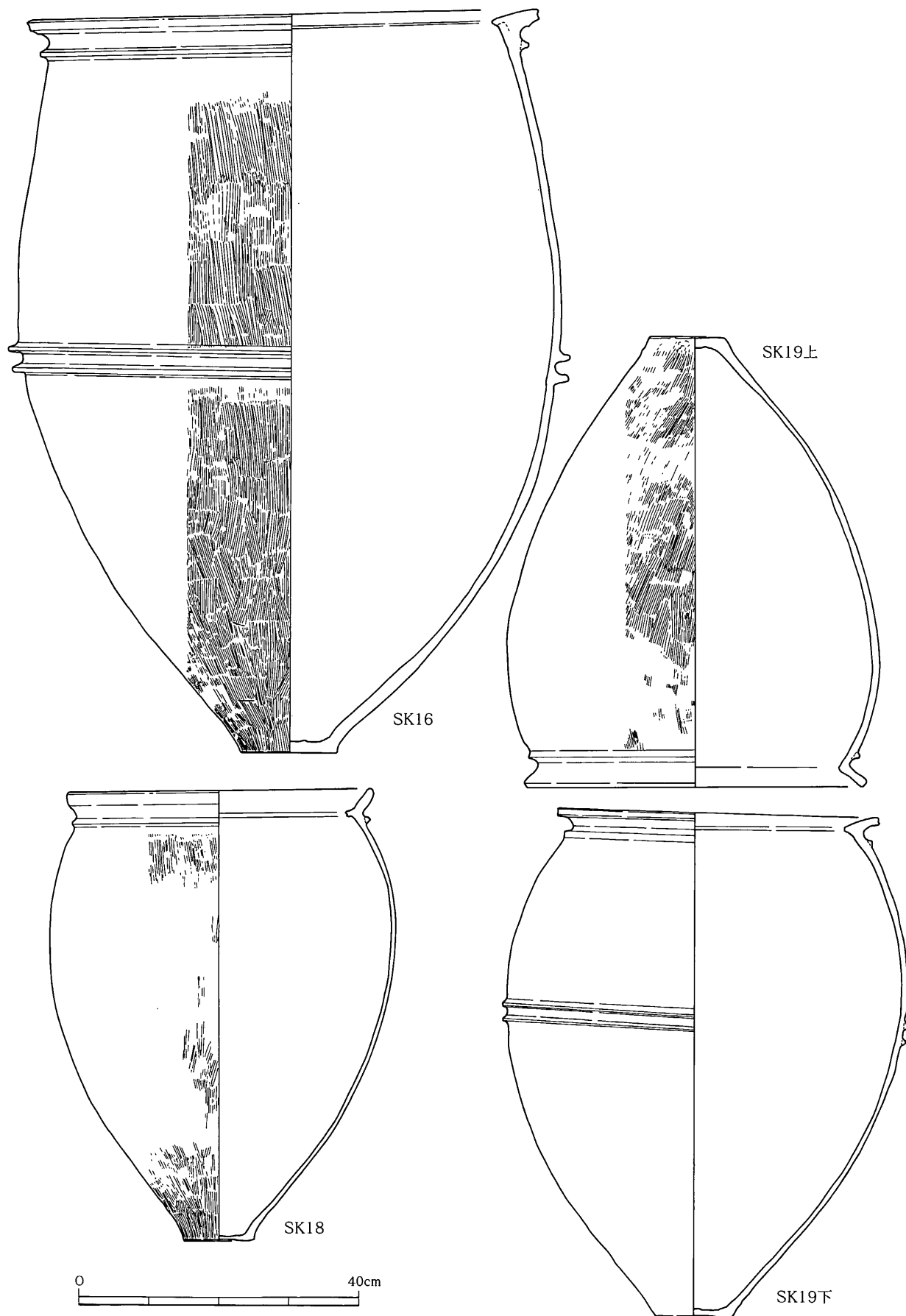
第21図 SK01・05~07甕棺実測図 (縮尺1/8)



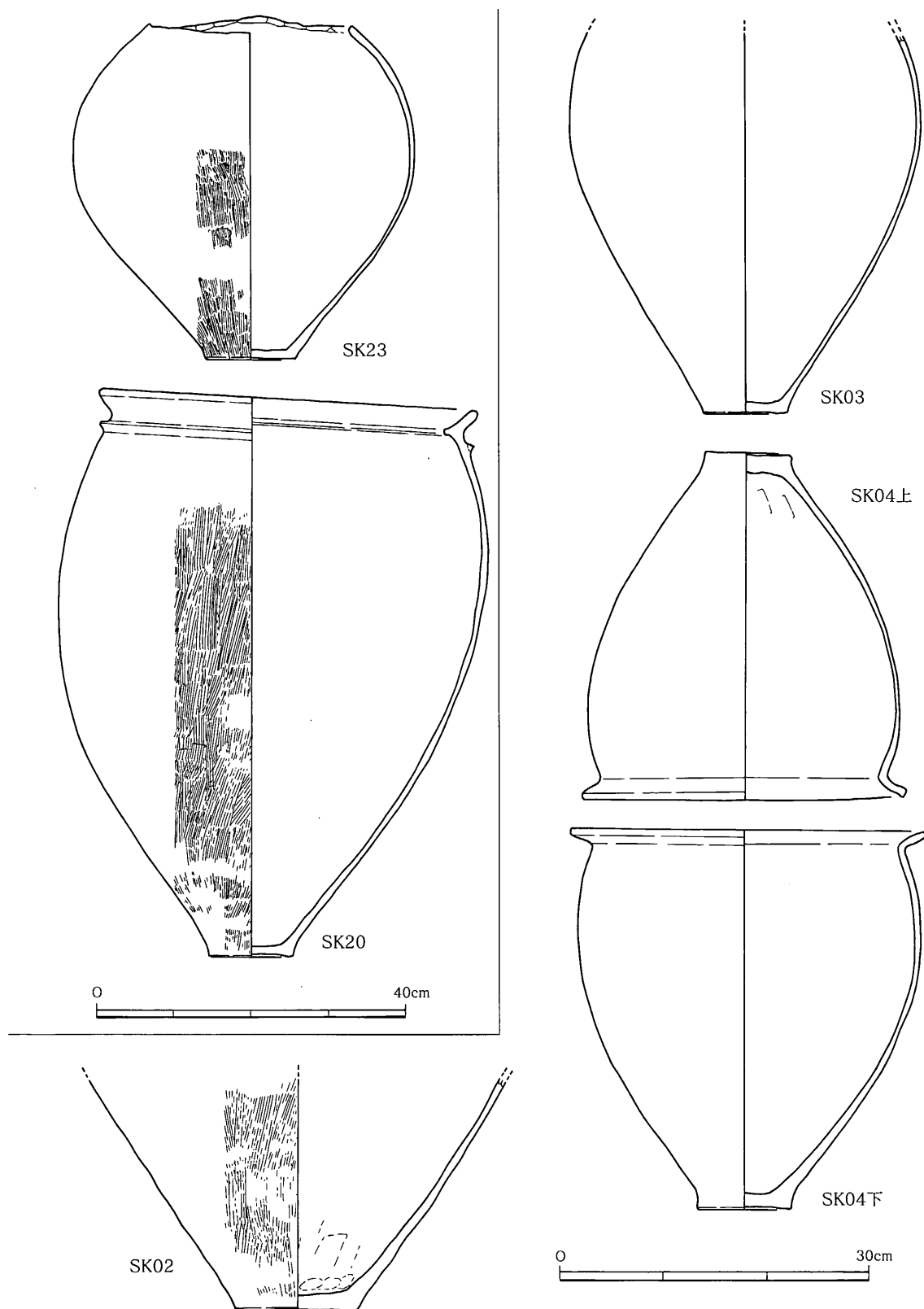
第22図 SK08~10甕棺実測図（縮尺1／8）



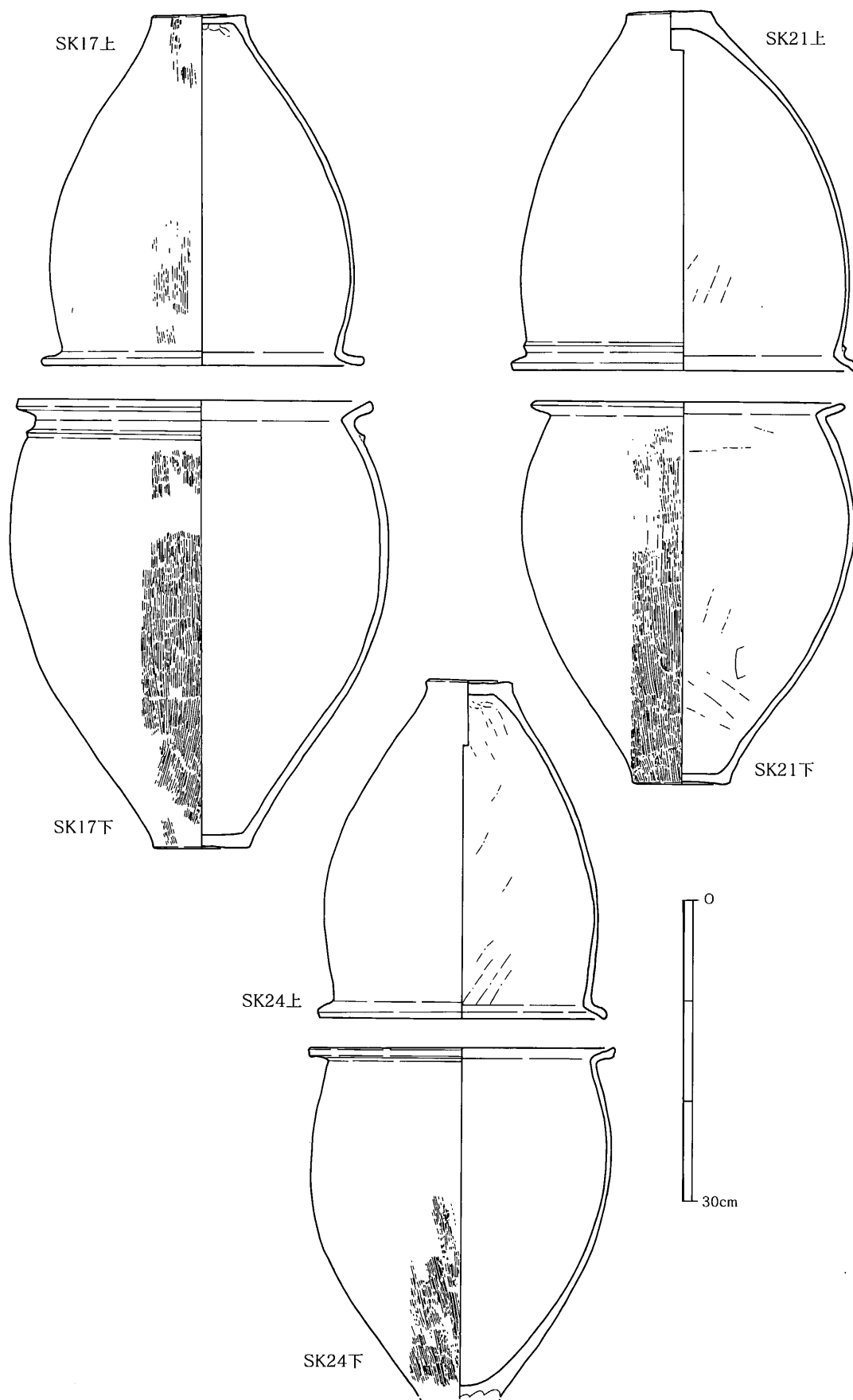
第23図 SK11・12・14・15墓棺実測図（縮尺1／8）



第24図 SK16・18・19甕棺実測図（縮尺1／8）



第25図 SK02~04・20・23甕棺実測図（縮尺1／8・1／6）



第26図 SK17・21・24甕棺実測図（縮尺1／6）

(単位：cm)

番号	上下	口径	底径	胴部最大径	器高	形 態	調 整	備 考
0 1	上			58 (凸帯含)	(37.3)	甕の底部は削平により欠失する。胴部上位から口縁部にかけて打ち欠かれ、胴部中央周辺のみが残る。胴部の張りは強く、中央のやや高い位置に1条の断面台形の凸帯が貼付される。	内外面とも器面が荒れ、明確でないが、外面に刷毛目、内面にナデが認められる。	
	下	43.5 ～45.7	10.8	49.5	68	口縁部は「く」字状を呈し、端部はやや肥厚する。胴部上位に最大径をもち、頸部直下に断面三角形の凸帯を1条貼付する。	内外面とも器面が荒れ、明確ではない。外面は口縁部にはヨコナデ、底部付近に縦方向の刷毛目が認められるにとどまる。内面は頸部直下に板ナデ状の痕跡が僅かに残る。	
0 2			11.8		(22.5)	底部付近のみ残存する。	器面が荒れるが、外面には縦方向の刷毛目、内面底部端に指頭痕、さらに胴部に至る部分に縦方向のやや強いナデが認められる。	
0 3			8.2	33.8	(37.4)	口頸部を欠失する。胴部上位が強く張り、下半が直線的に窄まり底部に至る。	器面の荒れが著しく、明瞭でないが、外面に僅かに刷毛目が確認される。	胴部外面中央に煤が付着する。
0 4	上	29.7 ～31.2	8.3	30	33.7	口縁部は「く」字状を呈し、口縁の平坦面は僅かに丸みを帯び、端部はやや強いヨコナデにより浅い凹部が巡る。胴部は上位に最大径をもつが、口径を超えない。	口縁部はヨコナデされ、内外面ともナデが認められるが、胴部内面には板ナデ状の痕跡が僅かに認められる。	
	下	34.3	9.1	33	36.9	口縁部は大きく開く「く」字状を呈す。胴部は上位に最大径をもつが、口径を超えない。	器面の荒れが著しく不明瞭であるが、胴部外面は刷毛目の後、ナデを施す。	
0 5	下	46.2 ～48.2	10.3	51.3	66.8	口縁部は「く」字状を呈し、端部はやや強いヨコナデにより浅く内湾する。頸部直下には断面三角形の凸帯が1条巡る。胴部は上位に口径を凌ぐ最大径をもつ。	口縁上部平坦面は刷毛目が施され、その後、口頸部から凸帯下までヨコナデされる。外面は刷毛目が施される。内面はナデが施され、頸部下には指頭痕が残る。	
0 6	単	42 ～43.7	11.25	46.7	53.4	口縁部は「く」字状を呈す。口唇部はやや肥厚し、丸く収まる。頸部直下に断面三角形の凸帯が1条巡る。胴部は上位に口径を凌ぐ最大径をもつ。底部は薄い。	器面が荒れ明瞭ではない。外面は口頸部から凸帯下までヨコナデされる。胴部は底部付近に僅かに刷毛目が認められる。内面は頸部下までヨコナデされ、以下、ナデが施される。	胴部中央部に煤が付着する。
0 7	上	42.8 ～45.5	10.2 ～10.6	46.2 ～47.7	59	口縁部は「く」字状を呈す。頸部直下に断面三角形の凸帯が1条巡る。胴部は上位に口径を凌ぐ最大径をもち、強く張る。底部は薄い。頸部内面の屈曲部は僅かに張り出し、あまい稜が巡る。	外面は口頸部から凸帯下までヨコナデされる。胴部は底部付近にヨコナデが認められ、外はナデで仕上げられる。内面は頸部下までヨコナデされ、以下、ナデが施される。	

表5 甕棺観察表

(単位：cm)

番号	上下	口径	底径	胴部最大径	器高	形 態	調 整	備 考
07	下	45.8 ～47.2	11.6	63.1 (凸帯含)	80.8	口縁部は「く」字状を呈す。口唇部は肥厚し、端部は凹状に収まる。胴部は中位やや上に最大径を持ち、頸部直下に1条、最大径位に2条の断面三角形の凸帯が巡るが、最大径位のは断面台形に近い形態をもつ。胴部下半も張りを持って下り、僅かにレンズ状に張る底部に至る。	口頸部はヨコナデされ、胴部上半は刷毛目の後、ナデが施され、底部付近は刷毛目の下にタタキの痕跡が認められる。内面はナデにより仕上げられるが、板ナデ状の痕跡が認められる。	
08	上	打欠	11.4		51.8	胴部上位の最大径をもつと思われる部位から打ち欠く。打欠部分から緩やかに窄まり底部に至る。	外面は下位に縦方向の刷毛目が残る、内面はナデで仕上げられる。	
	下	打欠	11.7	53.3	68.1	口縁部を打ち欠くが、「く」字状を呈すものである。頸部直下に断面三角形の凸帯が1条巡る。胴部は上位に口径を凌ぐ最大径をもつ。頸部内面の屈曲部はあまい稜が巡る。胴部下位には23×15cmの外からの穿孔がある。	外面は刷毛目を施し、さらに胴部上半部は刷毛目をナデ消す。内面は全体にナデで仕上げられるが、胴部上位にはナデの前の刷毛目が残る。	
09	単	35.3 ～37	10.4	45.5	54.6	口縁部は強く折れる「く」字状を呈す。胴部は中位やや上に最大径を持ち、やや強く張る。胴部中ほどには1条の断面三角形の凸帯が巡る。胴部下位に21×18cmの外からの穿孔がある。	口頸部はヨコナデされ、胴部上半は刷毛目の後、ナデが施され、底部付近は刷毛目が残る。内面はナデにより仕上げられるが、板ナデ状の痕跡が認められる。	
10	上	打欠	11.3	59 (凸帯含)	59.7	口縁部を打ち欠く。胴部は中央近くに最大径をもち、強く張る。最大径位にやや幅広の断面三角形の凸帯がやや下向きに貼付される。胴部下半も張りを持って下り、全体に球に近い形態を呈す。	外面は刷毛目の後、ナデで仕上げられるが、胴部上位のみ刷毛目が残る。内面はナデで仕上げられる。	
	下	54 ～57	11.55	62.6 (凸帯含)	76	口縁部は「T」状を残し、端部は凹状を呈す。口縁部下に断面三角形の凸帯を1条巡らす。この部分から緩やかに張り、直線的に立つ胴部上半に続く。さらに窄まり底部に続く胴部下半との境には二条の幅広の凸帯が巡り、上方は断面台形、下方は断面三角形を呈す。	口縁部はヨコナデされ、内面はナデで仕上げられる。外面は器面が荒れ、明瞭ではないがナデが認められる。	
11	上	打欠	11.4	43.3 (凸帯含)	58.5	口縁下より打ち欠く。胴部上位に最大径をもち、この部分に2条の断面三角形の凸帯が巡る。胴部下半は緩やかに窄まり、僅かに上がる底部に至る。	内面はナデで仕上げられるが、底部に刷毛目が残る。外面は器面が荒れ、明瞭ではないがナデが認められる。	
	下	48.3 ～50	11	53.8	73.5	口縁部は「く」字状を呈す。口唇部は僅かに肥厚し、端部は浅い凹状に収まる。胴部は上方に最大径を持ち、口縁部直下に1条の断面三角形の凸帯が巡る。最大径に対し器高が高く、スリムな形態を呈す。	外面は口縁部から胴部上半部まで器面が荒れ調整は不明である。下半部も明瞭さを欠くが、ナデが認められ、底部近くには刷毛目が残る。内面は口縁部がヨコナデされ、胴部は刷毛目が施された後、ナデで仕上げられる。	

表6 壺棺観察表

表 7 壺棺観察表

(単位：cm)

番号	上下	口径	底径	胴部最大径	器高	形 態	調 整	備 考
1 2	単	40 ～41.5	11.5	47.5	55.1	口縁部は「く」字状を呈し、厚手で口唇部はさらに肥厚する。頸部直下に断面三角形の凸帯が1条巡る。胴部は上位に口径を凌ぐ最大径をもち、やや強く張る。	口縁部はヨコナデされ、外面胴部は刷毛目が施される。内面胴部はナデで仕上げられる。	外面胴部下半に煤が付着。また、内面胴部にも炭化物が付着する。
1 4	単	37 ～40	11.1	53 (凸帯含)	66.2	口縁部は外反状に折れ、「く」字状を呈す。胴部は中位やや上に最大径を持ち、強く張る。胴部中ほどには2条の断面台形の凸帯が巡る。	口頸部、凸帯部はヨコナデされ、胴部上半は刷毛目の後、ナデが施され、底部付近は刷毛目が残る。内面はナデにより仕上げられるが、板ナデ状の痕跡が認められる。	
1 5	上	打欠	9.4		50.7	胴部上半部を打ち欠く。胴部中位に最大径をもつと思われ、この部分に断面「コ」字状の凸帯が巡る。底部は薄い。	外面は器面が荒れ不明瞭であるが、ナデが若干認められる。内面はナデ仕上げられる。	
	下	46.9	11.2	59.45	75.95	口縁部は強く折れる「く」字状を呈し、さらに途中から水平整形され、端部は凹状に収まる。内面の頸部屈曲部端はきれいに打ち欠かれる。胴部中位に最大径をもち、強く張る。頸部と胴部最大径の直下に、それぞれ1条と2条の断面三角形の凸帯が巡る。胴部下半も張りを持って下り、やや外反して底部に至る。	口縁部、凸帯部はヨコナデされ、胴部は内外面ともナデで仕上げられる。	
1 6	単	72.3 ～73.4	13.9	80.6	10.7	口縁部は厚手で、逆「L」字状を呈する。口縁部下と最大径位にそれぞれ1条と2条の断面台形の凸帯が巡る。最大径は胴部中位にあり、口縁部からこの部分まで直線的に下る。胴部下半は張りを持って下り、僅かに外反して底部に至る。	口縁部、凸帯部はヨコナデされ、胴部外面は刷毛目が施される。胴部は内面はナデで仕上げられる。	
1 7	上	32	9.35	30.15	34.7	口縁部は「く」字状を呈すが、内側の傾斜は弱い。胴部は上位に最大径をもつが、口径を上回らない。張りは比較弱い。	口縁部はヨコナデされ、内面はナデで仕上げられる。外面胴部は器面が荒れ不明瞭であるが、刷毛目が施されている。	
	下	35.25	9.8	37.4	44.5	口縁部は「く」字状を呈し、直下に1条の断面三角形の凸帯が巡る。胴部は上位に最大径をもち強く張る。	口縁部はヨコナデされ、胴部内面はナデで仕上げられる。胴部外面は刷毛目が施される。	最大径位付近に煤が付着する。
1 8	単	44～46	10.2	49.5	68	口縁部は内側に強く傾斜する「く」字状を呈す。口唇部は丸く収まるが上方がやや突出し、内面も「コ」字状に突き出る。口縁直下には断面三角形の凸帯が貼付される。胴部は上位に最大径をもち、強く張る。	口縁部、凸帯部はヨコナデ、内面胴部はナデで仕上げられる。外面胴部は刷毛目が施される。	最大径位付近に煤が付着する。
1 9	上	47 ～49	10.7	53	65.1	口縁部は「く」字状を呈し、直下には断面三角形の凸帯が貼付される。胴部上位に最大径をもち強く張る。胴部下半は緩やかに窄まり底部に至る。	口縁部、凸帯部はヨコナデ、内面胴部はナデで仕上げられる。外面胴部は刷毛目が施される。	

(単位：cm)

番号	上下	口径	底径	胴部最大径	器高	形 態	調 整	備 考
1 9	下	45.9	10.6	58 (凸帯含)	72	「く」字状を呈す口縁部は内面に「コ」字状に張り出す。胴部は中ほどに最大径をもち、球状に強く張る。口縁下に1条の断面三角形の凸帯が、最大径位に2条のあまい断面台形の凸帯が巡る。	口縁部、凸帯部はヨコナデ、内面胴部はナデで仕上げられる。外面胴部は器面が荒れ、不明瞭であるがナデで調整される。	
2 0	単	49 ～50.5	10.9	55.7	74	口縁部は内側に強く傾斜する「く」字状を呈し、口唇部は丸く収まる。内面は「コ」字状に突き出る。口縁直下には断面三角形の凸帯が貼付される。胴部は上位に最大径をもち、強く張る。	口縁部、凸帯部はヨコナデ、内面胴部はナデで仕上げられる。外面胴部は刷毛目が施される。	
2 1	上	32 ～34.1	8.4		36.7	口縁部は「く」字状を呈し、直下に1条の断面三角形の凸帯が巡る。胴部は上位に最大径をもつが、口径を超えない。全体に丸みの強い胴部である。	口縁部はヨコナデされるが、胴部外面は器面が荒れ、調整不明。内面はナデで仕上げられるが、上半に板ナデの痕跡が残る。	
	下	29.9 ～30.85	9.6		37.8	口縁部は「く」字状を呈すが、内傾は弱い。胴部は中位上方に最大径をもち強く張る。	口縁部はヨコナデされ、胴部内面はナデで仕上げられるが、板ナデの痕跡が多く残る。胴部外面は刷毛目が施される。	
2 3	下	打欠	11.7	44.35	(44.7)	頸部から打ち欠く。胴部は中位上方に最大径をもち、下半は直線的に窄まる。	外面上半は器面が荒れ不明であるが、下半は刷毛目が残る。内面はナデが施され、板ナデの痕跡が残る。	
2 4	上	27.8 ～29.4	8.5	27	33.4	口縁部は「く」字状を呈し、端部が僅かに上方に跳ねる。胴部は最大径を中位上方にもつが、口径を上回らない。	口縁部はヨコナデされる。外面胴部は器面が荒れ、不明瞭であるが、僅かにナデが認められる。内面もナデで仕上げられるが板ナデの痕跡が残る。	
	下	30.2			(35.2)	口縁部は「く」字状を呈すが、内傾が浅く、逆「L」字状に近い。最大径を胴部中位上方にもち、比較的強く張る。底部は欠失する。	口縁部はヨコナデされ、外面胴部は器面が荒れて不明瞭であるが、刷毛目が施される。内面はナデで仕上げられる。	

表 8 壺棺観察表

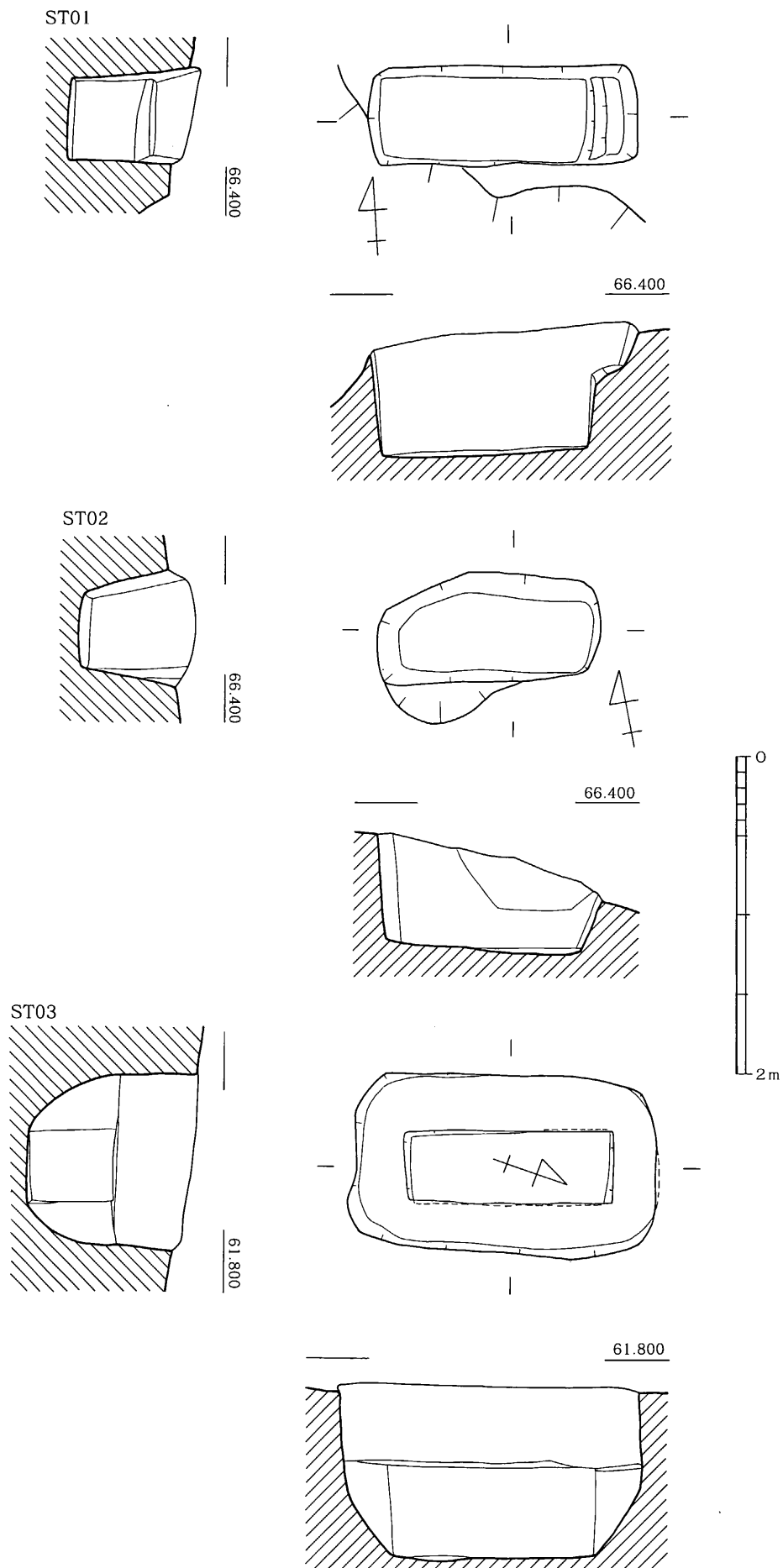
(2) その他の墓

木棺墓・土壙墓はST04を除く11基が検出された。形態はバラエティーに富んでいる。明確に木棺墓と思われるのは棺の痕跡が認められたST03・09、木口や側板を設置した掘方が認められたST08がある。また、ST07も一方の木口側に粘土が何かを押さえるように検出された状況から木棺墓としておきたい。ST01・02・05・06・11は主体が幅の狭い長方形プランを呈す掘り込みとなっており、土壙墓とするのが妥当と考える。ST12は小型の土壙墓である。ST10はいわゆる横口式の土壙墓と考えられる。ST05はSK13に、ST06はSK24・23に切られるが、特に後者の状況はST06を意識した小児棺の配置であり、甕棺墓と造営の時期的な差はあまり無かったのではないかと推測される。また、木棺墓・土壙墓の主軸も等高線に平行なものと、直交するものがあるが、隣接する甕棺の主軸方向の群とはほぼ同じ方向を示す。ST04は墓壙とその床に棺壙をもつ二段掘り込みの墳墓である。墓壙の東側壁下には側板の掘り込みが認められ、西壁下の北側にも確認された。木口部の掘り込みは確認されなかったが、側板は墓壙側壁下全体に掘り込みが延びることから、側板で木口を挟み込む形態の木槨がほぼ墓壙いっぱい設けられていたと推定される。さらに墓壙中央は棺が掘り込まれ、近い例では永岡遺跡2次調査1号、9号木棺墓（筑紫野市教育委員会1990）のように木蓋が架けられていたと思われる。この構造から棺部の掘り込みの上に組み合わせ式の木槨が作られていたと考えられる。時期は橋口達也氏の編年によるKⅣaに比定されるSK13に切られるST05が上部に載る。

(単位：cm)

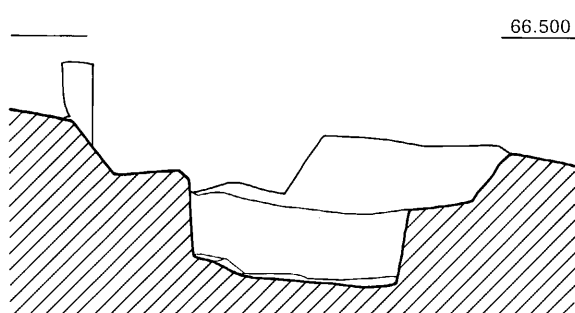
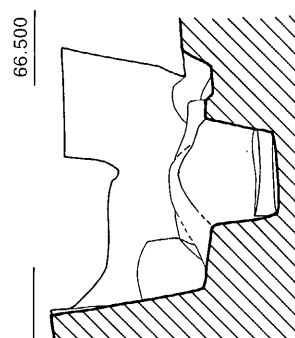
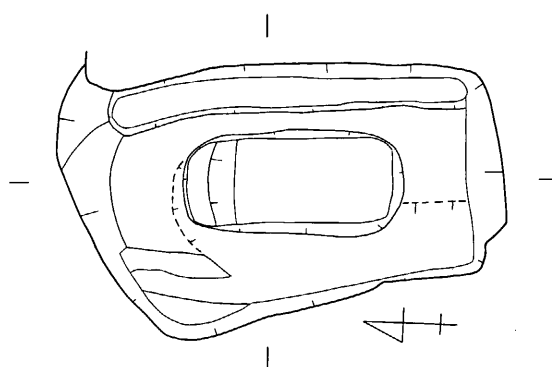
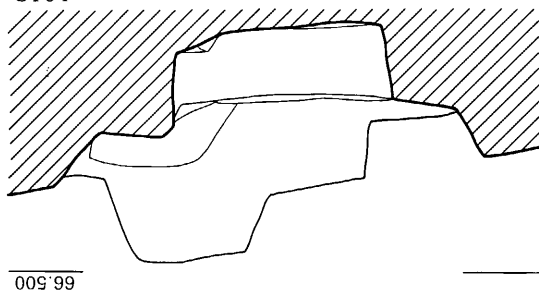
番号	上面規模	床面規模	深さ	主軸方位	備 考	切り合い
0 1	170×63	130×52	160	N-2°-E	東側に18×50cmの平坦面を有す。	
0 2	140×68	121×45	72	N-79°-W	東側プランが窄まる。	
0 3	115×190	125×45	110	N-72°-E	床面から55cmの位置で棺の形状を確認。墓壙壁体はこの位置付近から緩やかに内湾して床面に至る。	
0 4	235×145	135×45	125	N-3°-E	2段掘り込みで、上段側端に側板の掘り込みを残し、木郭が作られる。中央部はさらに掘込まれ北側に甘い段を有す。	
0 5	180×63	138×40	73	N-85°-W	壁体は緩やかに内湾して床面に至る。	
0 6	185×30.5	118×38	125	N-80°-E	2段掘り込み。	
0 7	114×86	87×62	88	N-63°-W	西木口側に、床面より20cm程上に約10～15×50×10cmの粘土を検出した。	
0 8	210×160	122×42	115	N-32°-W	2段掘り込みで、両側板と北側の木口の掘り込みが残る。木棺は東側壁に沿って立てられ、西壁との間は土が充填される。	
0 9	212×114	132×46	130	N-80°-E	床面中央に木棺が設置され、周囲は土で充填される。	
1 0	170×178	130×67	90	N-11°-W	東側に約80×55cmのテラスを持ち、床面との比高は8～5cm程度と小さい。	
1 1	118×60	92×28	86	N-82.5°-W	床面東端が僅かに下がる。	
1 2	70×30	67×29	22	N-81°-E	床面は東から西に僅かに傾斜している。	

表9 土壙墓・木棺墓一覧表

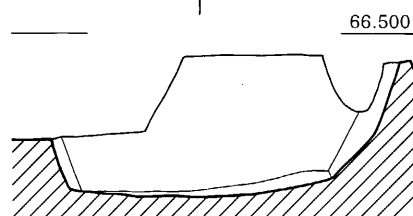
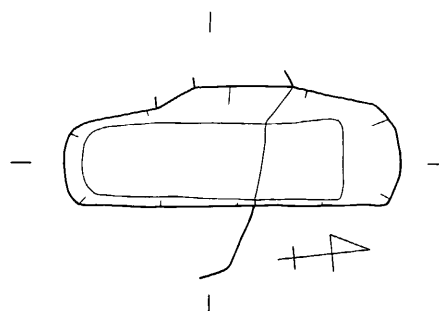
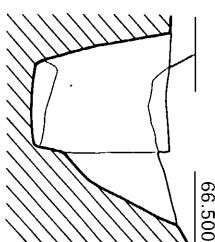


第27図 ST01~03実測図 (縮尺1/40)

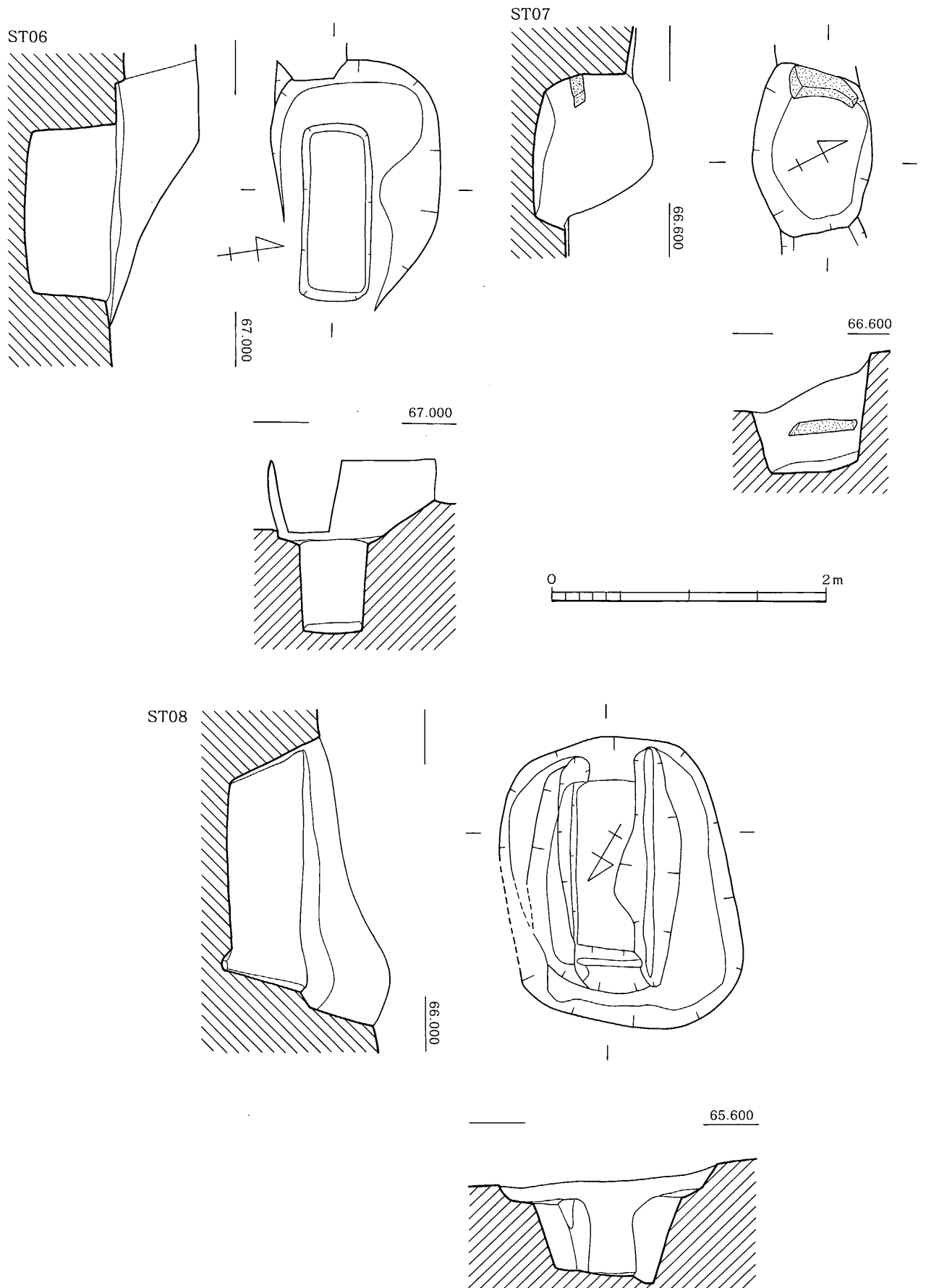
ST04

 1.2 m

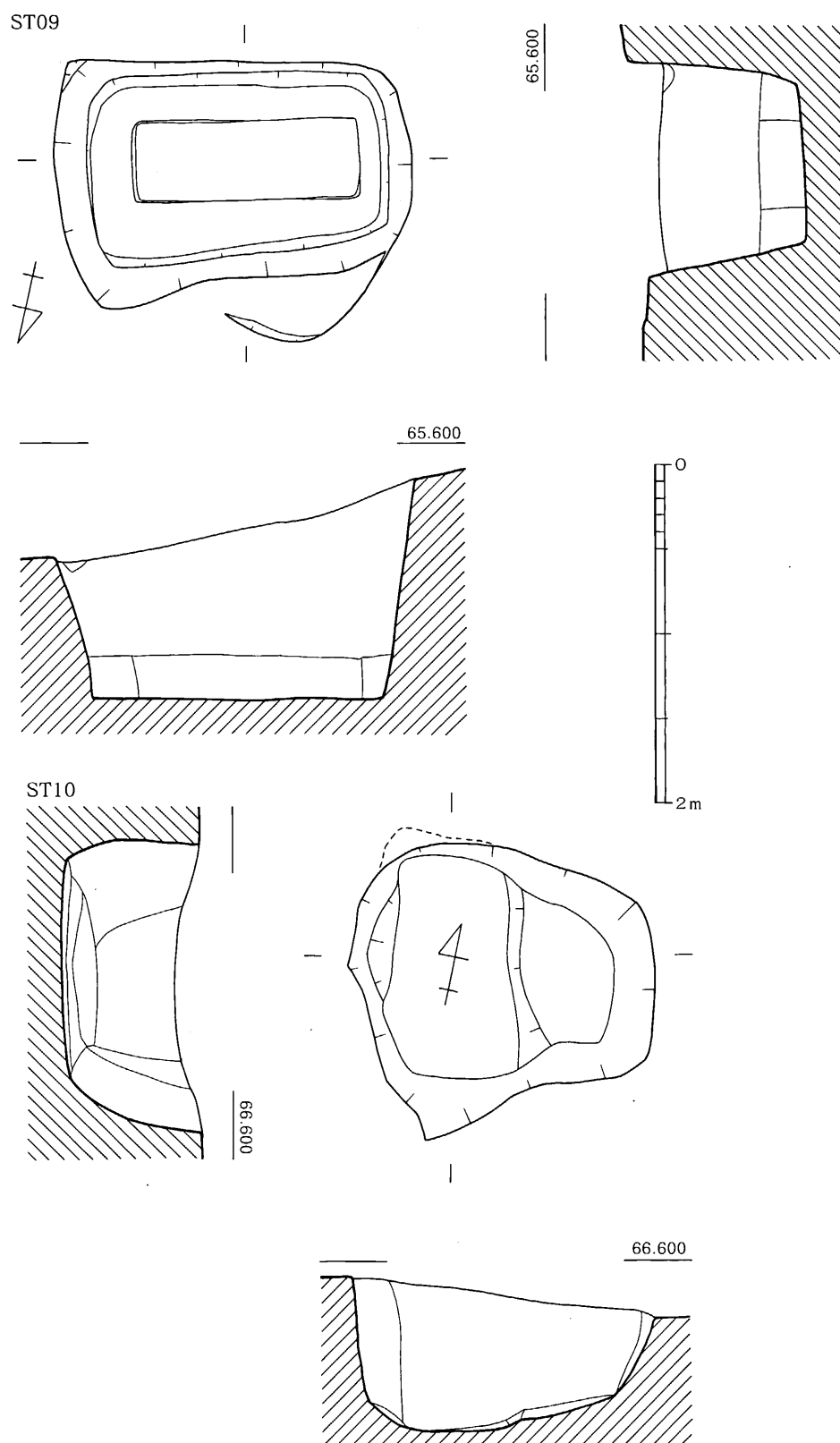
ST05



第28図 ST04・05実測図（縮尺1／40）



第29図 ST06~08実測図 (縮尺 1/40)



第30図 ST09・10実測図（縮尺1／40）

(3) 土墳

SD01はST08に切られる土墳である。幅約1.1m、残存長2.5mを測るが、本来は長さ2.2m程の不整長楕円形プランを呈していたと思われる。主軸はN-27°-Wにとり、床面は北から南側へ向かって傾斜し、南端に甕棺の底部が残る。

IV まとめ

(1) 柚ノ木古墳群について

1号墳は大破しているが、単室の横穴式石室で、羨道部を持たないと推定される。時期を確定する遺物に乏しいが、無蓋高坏は体部がやや開き、中位に巡る沈線を境に、内側へ緩やかに窄まる形状を呈する点、下半部に櫛状工具による刺突が施される等から、小田富士雄編年Ⅲa期のものと考えられ、石室形態から推測される時期とも矛盾しない。2号墳は竪穴系横口式石室を内部主体とする、径16mを測る円墳で、外側に周溝が巡る。時期を確定しえる資料は見られなかった。石室は奥幅106cm、前幅75cm程度、長さ240cmを測る、整った羽子板状を呈す。石室の高さは、最もよく残っている壁部分で74cm、床面から93cmで、奥壁との比高差は16cm程である。奥壁の一枚石の上に更に多くの石材が積まれていたとは考えにくく、最もよく残っている部分はかなり天井に近い部分ではないかと思われる。

壁体の裏には幅3mの掘方いっばいに控えの石材が詰れる。この部分を見る限りにおいては、いわゆる竪穴系小石室の影響が考えられるが、前庭側壁や柚石の設置を考えるとやや新しい様相も見ることができるといえる。

柚ノ木1号墳と2号墳は丘陵の同じ小尾根部に立地するが、その連続性は考えがたい。対面する宮地岳(339m)に位置する阿志岐古墳群A群3号墳(筑紫野市教委1972)は、石室が長さ2.3m、幅1mと小型であるが、玄門には楣石の架構がみられ、石室高は最もよく残っている奥壁で135cmを測る。竪穴系横口式石室に後続する横穴式石室である。宮地岳に所在する竪穴系横口式石室としては南麓に位置する峰古野1号墳(筑紫野市2001)がある。

柚ノ木古墳群が位置する開析され、複雑に入り組む丘陵部と狭長な平野部を挟み東側に位置する宮地岳は数多くの遺跡が所在する地域である。特に山麓には数多くの古墳が所在する。宝満川に面する西麓だけでも南から天山古墳群(6基)、老松神社古墳群(2基)、脇道古墳群(4基)、阿志岐古墳群A群(10基)、阿志岐古墳群(50基)、杉の谷古墳群(4基)の外、単発で数基の古墳が確認されており、その実数は現在確認されている基数を遥かに上回るといわれる。一方、西側の丘陵部の宝満川に面した地域では、最も北に塚口古墳群(12基)、柚ノ木遺跡の西にある吉ヶ浦古墳群(3基)があるほかは、古墳群として括っているものの、古墳自体は散在する傾向にある。狭長な宝満川の西岸と東岸では古墳の数には大きなひらきがある。今後、平野部の集落遺跡等のあり方も含め検討を行う必要がある。

(2) 弥生時代の墓地について

柚ノ木2号墳下より甕棺墓および、木棺墓、土墳墓、木槨墓からなる墳墓群はそのST06とSK23・24の関係や、主軸方向が最寄りの甕棺、その他の墓を問わず幾つかの纏まりをもつ点などから、それぞれの別々の時期に造営されたとは考えにくく、ひとつの墓地として考えてよいと思われる。また造営期間も同様の理由で長いものではなく、立地的に最も高い所に大型の

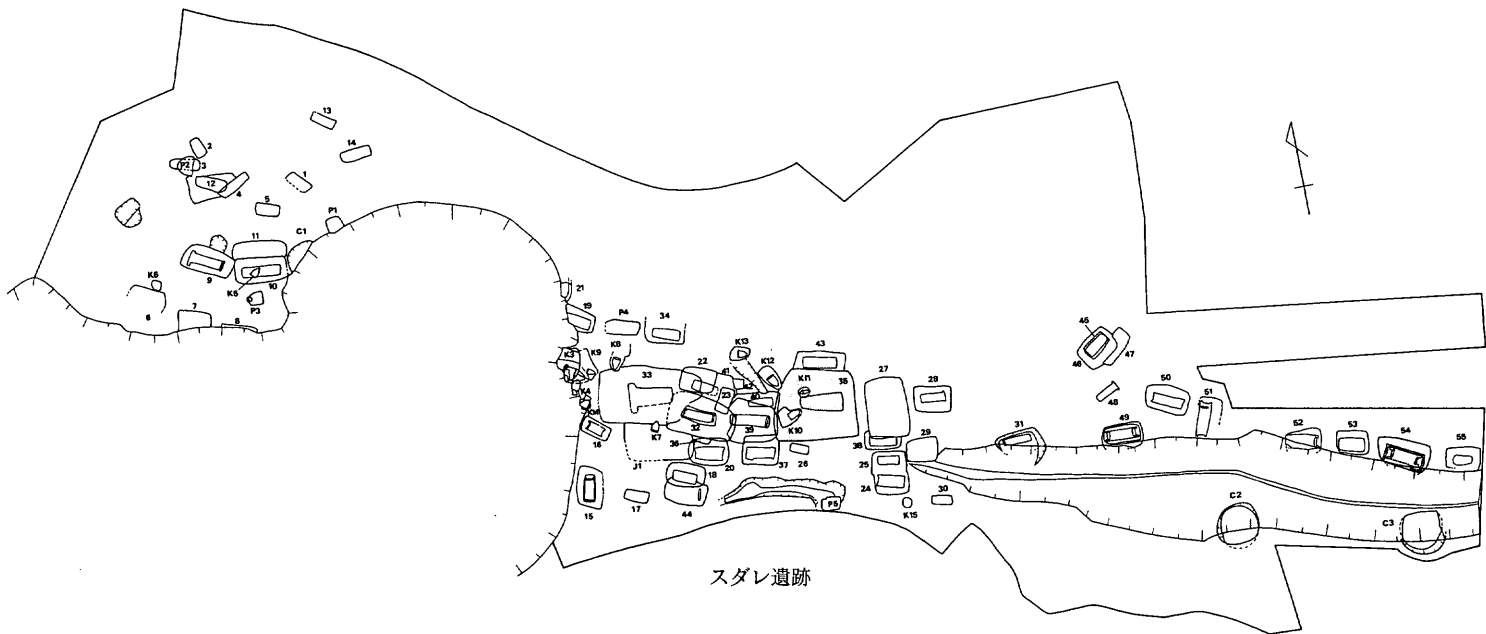
甕棺を埋置するSK16を中心に、その南側斜面に造営された墓地群と考えられる。墳墓はSK15・16・19等の等高線に直交する主軸を持つグループ、ST03～05やSK06・08等の等高線に平行する主軸を持つグループ、ST01・02やSK10・11等のSK15・16・19と同方向の主軸を持つグループが、柚ノ木2号墳主体部が造られる頂部を「コ」字状に囲むように造営され、さらにその下方の東斜面にST08・09、SK07等が営まれる。時期は立岩式の段階から造営が始まり、中期末から後期初頭を中心とする時期が造営のピークと考えられる。小さな谷を挟み西側の丘陵部には吉ヶ浦遺跡がある（太宰府市1992）。高雄団地住宅地造成に伴って昭和46年に福岡県教育委員会により発掘調査が行われた。弥生時代の主な遺構としては竪穴式住居跡10棟、木棺墓18基、甕棺墓78基がある。甕棺墓は中期後半から後期初頭を主体とするもので、木棺墓は甕棺との切りあい関係から中期中頃に位置づけられている。時期的には、同時期の墳墓群であり、柚ノ木遺跡の古い土取りにより失われたと思われる数を想定しても吉ヶ浦遺跡の半分にも及ばないのではないと思われる。柚ノ木遺跡は吉ヶ浦遺跡に小谷を隔てて隣接すること、時期がほぼ同じこと、数が遥かに下回ること等の比較が可能で、このことから、吉ヶ浦遺跡を母集団とするする一集団の墳墓で、その長としてSK16が想定される。

（3）木槨墓について

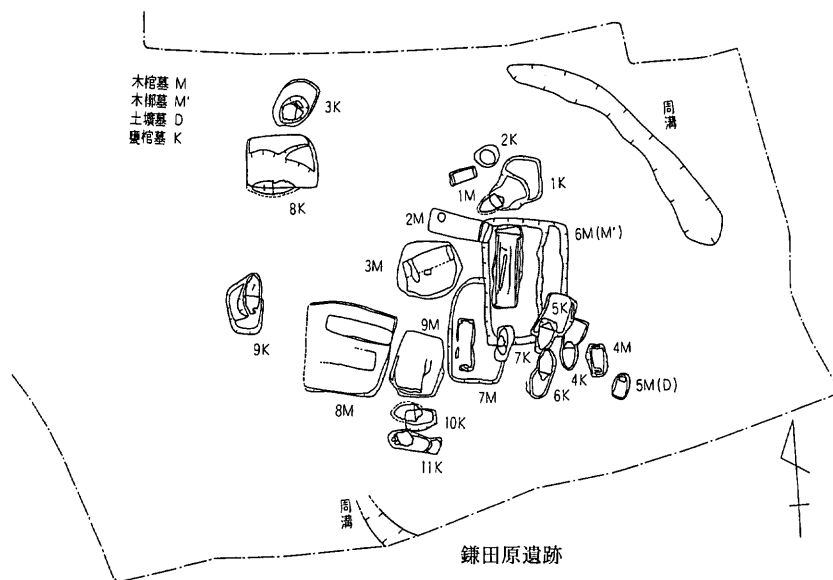
弥生時代の木槨墓については田中清美氏が「墓壙の中に板あるいは角材を用いて蓋部・木口部・側部・床部と箱状の施設を構築したもので、槨内の木棺に被葬者が埋納された後に蓋を閉じるものとする。」という定義の基に弥生時代の木槨墓を分類され、系譜を求められている（田中清美1997）。ST04は田中氏の分類に言うⅡ型木槨に属すと考えられる。Ⅱ型木槨は「蓋部・木口部・側部から構成された長方形を呈する箱型の木槨であるが、墓壙の底面を直接床部にしたものである。床部の中央を掘り下げて棺壙としたものや礫を敷き積めたものがある。」とされる。嘉穂郡穂波町のスダレ遺跡D35号墓（穂波町教育委員会1976）が墓壙床面に棺壙を設ける点等は類似しているが、木槨が墓壙全体に及ぶ点や、棺部に土壙が用いられる点などが柚ノ木遺跡ST04とは異なる。特に後者の点は先の定義に言う「郭内の木棺に被葬者が埋納された後に……」の「木棺」とは異なる形態の棺が採用された部分が問題となる。この点については棺を覆う空間の存在そのものが問題であって、そこに採用される棺の種類は在地の影響が出ても差支えないのではないだろうか。黄曉芬氏は棺・槨・室をそれぞれ定義づけした上で、東アジア全体として墓制の比較検討が行われている。黄氏は槨について「主に板材や角材を用いて、棺を入れるための空間の外枠を組み立てたもので、棺全体を覆った、底板を伴う構築物である。副葬品を入れるための余分の空間を併せ持つのも重要な特徴である。……」とされ、田中清美氏がⅡ型としたものについては「……確かに墓壙を増大させる傾向があり、棺を囲む板材組みの施設の存在が確認される。しかし、底板は持たず、棺外に副葬品が置かれることもない。したがって、これらの墓制は棺墓の中で理解してよいと考えられる。」とされる（黄曉芬2001）。しかし、棺の上部または周りに空間を作るということは、それまでの在地の墳墓とは根本的に異なる概念の墓制である。このことから別の名称を与えても差し支えないのではないだろうか。木槨墓という名称自体は中国を中心に系統的な研究も進められているが、中国本土やその直接的影響下の楽浪地域と我国では、その墓制の性格は変容せざるをえないであろう。

弥生時代中期の木槨墓は、数は少ないものの北部九州を中心に分布し、福岡県スダレ遺跡（穂波町教委1976）、比恵遺跡（福岡市教委1983）、鎌田原遺跡（福島日出海1993）、佐賀県吉野

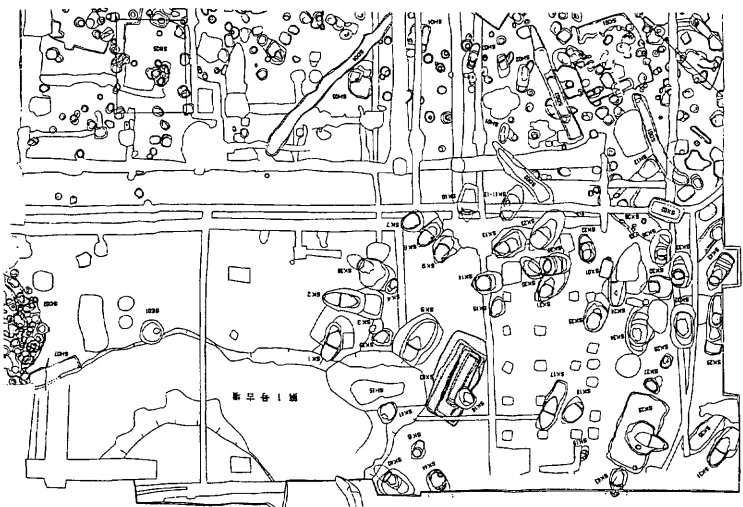
アミ掛部＝木柵墓



スダレ遺跡



鎌田原遺跡



比恵遺跡

第31図 木柵墓検出遺跡遺構配置図 (縮尺1/400)

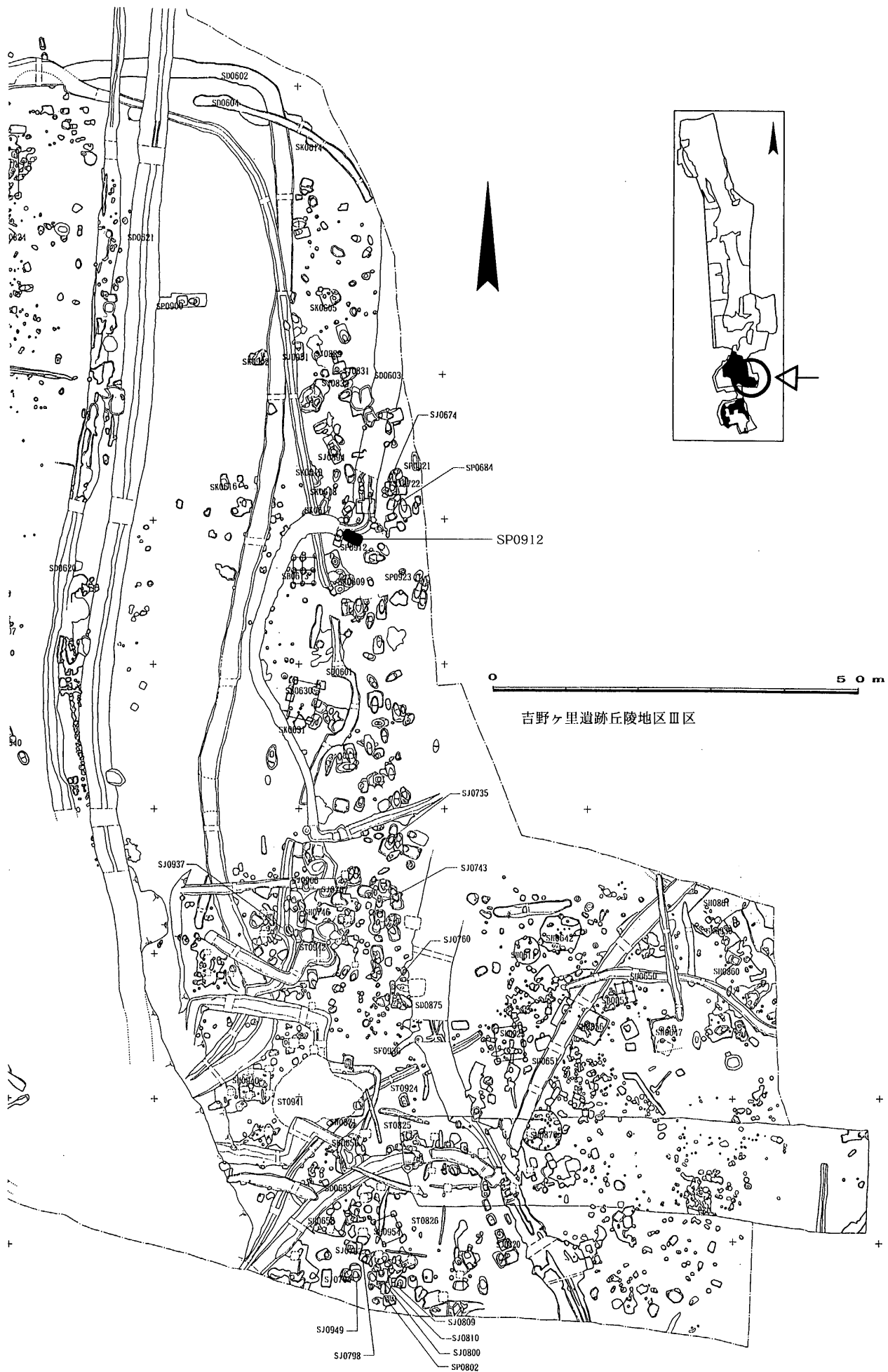
ケ里遺跡（佐賀県教委1994）などがあり、この時期の木槨墓は、いずれも在地的な甕棺や木棺墓等の中で検出されている。スダレ遺跡は甕棺墓が主体を占める福岡平野から佐賀平野にかけての地域とは、峠をひとつ越えた遠賀川水系沿いの平野部に位置する。付近には立岩遺跡があるが、どちらかというとも木棺墓、土壙墓を墓制の主体とする地域である。墳墓は木棺墓32基（内木槨墓2基）、土壙墓17基、木棺墓か土壙墓か不明なもの6基、甕棺墓15基からなるが、甕棺は大型のものは2基で、墓地の主体は木棺墓、土壙墓である。墓域は東西に長く延びる形状を呈し、D33号墓と木槨墓であるD35号墓間は木棺墓、土壙が密集して見られ、中心域かと思われる。またD34号墓とD35号墓が、その西隣K3号墓の周りにも密集して小児棺がみられ、工事中に取り上げられていたK1号甕棺からは4個以上のゴホウラ製貝輪が副葬されていたと考えられ、土取りで失われた部分にも中心的な一群があった可能性がある。時期は大型の甕棺は中期中葉とされ、橋口達也氏編年KⅢa式に属すると考えられる。小型棺は全て中期前葉とされる。小児棺と切り合いをもつD10・33・35号墓はいずれも後者のほうが古い。また、D34号木棺墓、D35号木槨墓には標石と思われる石が置かれ、D35号木槨墓はさらに供献品と思われる中期中葉の丹塗り土器が4個体分散在していた。

もう1基はD54号木槨墓で、西にD52号・D53号木棺墓、東にD55号土壙墓と一列に並んで検出された。

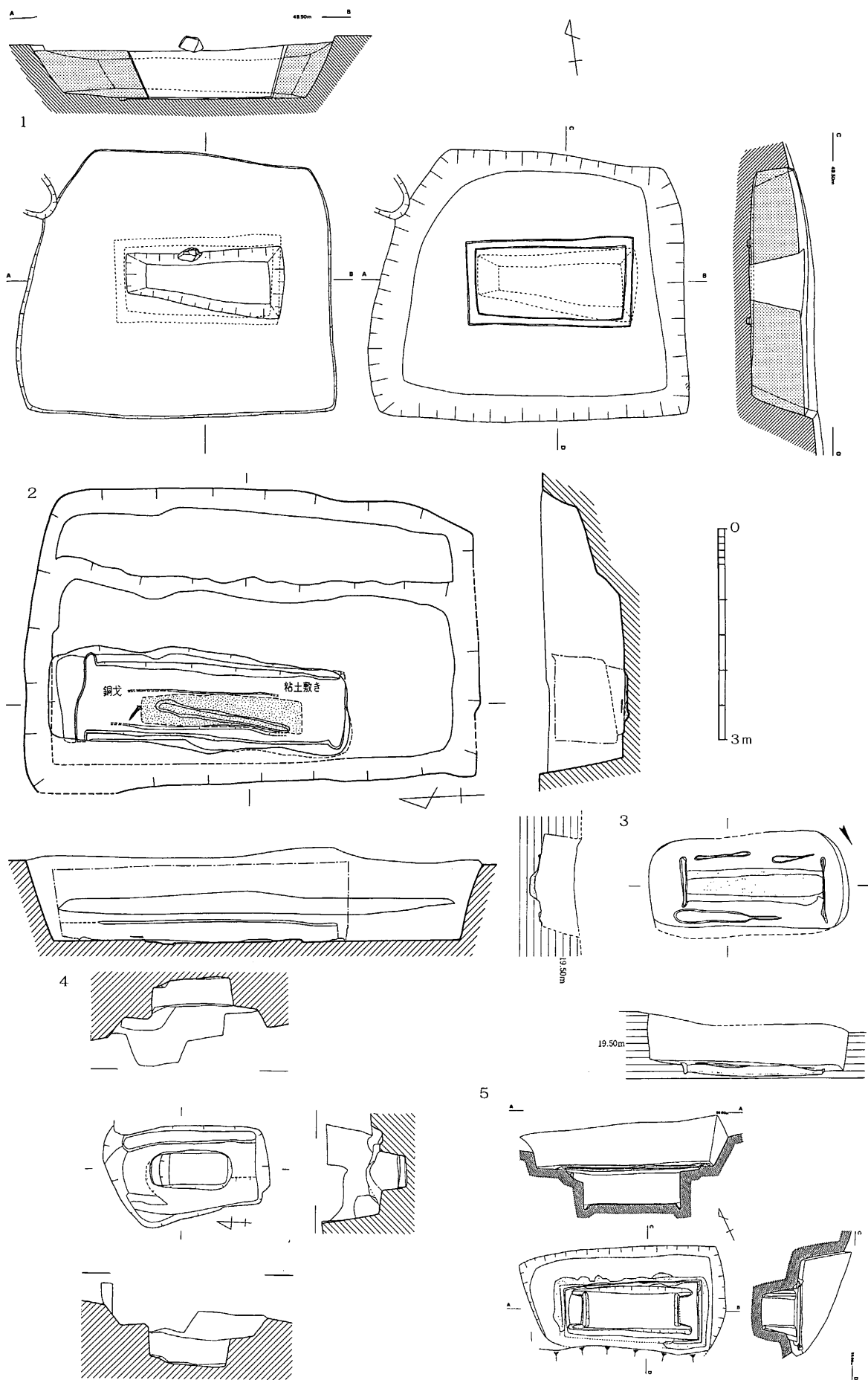
比恵遺跡は福岡平野の中央部に残るAso4火砕流台地上にある。中期前葉から後期初頭の甕棺墓44基、木棺墓、土壙墓7基（内木槨墓1基）が検出された。東西に間隔を空けて並列するSX03号木槨墓（中期後葉の小児棺に切られる。）、SK17（中期前葉）・18（中期後葉）号甕棺墓、SK28号甕棺墓（中期前葉）を方形に取り巻くように中期中葉から中期末を主体とする甕棺が埋置される。SK28号甕棺墓には細型銅剣が副葬され、比恵ムラの盟主的人物であると考えられ、また、SX03号墓についても「……墓壙南壁上にSK16甕棺墓（中期後葉）が営まれており、少なくともこれより古い造営時期にあたり、また覆土中からも中期中葉に降る土器類の発見はなく、中期前葉甕棺墓との切り合い関係もなく、SK17・28甕棺墓と並列する位置にある点でこれらよりやや古いか或いは同時期に位置づけられる可能性が高い。」とされる。SX03木槨墓からSK28甕棺墓にかけて並列する4基の墓は、その配置からSK28号甕棺墓に近い人物の物と思われる。

鎌田原遺跡は、遠賀川の最上流部に位置する。木棺墓8基（内木槨墓1基）土壙墓1基、甕棺墓10基（大型棺10基・小型棺1基）を主体部とする墳丘墓である。木槨墓は6号木槨墓とされ、墳丘墓の中心的な位置で検出された。7号木棺墓を切り、2号木棺墓、5号甕棺墓（中期中葉）、7号甕棺墓（中期中葉）に切られる。6号木槨墓をはじめ副葬品を持つ墓が多く、6号木槨墓、8号・9号甕棺墓に細型銅戈1本、3号木棺墓にヒスイ製獣形勾玉1点、小型勾玉6点、碧玉製管玉177点、7号木棺墓に磨製石鏃6点が副葬されている。また、2号木棺墓から細形銅剣切先、7号・8号木棺墓から磨製石剣切先が出土し、全体に占める割合は比較的高い。当然、墓地の形態や副葬品から、この墳丘墓に埋置されるのはこの地域の首長的な性格の人物、それに近い人々の墓と考えられる。

吉野ケ里遺跡では丘陵地区Ⅲ区の墓地から発見されたSP0912が木槨墓とされる。墓域は南北220mに渡り帯状に検出された。この墓域からは甕棺墓205基、土壙墓・木棺墓14基（内木槨墓1基）が検出されているが、周辺の調査状況から墓域はまだかなり延びる可能性があると考えられている。墓域の南に前期後半から中期初頭の甕棺墓がまとまって見られるほかは、中期前半か



第32図 木槨墓検出遺跡遺構配置図



第33図 北部九州出土木槨墓実測図 (縮尺1/80)

1. スダレ遺跡D35 2. 鎌田原遺跡6M 3. 吉野ヶ里遺跡丘陵地区Ⅲ区SP0912 4. 柚ノ木遺跡ST 5. スダレ遺跡D54

ら中頃の甕棺が主体を占める。SP0912は立岩式期より古いとされ、中期中頃の甕棺が比較的多くまとまっている所から検出され、墓地は立岩式期の甕棺3～4基を最後に埋葬は終了する。

以上、北部九州の弥生中期と思われる木槨墓のうち、被葬者の階層が比較的高いと思われる状態で検出されたものはスダレ遺跡D35号墓、比恵遺跡SX03号墓、鎌田原遺跡6号木槨墓である。また、スダレ遺跡D54号墓、吉野ヶ里遺跡Ⅲ区SP0912は、一般的な墓地内にあり、特に他の墳墓と区別した埋置は行われていないようにみえる。時期的には前者が中期前葉頃と推定され、後者は柚ノ木ST04を含め、やや時期が降るのではないかとと思われる。

このことから木槨墓は弥生時代中期前葉に北部九州に比較的高い階層の被葬者の墓制のひとつとして採用され、その後、柚ノ木ST04やスダレ遺跡D54号墓のように2段掘りの形態を持つもののようにより在地的な要素を取り込み、墓制上の規制を弱めつつ、他の木槨墓や土槨墓に近い墓制として存在したのではないかと考えられる。しかし、類例の少なさは、この墓制の選択に際して、何らかの要因が依然として存在していたことも伺われる。

なお、「Ⅳ まとめ」を記載するに当たり、蒲原宏行氏、田中清美氏のご助言を頂いた。ここに記して感謝いたします。

註

黄曉芬	2001	東アジアにおける墓制の比較研究	弥生時代の交易 発表要旨
佐賀県教育委員会	1994	吉野ヶ里遺跡	佐賀県文化財調査報告書第113集
田中清美	1997	弥生時代の木槨と系譜	堅田直先生古希記念論文集
太宰府市	1992	吉ヶ浦遺跡	太宰府市史考古資料編
筑紫野市	2001	峰古野1号墳	筑紫野市史資料編(上)考古資料
筑紫野市教育委員会	1972	阿志岐シメノグチ遺跡	筑紫野市文化財調査報告書第1集
福岡市教育委員会	1983	比恵遺跡―第6次調査・遺構編―	福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集
福島日出海	1993	福岡県嘉穂郡嘉穂町鎌田原遺跡	日本考古学年報44(1991年度版)
穂波町教育委員会	1976	スダレ遺跡	穂波町文化財調査報告書第1集

附 福岡県筑紫野市柚ノ木遺跡出土の弥生人骨

中 橋 孝 博

九州大学大学院比較社会文化研究院

はじめに

福岡平野と筑後平野の境界域に位置する筑紫野市では、近年の開発事業に伴って隈・西小田遺跡を始めとする多数の遺跡が調査され、出土した弥生人骨も膨大な数に上っている。その豊富な資料を基にしたこれまでの人類学的な研究によって、当地域の弥生人には北部九州の中でも特に縄文人との形態的隔たりが大きい特徴を持った集団が居住していたこと、また、かなりの頻度で戦傷人骨が見られることなどが明らかとなり、いわゆる渡来系弥生人とその社会背景を考察する上で貴重な情報源となっている。1993年度の筑紫野市教育委員会による発掘調査によって、当地からまた新たに7体の弥生人骨が検出された。残念ながら保存状態が悪く限られた情報しか得られなかったが、当地域の弥生人資料をより充実させる上で貴重な追加例であり、ここにその検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

柚ノ木遺跡は、福岡県筑紫野市の北部、太宰府市にも近い大字阿志岐に所在する。筑紫野市教育委員会による1993年度の発掘調査によって、甕棺墓から7体の弥生時代人骨が新たに出土した。人骨の所属時代は、甕棺の型式に関する考古学的な考証から弥生時代中期末～後期始めにかけてのものと考えられている。

出土人骨を表1に一覧した。残念ながら保存状態は不良なものが多く、頭蓋については計測値による詳しい検討はできなかった。四肢の計測は Martin-Saller (1957) に従い、性判定には筆者らの方法 (中橋、1988) を援用した。

結果

四肢骨の計測結果を表2、3に示す。

1. 男性

2体の下肢骨について計測結果が得られた。表2に示した他集団との比較で明らかなように、SK-10号人骨の下肢骨は、これまで出土している北部九州弥生人と同様、かなり頑丈な特徴を示している。大腿骨はさほどでもないが、脛骨の骨体諸径は、北部九州弥生人や縄文人の平均値を上回っており、特に現代人との差は大きい。ただ、大腿骨、脛骨ともに柱状性や扁平性は認められない。もう一体のSK-11号大腿骨は、10号とは対照的にかなり華奢で、比較表に示した弥生、縄文集団の平均値を大きく下回り、むしろ現代人に近い骨体の持ち主である。なお、骨端部欠損のため、両者とも身長 の推定はできなかった。

2. 女性

やはり2体の下肢骨で計測値が得られた。両個体とも、やや華奢な傾向が認められる。SK-7号では特に、得られた骨幹諸径の全てが北部九州弥生人の平均を下回り、細小傾向の顕著な現代人に近い値を示している。SK-16号は、7号に較べるとやや頑丈ながら、その計測結果は概

ね近隣の北部九州弥生人を下回り、やはりこの地域の弥生人女性としてはやや華奢な個体と言える。ただ、大腿骨の粗線の発達はやや良好で、その断面示数は104となって、縄文人のそれに近い。なお、脛骨に扁平性は認められない。唯一得られた大腿骨の最大長はやはり北部九州の平均を下回っているが、西北九州弥生人や縄文人に較べると幾分長く、当地域の弥生人としての特徴の一端を窺わせている。

3. 推定身長

大腿骨最大長にピアソンの式を適用した結果、149.7cmの推定身長となった。表4に示したように、従来報告されている北部九州弥生人の平均に較べるとやや低身長の女性である。

総括・考察

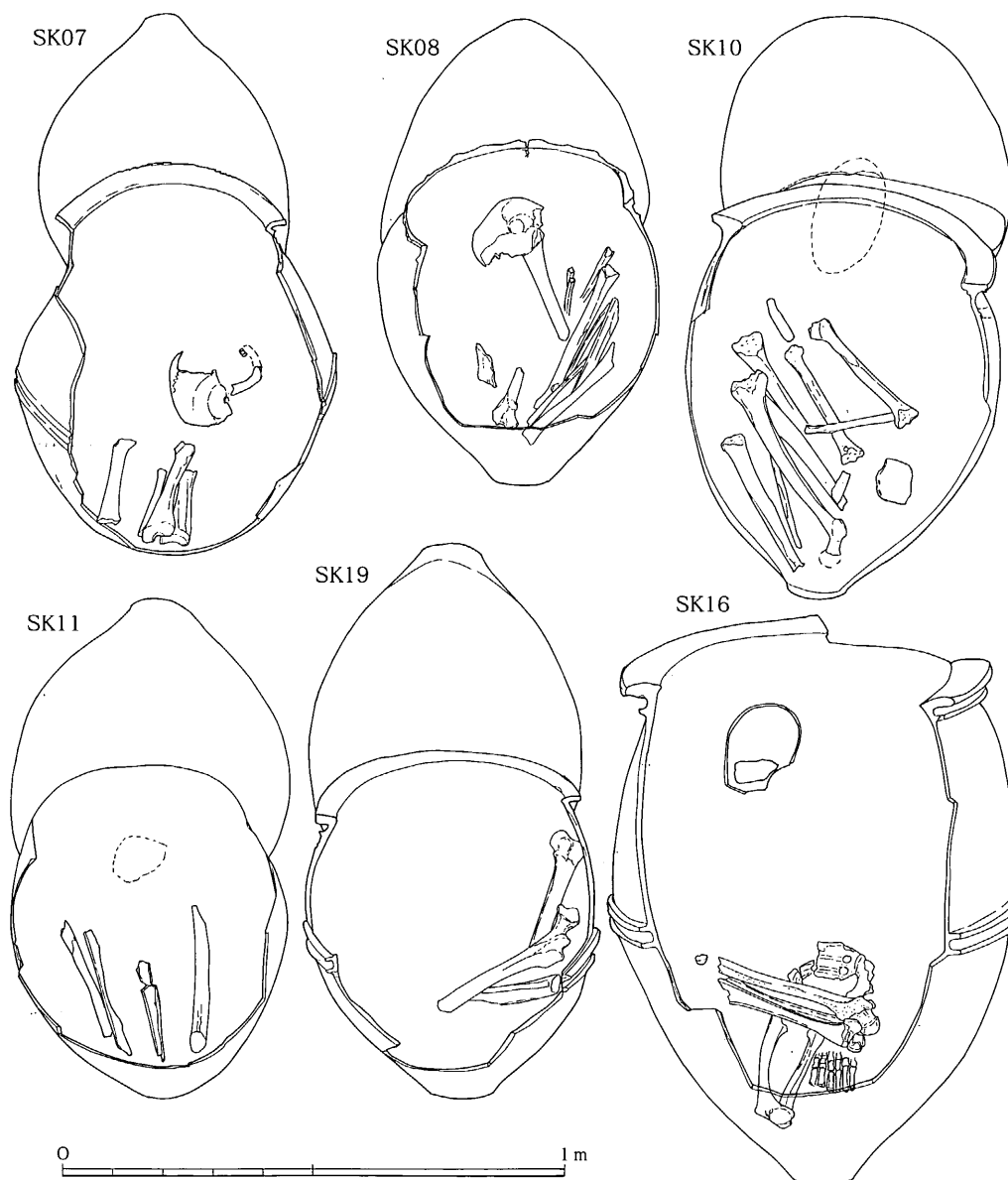
福岡県筑紫野市柚ノ木遺跡から、7体の弥生時代中期末～後期初めの人骨が出土した。わずかに四肢骨について得られた計測結果を見る限り、男女ともやや華奢な個体の存在が目立った。ただここに示された骨幹諸径や断面示数等は、いずれも従来から北部九州で報告されている弥生人の変異内に収まるものであり、特に当遺跡弥生人の形質が近隣集団の傾向から逸脱することを意味している訳ではない。太く頑丈な下肢骨をもつ北部九州弥生人の特徴を示す個体も含まれており、おおむね当遺跡の住人も近隣弥生集団と同系の人々と見て大過なかろう。当遺跡からは一基の木郭墓も検出されており、その被葬者の詳しい特徴がわかれば興味深い事例となったであろうが、この地域にはまだ未検出の墓が残されていると推測されるので、今後の出土に期待したい。

文 献

- 阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究2
- 池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（鎌木義昌先生古希記念論集）
- 鑄鍋命達（1955）：「九州人下腿骨の研究」、人類学研究2
- 清野謙次・平井隆（1928）：「津雲貝塚人骨の人類学的研究、第3部、上肢骨の研究、第4部、下肢骨の研究」、人類学雑誌43、第3、4付録
- Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd.I.Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
- 松下孝幸（1981）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」、大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書1
- 内藤芳篤（1971）：「西北九州出土の弥生時代人骨」、人類学雑誌79
- 中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版
- 中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質、男女差、寿命」、弥生文化の研究1、雄山閣出版

表1 柚ノ木遺跡出土弥生人骨

番 号	性 別	年 齡	遺 存 部 位
SK-07	女性	成年	頭蓋片、下肢骨
SK-08	不明	若年	頭蓋片、左上腕、下肢骨
SK-10	男性	成人	上肢骨片、下肢骨
SK-11	男性	成人	頭蓋片、大腿骨
SK-15	女性	成人	頭蓋片、下肢骨片
SK-16	女性	熟年	頭蓋片、下肢骨
SK-19	男性	熟年	頭蓋片、下肢骨



第34図 甕棺内人骨出土状況実測図（縮尺1／15）

表2 下肢骨計測値（男性）

(cm)

	柚ノ木 (弥生)		北部九州 ¹⁾ (弥生)		山口 ¹⁾ (弥生)		大友 ²⁾ (弥生)		津雲 ³⁾ (縄文)		九州 ⁴⁾ (現代)	
	SK-10	SK-11	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨												
1 最大長	—	—	60	430.9	37	434.4	15	420.1	19	414.1	59	406.5
2 自然位長	—	—	18	427.7	26	432.8	17	413.9	19	411.0	59	403.2
6 中央矢状径	29	27	162	29.7	72	29.1	41	28.6	47	29.0	59	26.5
7 中央横径	27	27	166	28.0	72	27.2	42	26.4	47	26.0	59	25.6
8 中央周	88	82	161	90.8	72	88.9	41	87.0	47	87.4	59	82.4
9 骨体上横径	32	—	115	32.6	74	32.7	38	31.6	43	30.7	59	29.4
10 骨体上矢状径	25	—	115	26.2	74	26.0	38	25.2	43	25.5	59	24.3
8/2 長厚示数	—	—	18	21.4	26	20.5	16	21.4	19	21.2	59	20.4
6/7 中央断面示数	107.4	100.0	162	106.4	72	107.6	41	108.6	47	111.8	58	103.8
0/9 上骨体断面示数	78.1	—	115	80.5	74	80.0	39	80.1	43	83.1	58	82.8
脛骨												
1 全長	—	—	27	345.6	19	350.5	10	345.3	20	340.0	61	320.3
1a 最大長	—	—	52	350.5	21	356.9	11	354.8	22	343.6	60	326.9
8 中央最大径	—	—	74	32.0	36	30.6	43	31.0	46	32.3	61	27.8
8a 栄養孔位最大径	37	—	153	36.5	60	35.7	35	34.5	38	35.2	60	30.6
9 中央横径	—	—	75	22.9	36	22.3	43	21.4	46	20.4	61	21.1
9a 栄養孔位横径	26	—	153	25.3	59	25.1	36	23.3	38	22.2	61	23.7
10 骨体周	—	—	74	86.5	36	83.6	41	83.4	45	84.5	62	78.4
10a 栄養孔位周	97	—	151	96.9	58	95.5	34	92.6	38	92.8	61	88.9
10b 最小周	80	—	122	78.4	63	75.4	38	75.6	41	76.7	60	71.3
9/8 中央断面示数	—	—	74	72.2	36	73.0	43	69.1	46	63.3	61	76.1
9a/8a 栄養孔位断面示数	70.3	—	152	69.5	59	70.5	35	67.7	38	63.0	60	77.5
10b/1 長厚示数	—	—	26	22.7	19	21.5	10	21.9	20	22.9	60	22.4

1) 中橋・永井 (1989)、2) 松下 (1981)、3) 清野・平井 (1928)、4) 阿部 (1955)、鑄鍋 (1955)

表3 下肢骨計測値（女性）

(cm)

		柚ノ木 (弥生)		北部九州 ¹⁾ (弥生)		山口 ¹⁾ (弥生)		大友 ²⁾ (弥生)		津雲 ³⁾ (縄文)		九州 ⁴⁾ (現代)	
		SK-07	SK-16	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1	最大長	—	(395)	34	405.5	30	403.9	5	386.8	22	388.2	13	380.1
2	自然位長	—	—	11	403.0	26	399.5	4	378.3	22	381.7	13	375.9
6	中央矢状径	22	26	112	25.7	50	25.5	30	25.5	45	25.2	13	23.6
7	中央横径	25	25	112	26.3	50	26.2	30	25.2	45	24.2	13	23.2
8	中央周	74	79	111	81.5	50	80.9	29	80.4	45	78.0	13	74.2
9	骨体上横径	—	29	86	30.5	50	31.0	30	29.7	42	28.4	13	27.5
10	骨体上矢状径	—	22	86	23.2	50	23.0	30	22.7	42	22.2	13	21.3
8/2	長厚示数	—	—	11	20.8	26	20.2	4	20.3	21	20.3	13	19.8
6/7	中央断面示数	85.2	104.0	112	98.3	50	97.5	31	102.1	45	104.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	—	75.9	86	76.4	50	74.5	30	76.5	42	78.2	13	77.1
頸骨													
1	全長	—	—	20	324.3	20	326.8	3	313.0	17	319.8	14	301.0
1a	最大長	—	—	30	329.3	23	331.0	4	324.8	17	324.4	14	306.6
8	中央最大径	—	26	46	27.0	31	26.9	24	27.6	42	27.3	14	24.7
8a	栄養孔位最大径	29	29	97	30.8	42	30.5	19	30.4	37	30.5	14	28.1
9	中央横径	—	20	46	20.4	31	19.1	26	19.7	42	17.9	14	18.8
9a	栄養孔位横径	21	22	98	22.3	42	21.6	20	21.1	36	19.4	14	21.1
10	骨体周	—	72	46	74.5	30	72.6	23	75.3	42	73.4	14	70.1
10a	栄養孔位周	81	81	96	83.2	42	82.2	18	81.6	35	81.3	14	78.2
10b	最小周	61	68	82	68.6	44	67.5	24	68.3	35	67.6	14	63.6
9/8	中央断面示数	—	76.9	46	75.7	31	71.1	23	72.1	42	65.8	14	76.3
9a/8a	栄養孔位断面示数	72.4	75.9	97	72.4	42	71.2	18	70.4	36	63.6	14	74.9
10b/1	長厚示数	—	—	20	21.3	20	20.3	3	21.4	17	21.1	14	21.2
腓骨													
1	最大長	—	—	2	328.0	17	324.0	—	—	8	316.9	14	300.6
2	中央最大径	—	14	34	14.7	29	14.8	—	—	32	14.7	14	12.9
3	中央最小径	—	10	34	9.8	29	9.6	—	—	32	10.0	14	8.6
4	中央周	—	41	34	40.7	28	41.0	—	—	32	42.8	14	36.8
4a	最小周	—	—	8	35.6	21	37.3	—	—	20	34.0	14	32.3
3/2	中央断面示数	—	71.4	34	67.3	29	65.2	—	—	32	68.3	14	67.6
4a/1	長厚示数	—	—	2	10.8	17	11.6	—	—	8	11.0	14	10.8

表4 推定身長の比較

(cm)

	女 性	
	N	M
柚 ノ 木 (弥)	1	149.7
北 部 九 州 (弥)	52	151.2
山 口 (弥)	35	151.4
(土井ヶ浜)	24	151.1
隈 ・ 西 小 田 (弥)	14	152.4
西 北 九 州 (弥) ¹⁾	8	147.9
大 友 (弥)	2	149.0
広 田 (弥)	10	142.8
北 部 九 州 (縄)	6	150.5
津 雲 (縄)*	16	147.3
吉 胡 (縄)*	18	147.7
北部九州・山口 (古)	15	150.2
吉 母 浜 (中) ²⁾	22	146.5

* 右大腿骨最大長の平均値より算出

1) 内藤 (1971)、2) 中橋・永井 (1985)

** 中橋・永井 (1985)

圖 版



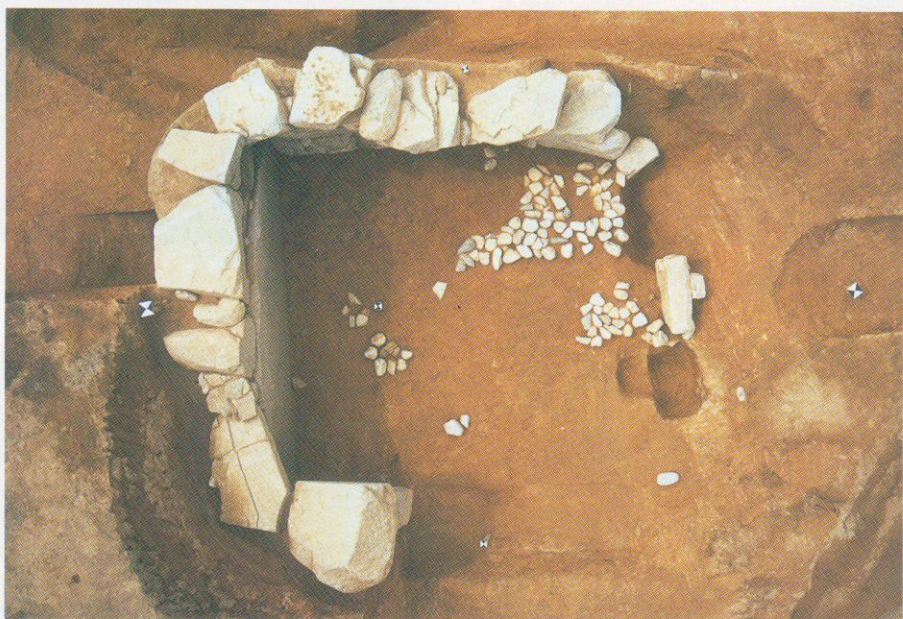
(1) 遺跡全景 (南から)



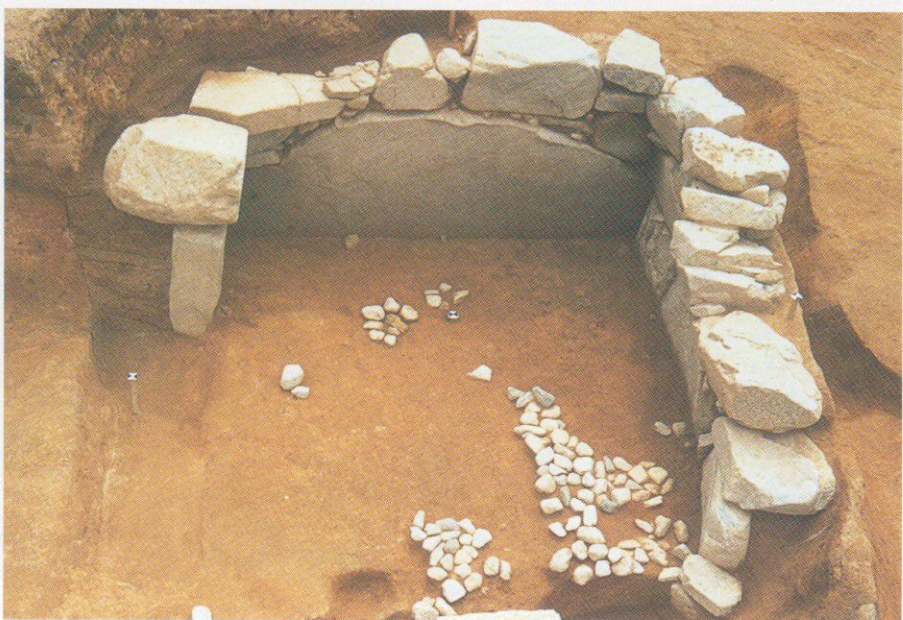
(2) 遺跡全景 (北から)



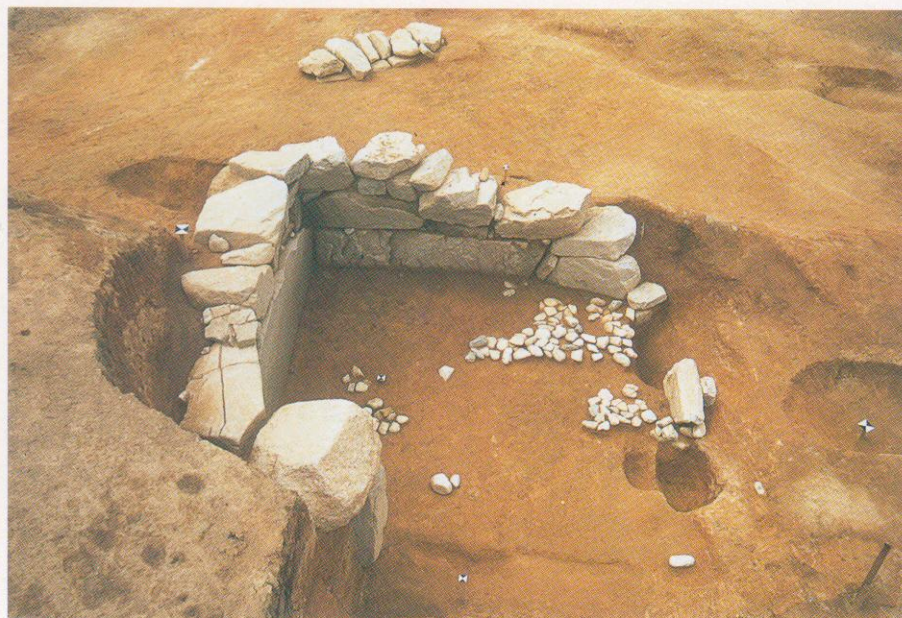
(1) 柚ノ木1号墳全景(西から)



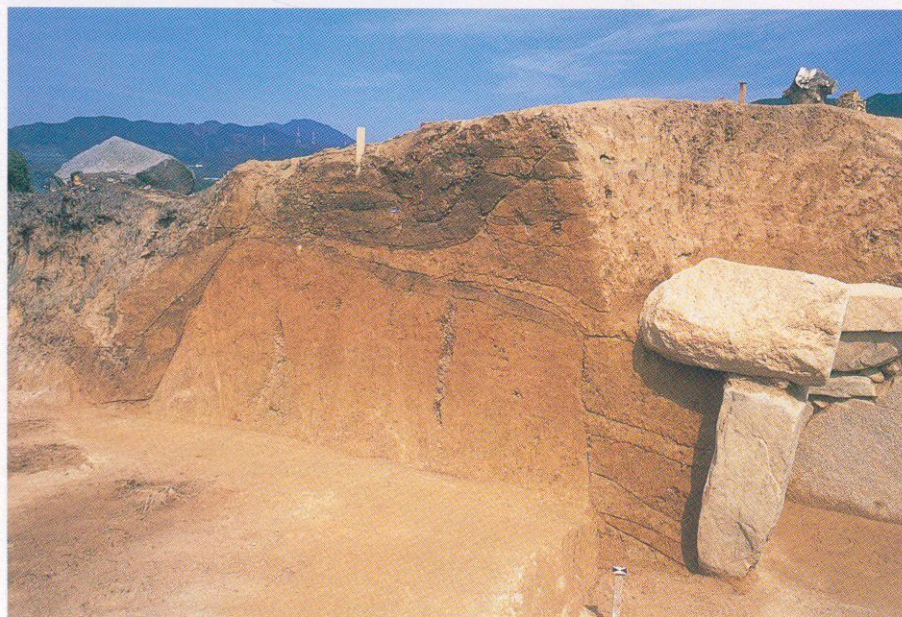
(2) 柚ノ木1号墳石室(上から)



(3) 柚ノ木1号墳石室(西から)



(1) 柚ノ木1号墳石室（北から）



(2) 柚ノ木1号墳北側墳丘断面



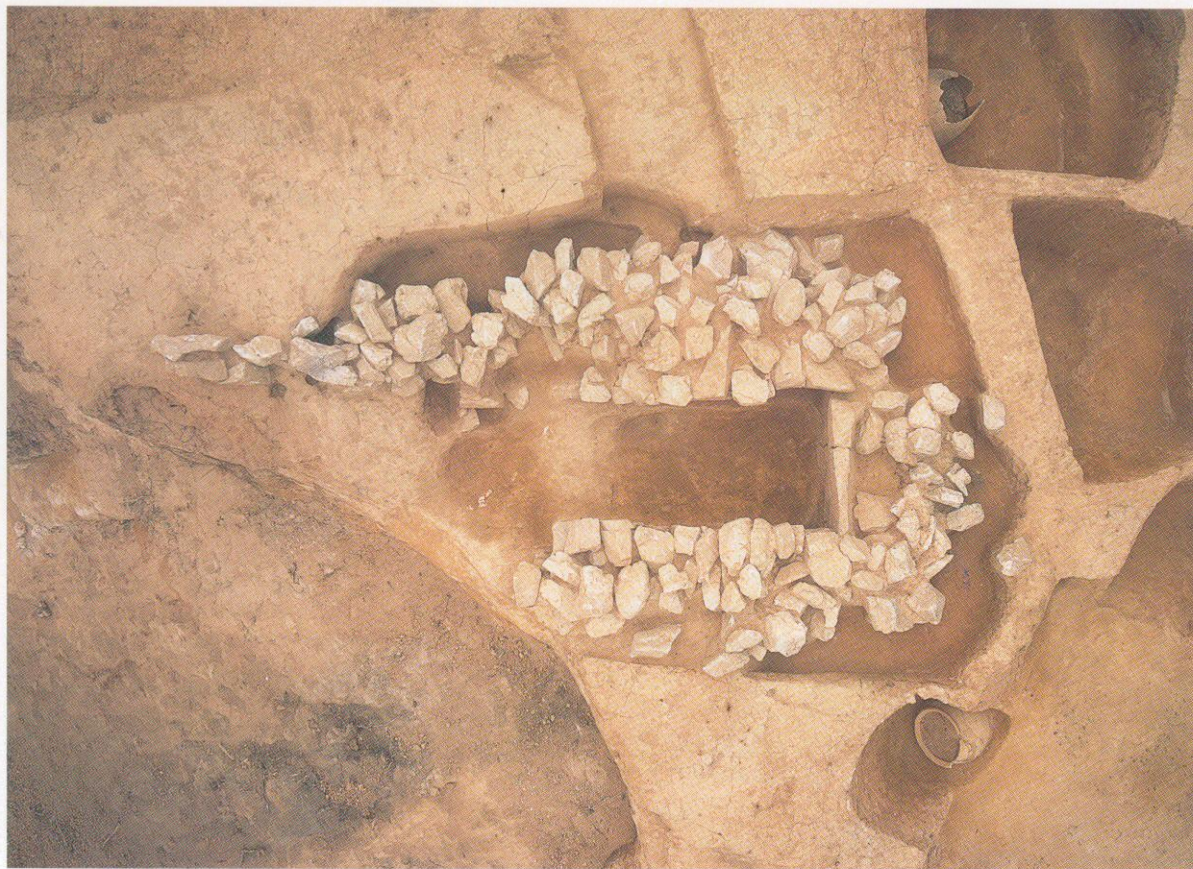
(3) 柚ノ木1号墳東側墳丘断面



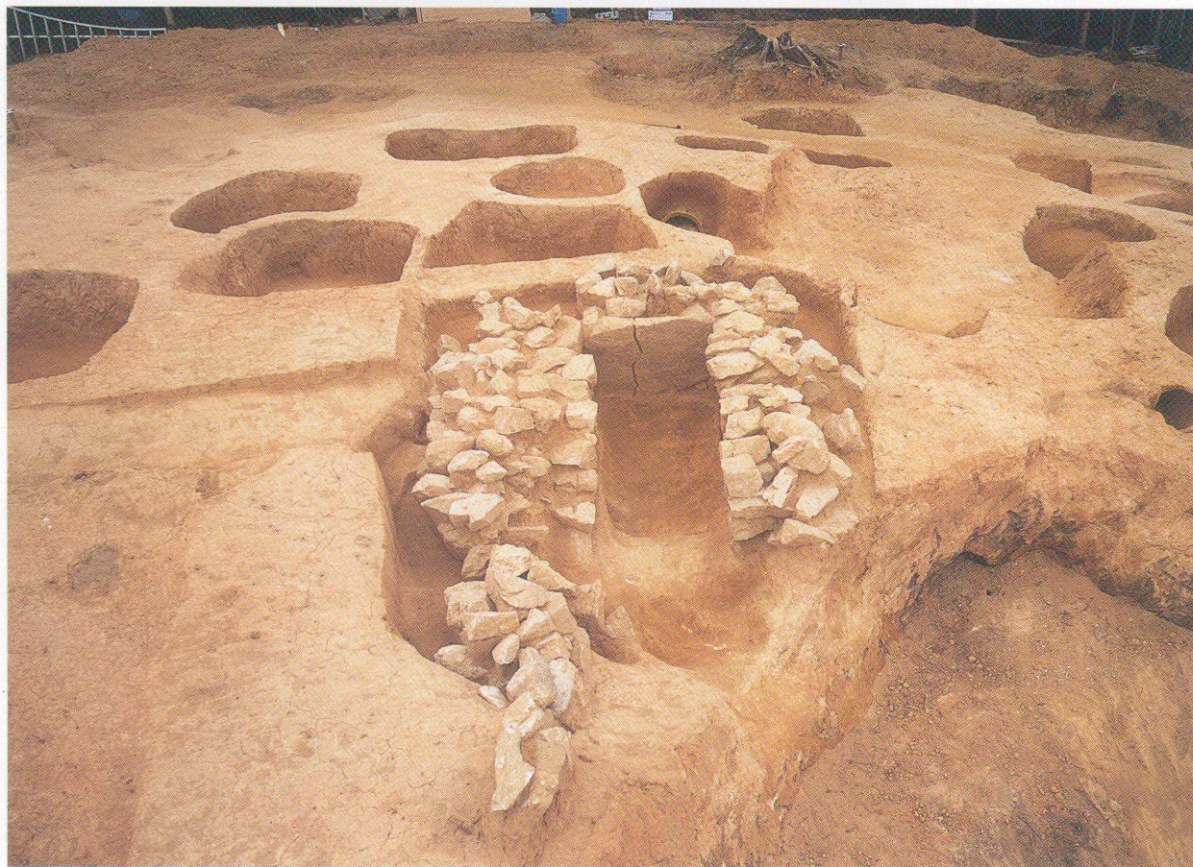
(1) 柚ノ木2号墳全景



(2) 柚ノ木2号墳全景（北から）



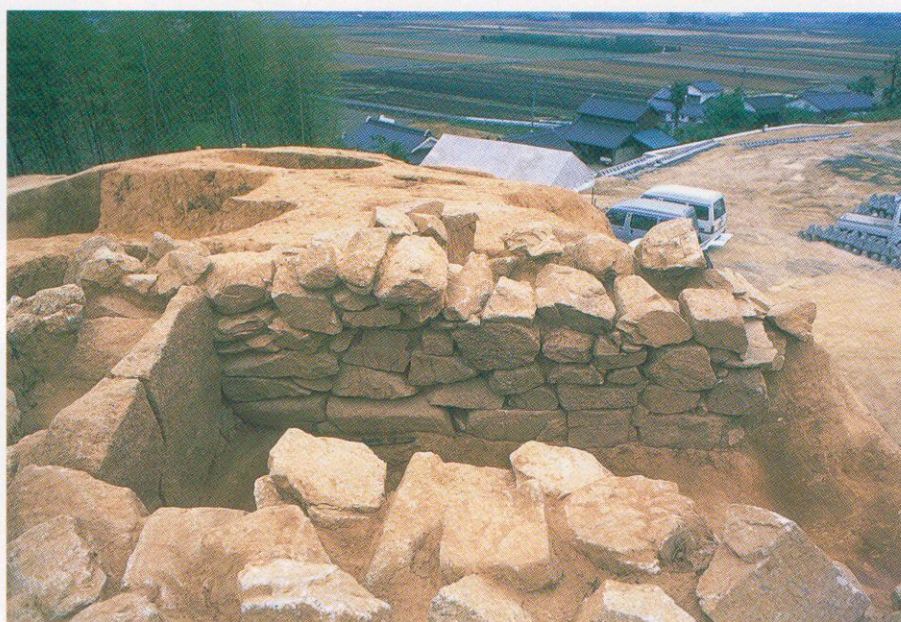
(1) 柚ノ木2号墳石室（上から）



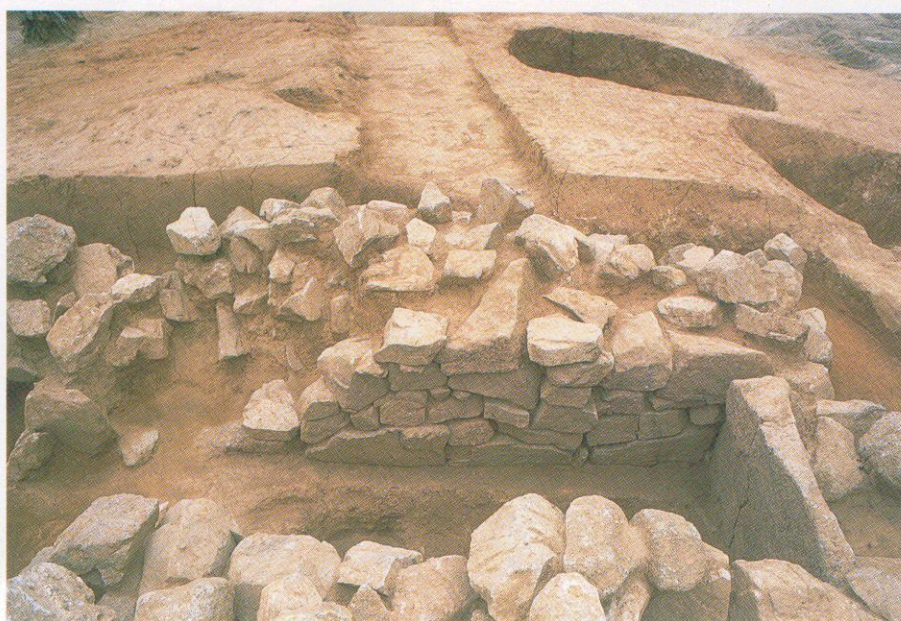
(2) 柚ノ木2号墳石室（西から）



(1) 柚ノ木2号墳奥壁(西から)



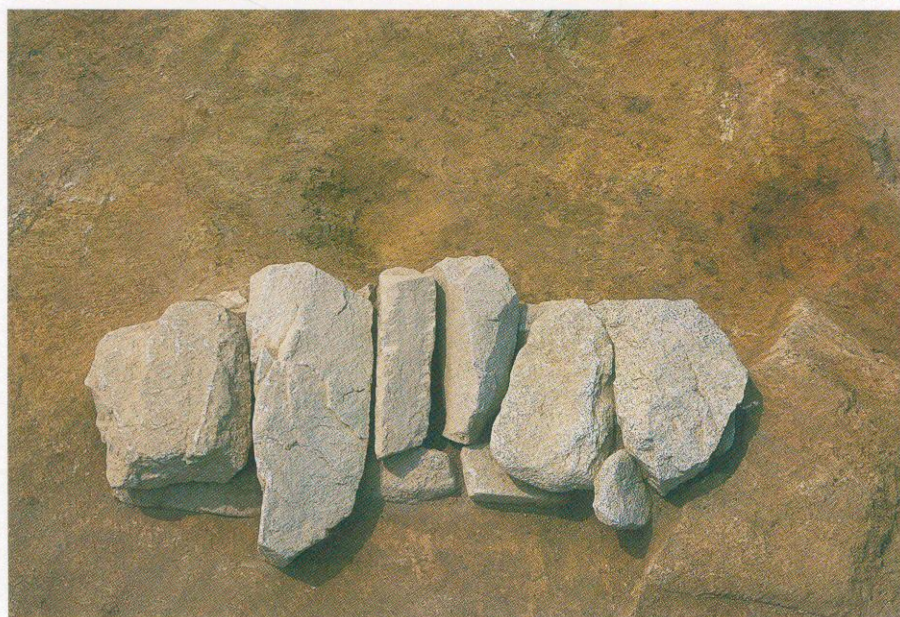
(2) 柚ノ木2号墳側壁(北から)



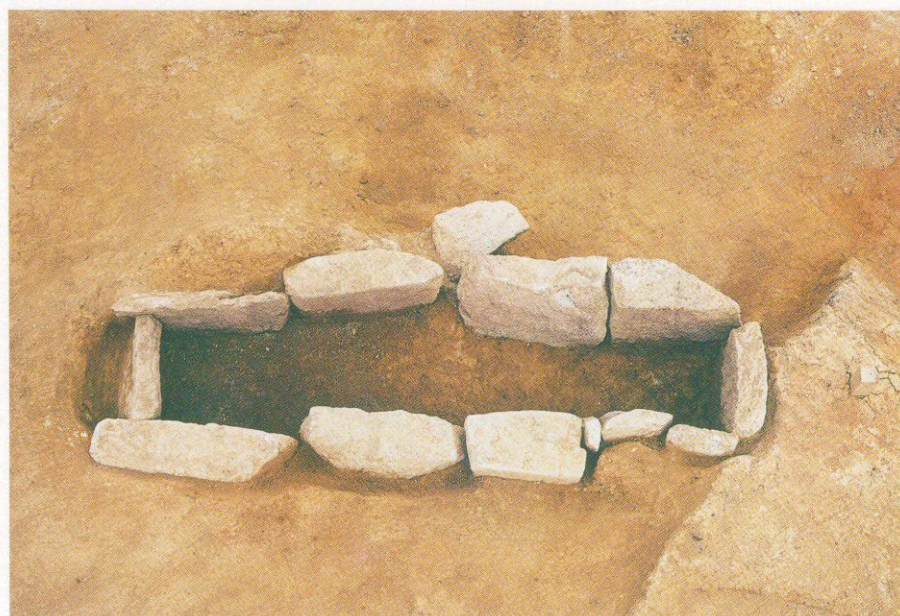
(3) 柚ノ木2号墳側壁(南から)



(1) 柚ノ木2号墳1T周溝

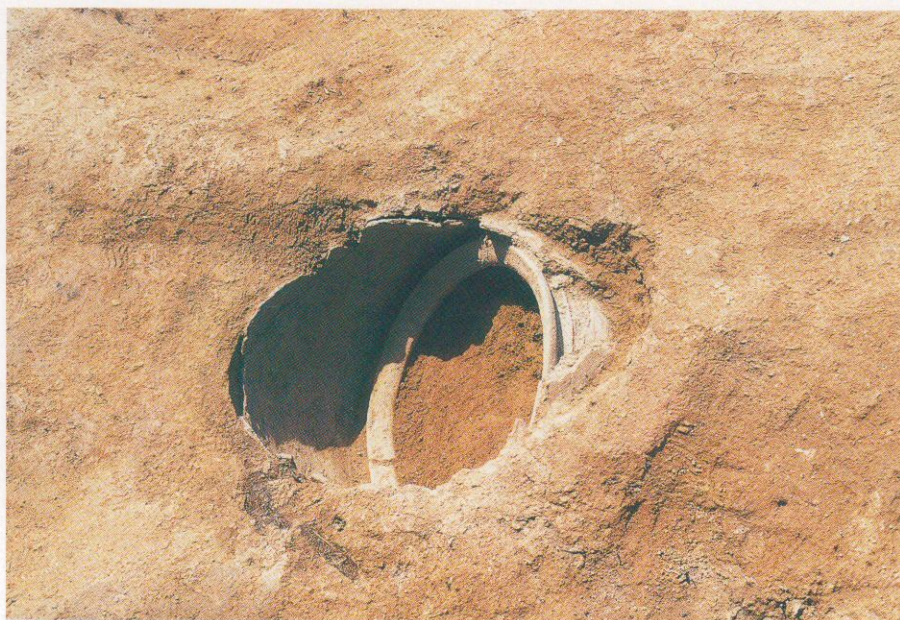


(2) 1号石棺墓



(3) 1号石棺墓内部

图版8 (1) SK01

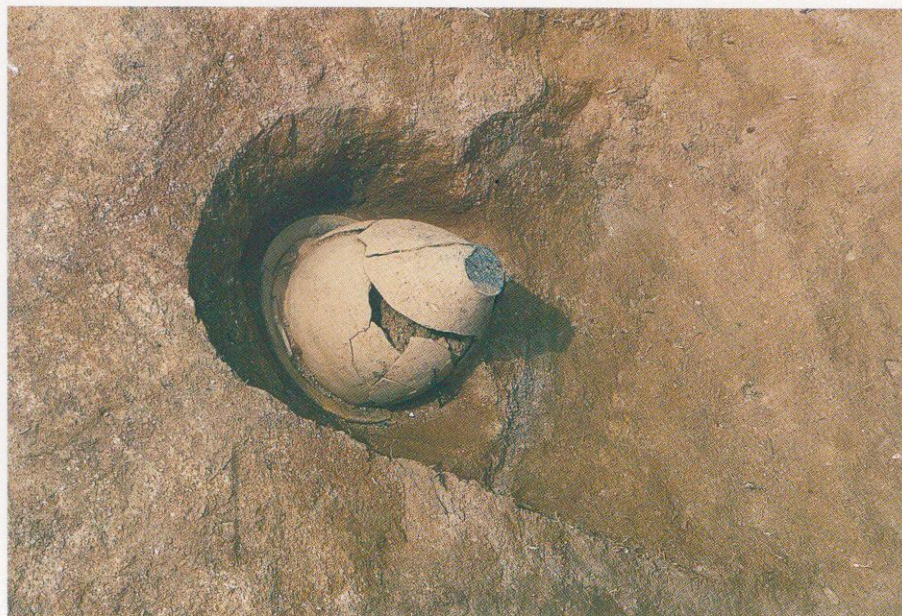


图版8 (2) SK02

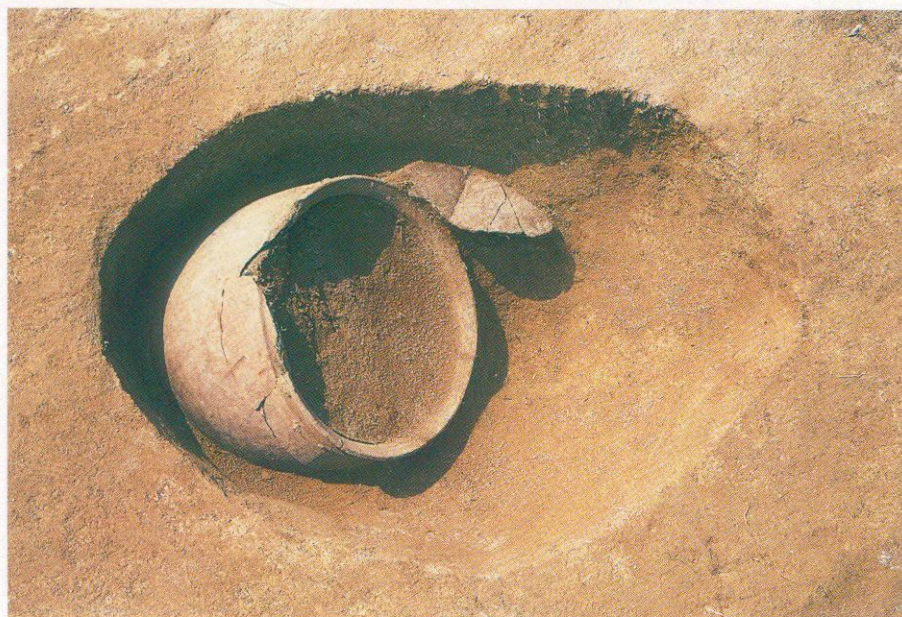


图版8 (3) SK03

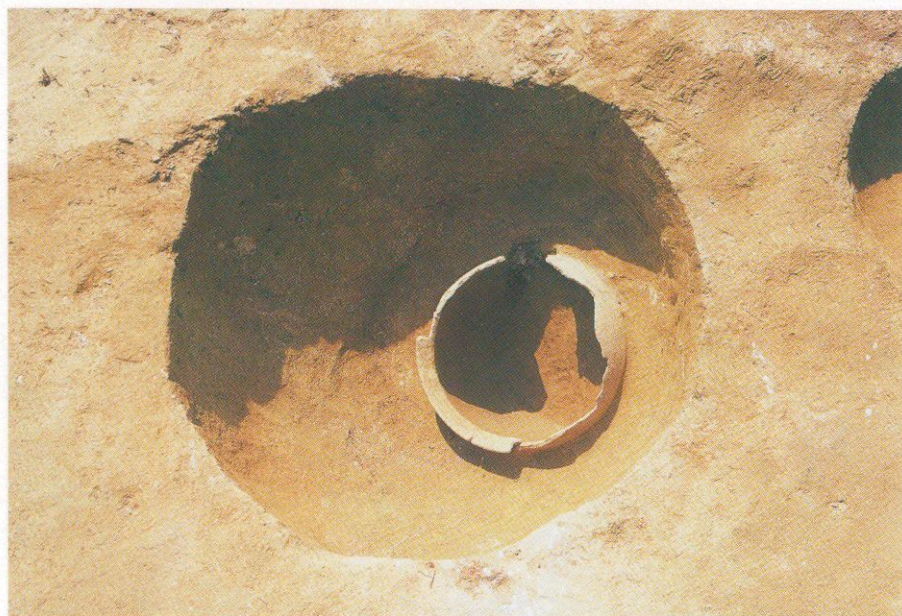




(1) SK04

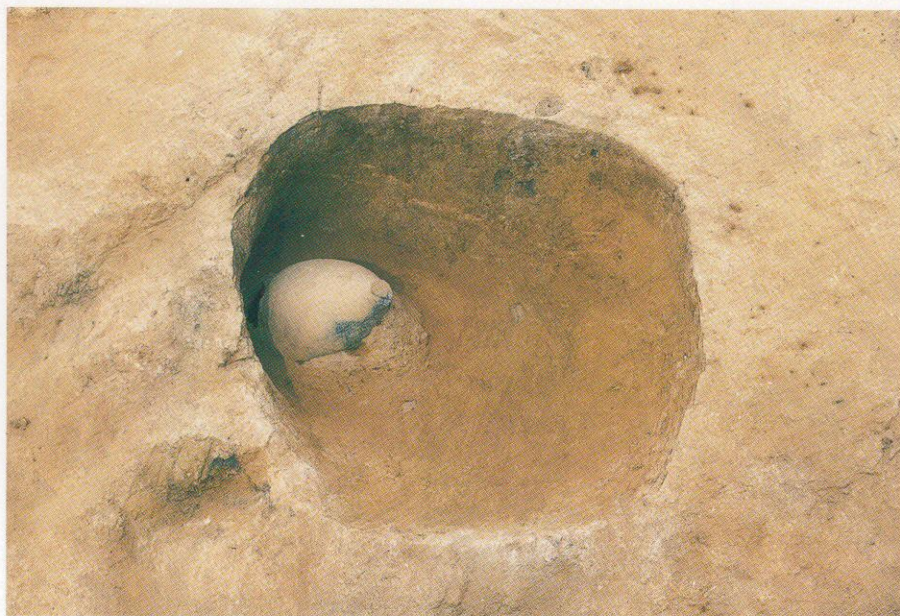


(2) SK05



(3) SK06

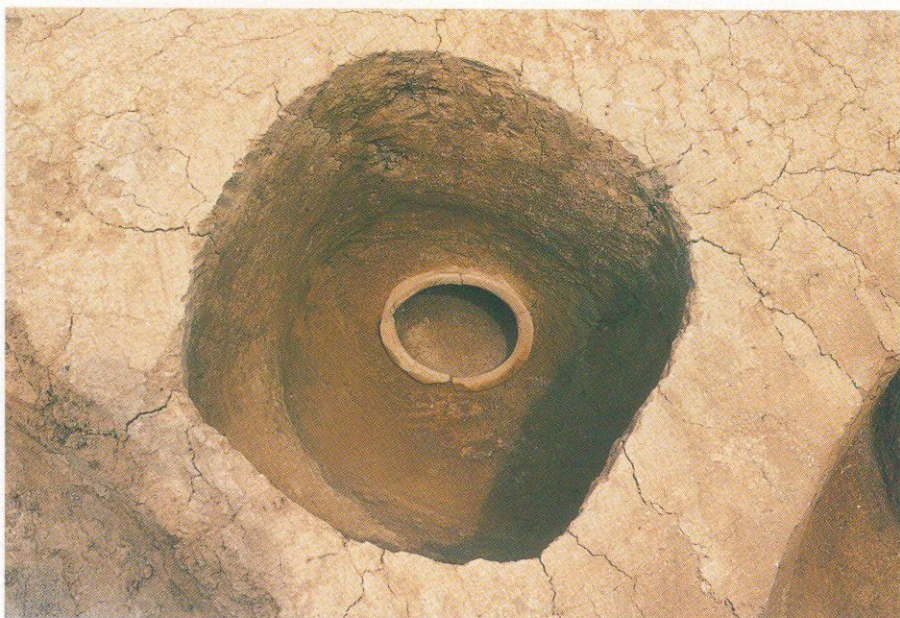
(1) SK07



(2) SK08

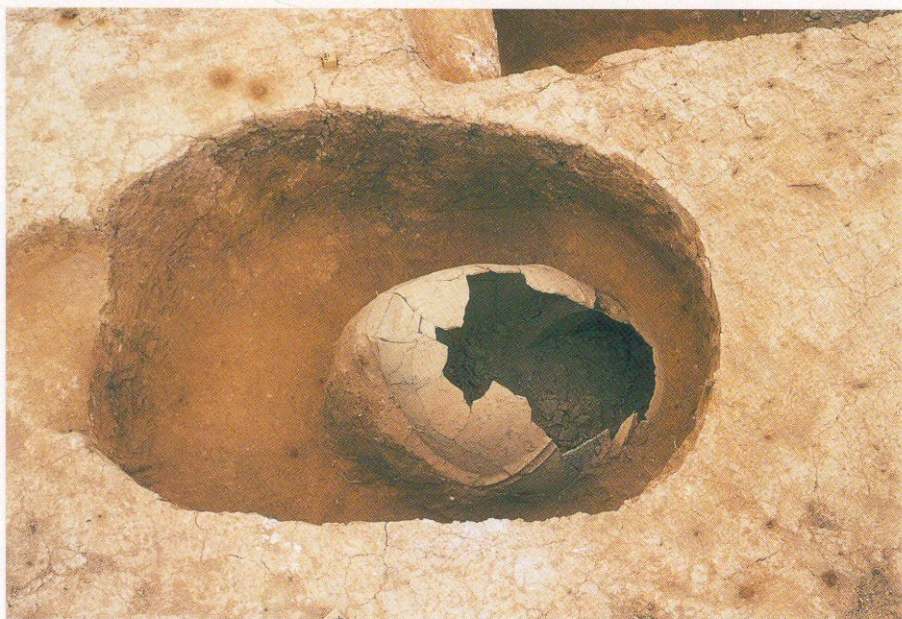


(3) SK09





(1) SK10

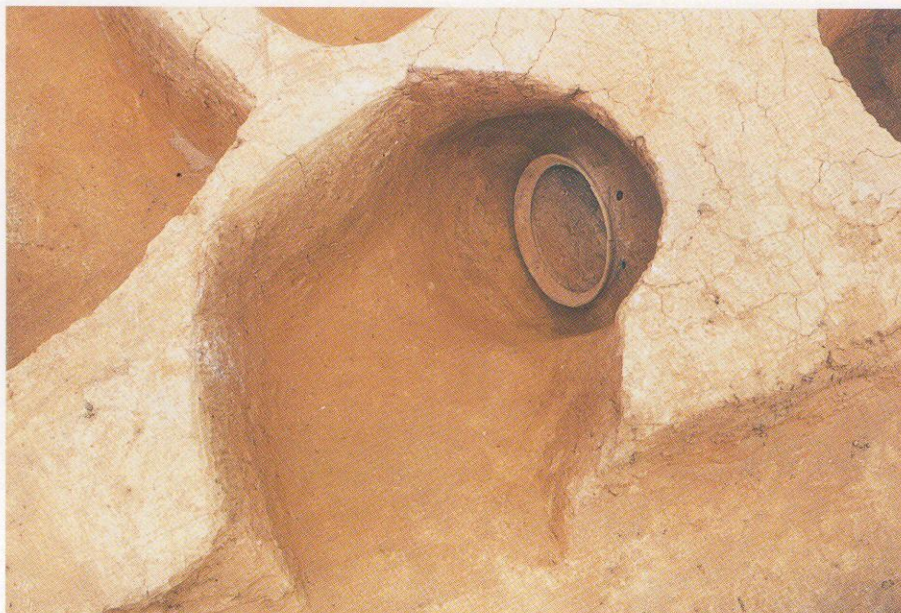


(2) SK11



(3) SK12

(1) SK13

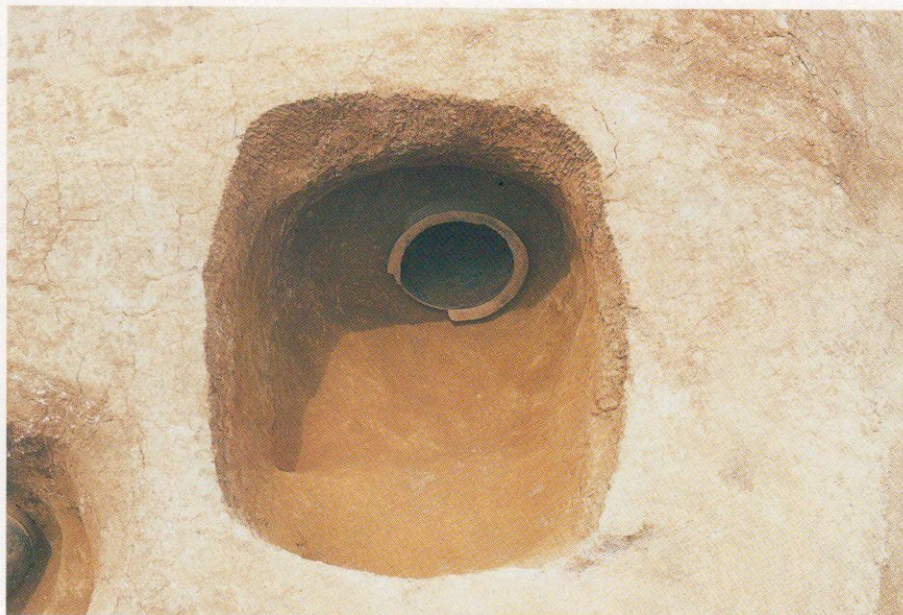


(2) SK14

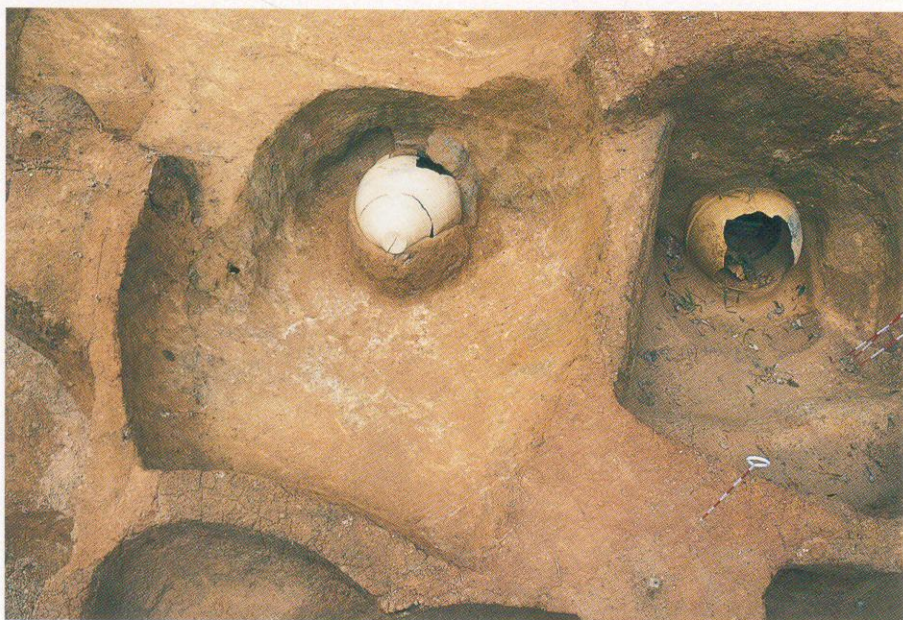


(3) SK15





(1) SK16



(2) SK19

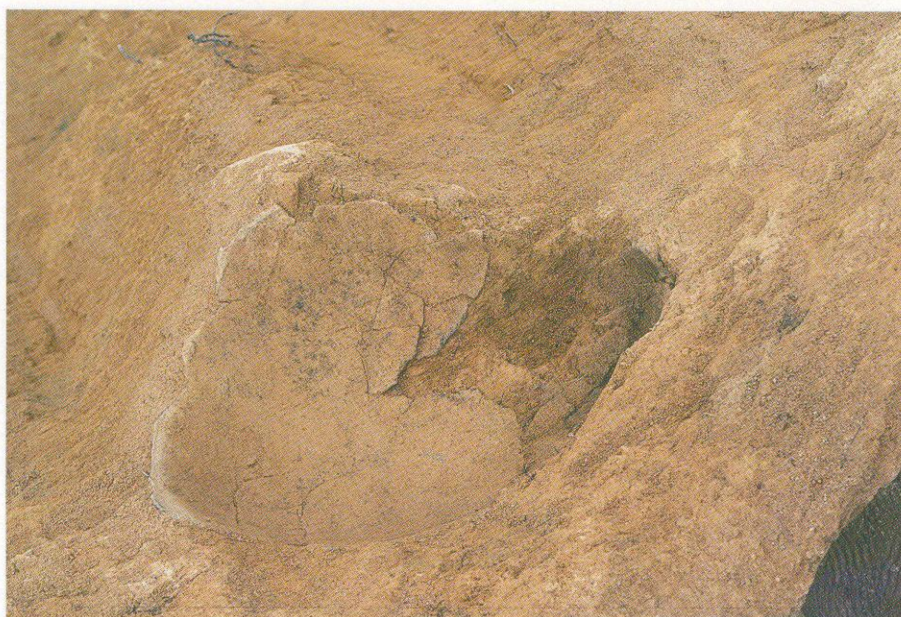


(3) SK20

(1) SK21



(2) SK22

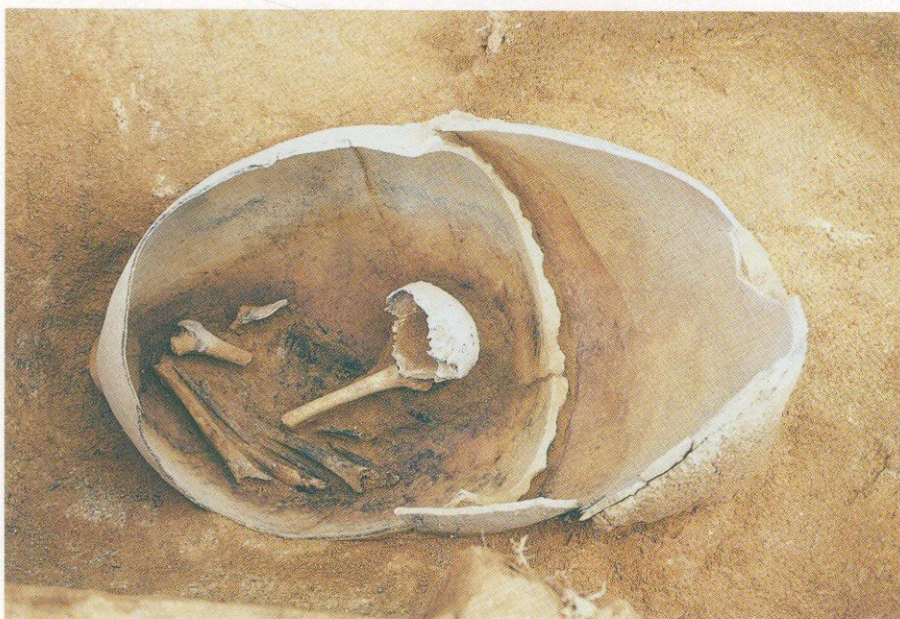


(3) SK23





(1) SK07人骨出土状况



(2) SK08人骨出土状况



(3) SK11人骨出土状况



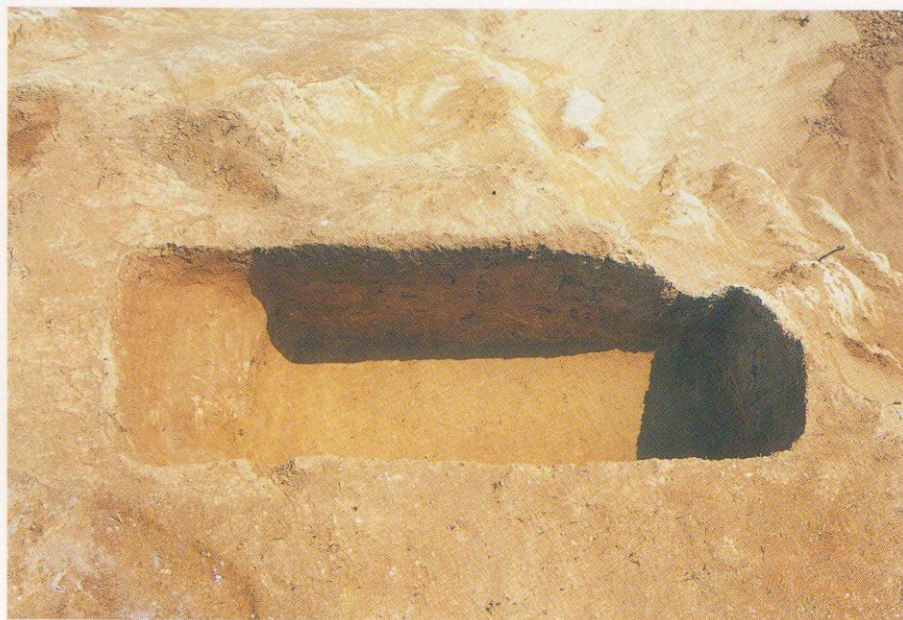
(1) SK16人骨出土状况



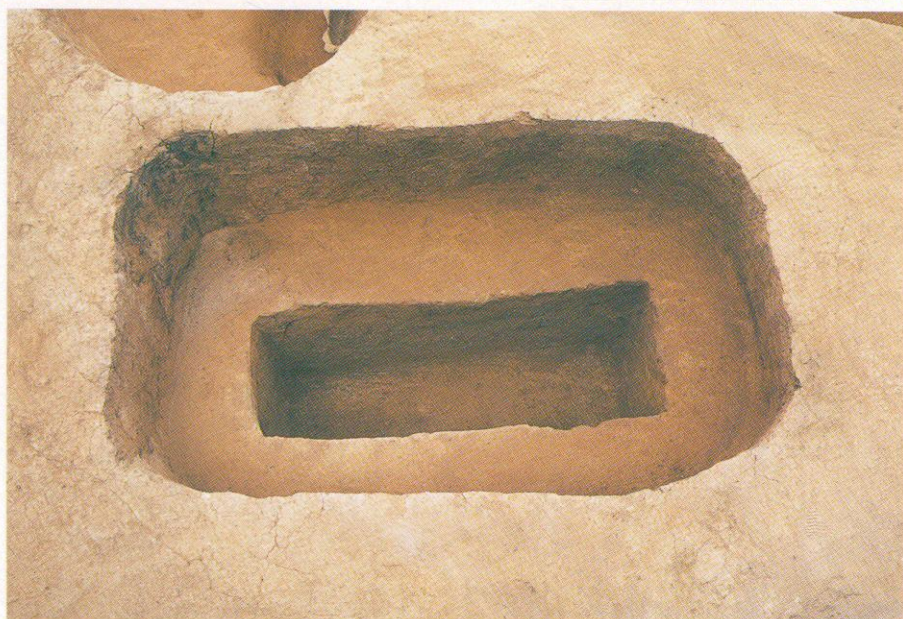
(2) SK19人骨出土状况



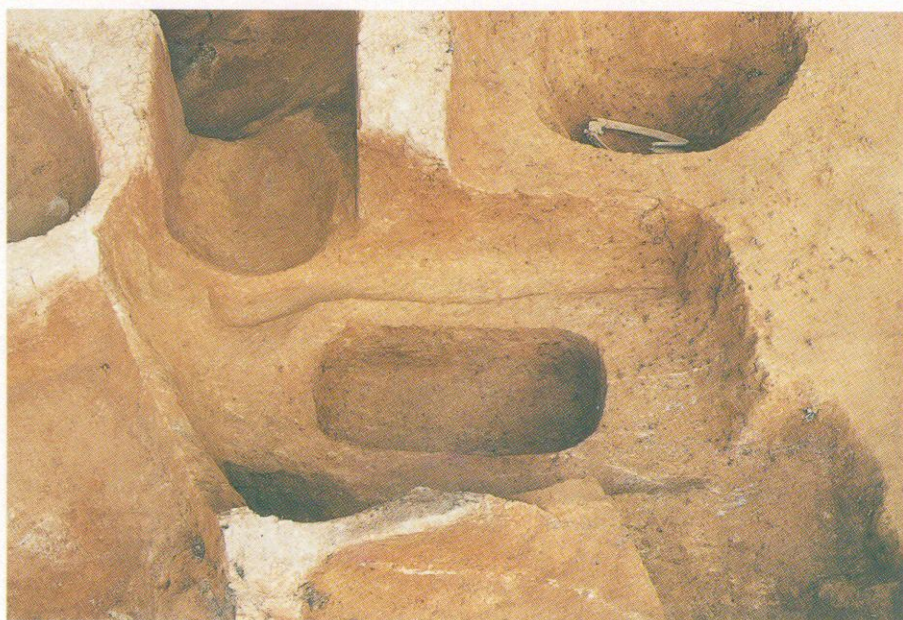
(3) SK19人骨出土状况



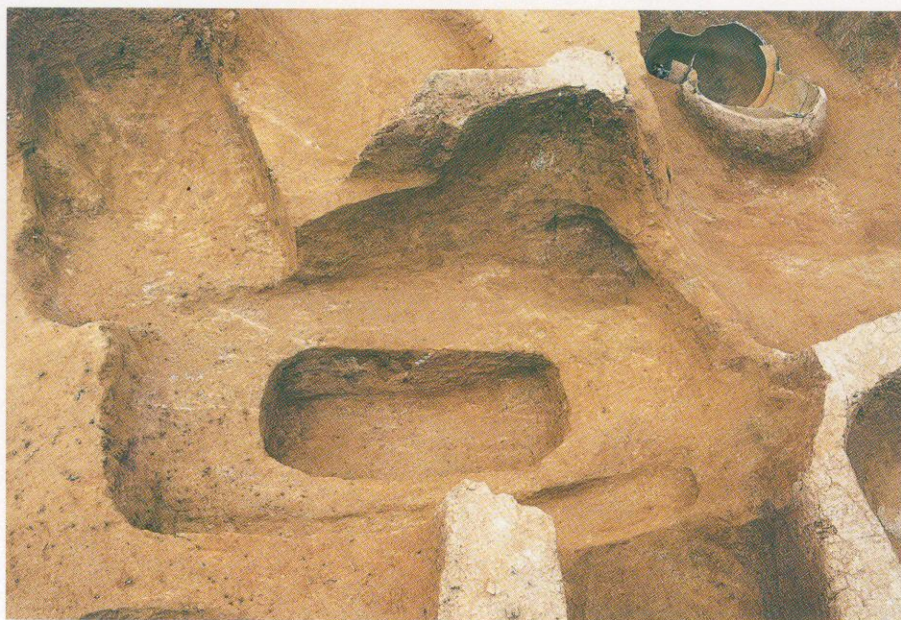
(1) ST01



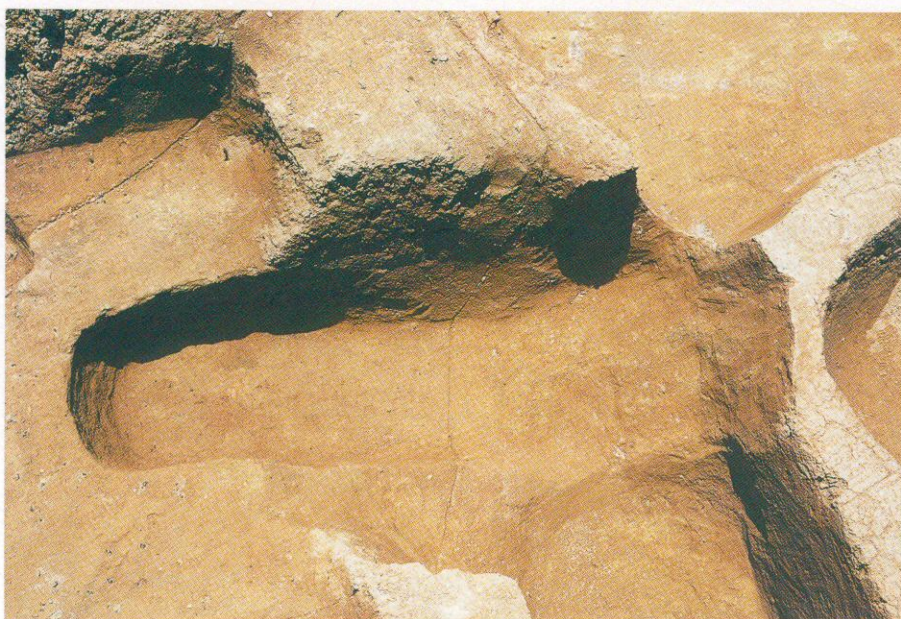
(2) ST03



(3) ST04



(1) ST04



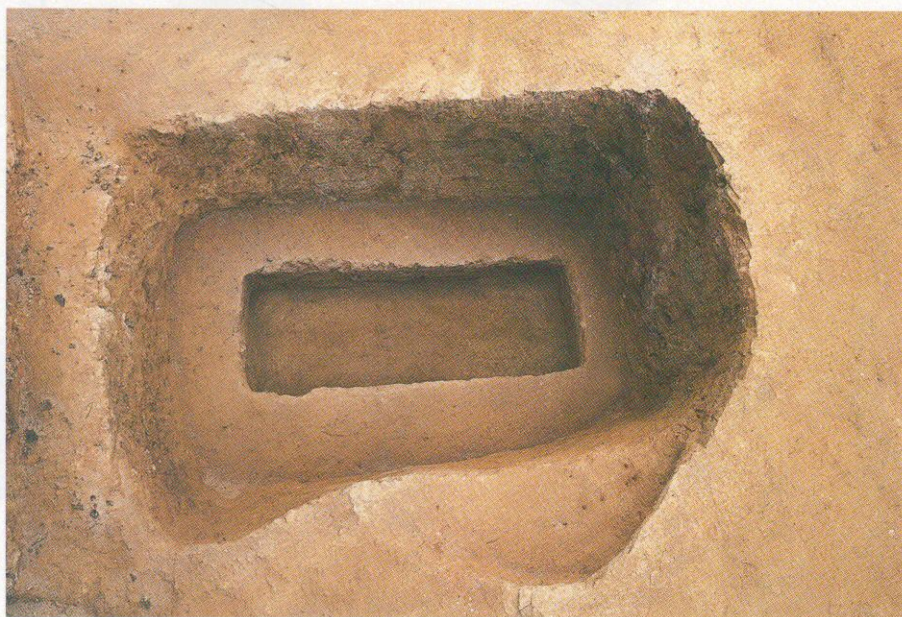
(2) ST05



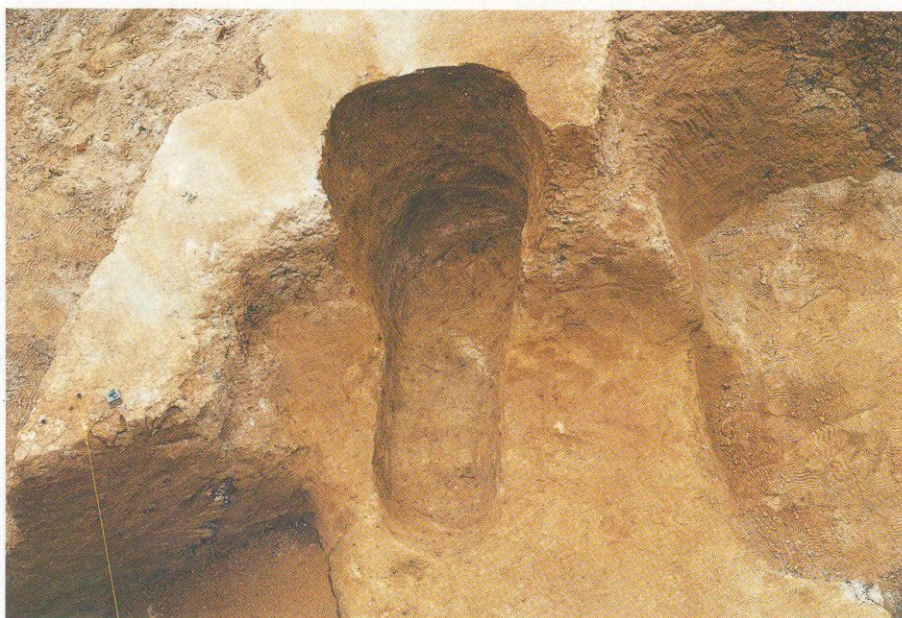
(3) ST06



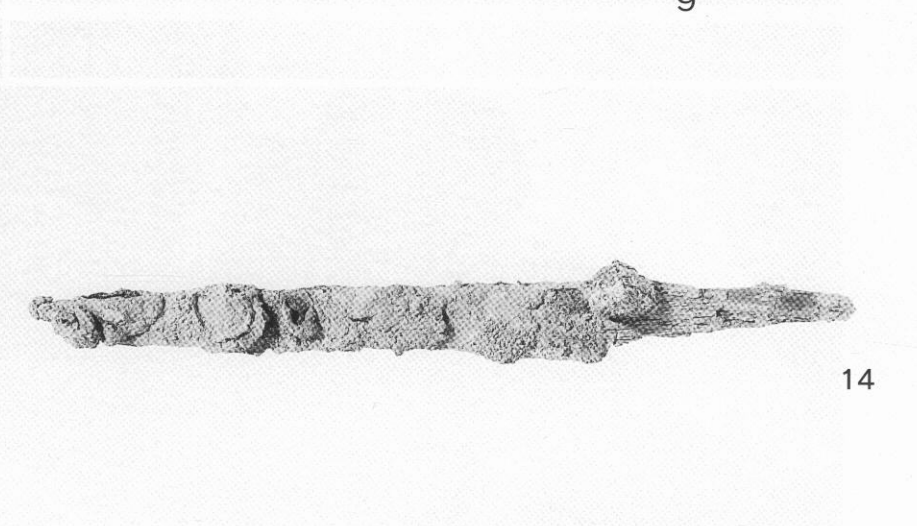
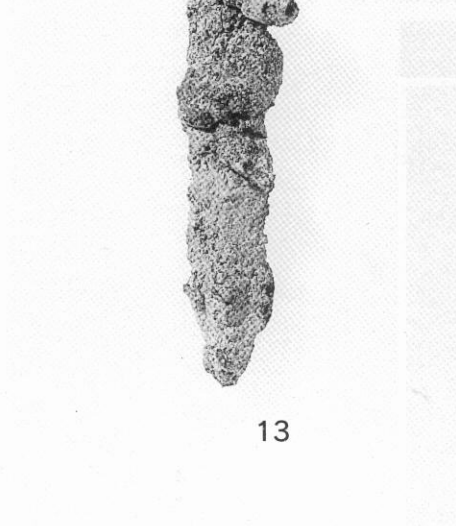
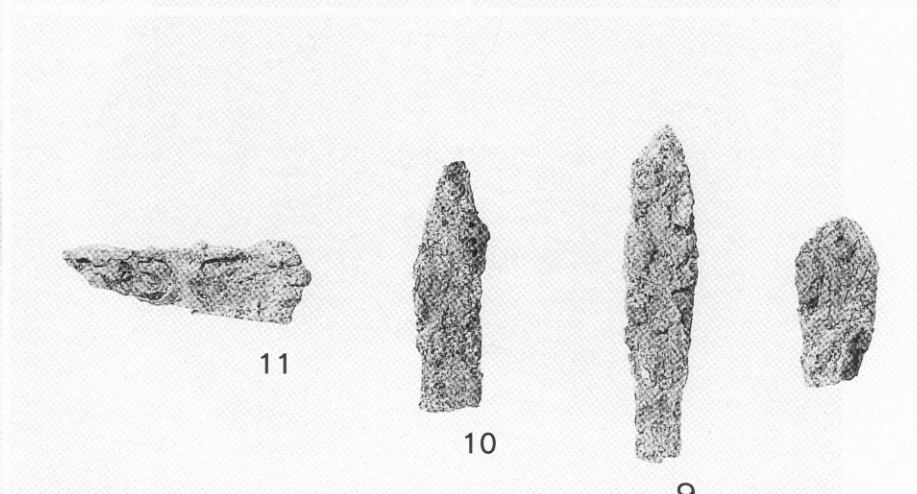
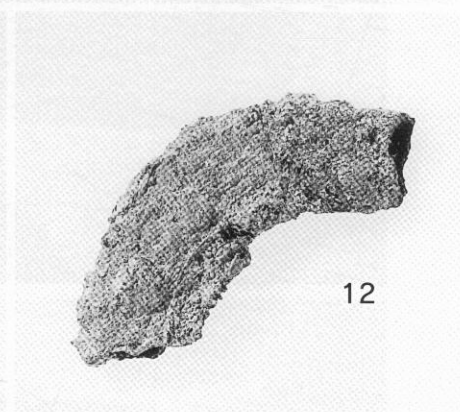
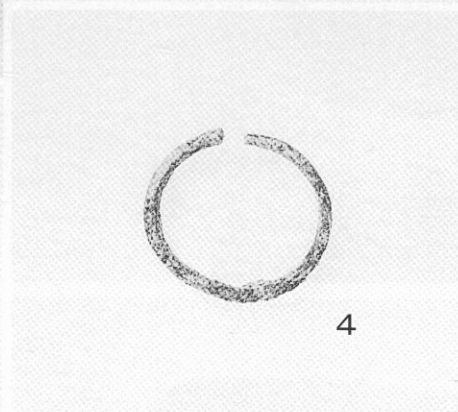
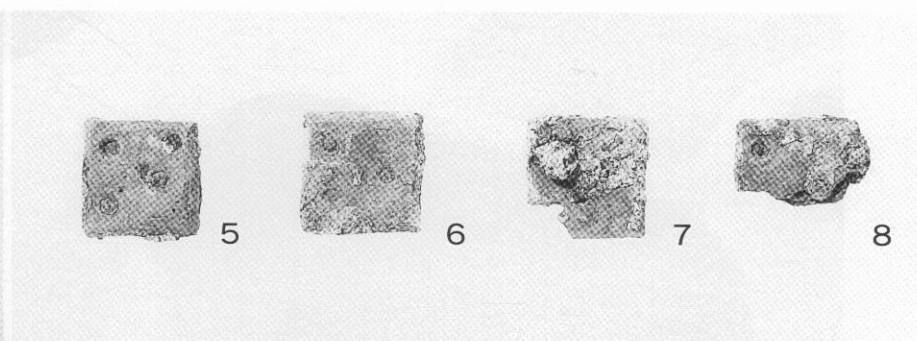
(1) ST08

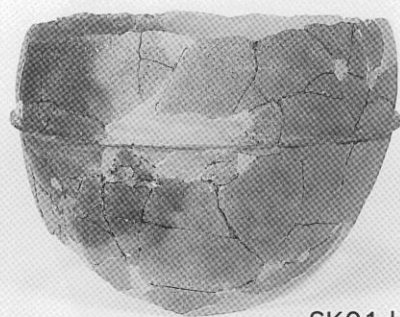


(2) ST09

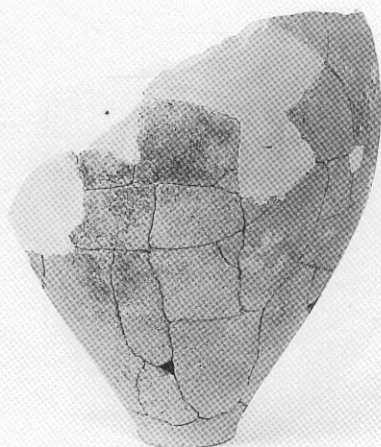


(3) ST11

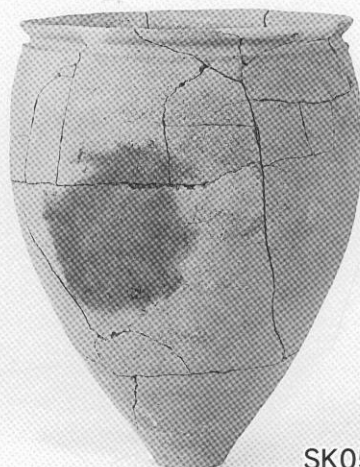




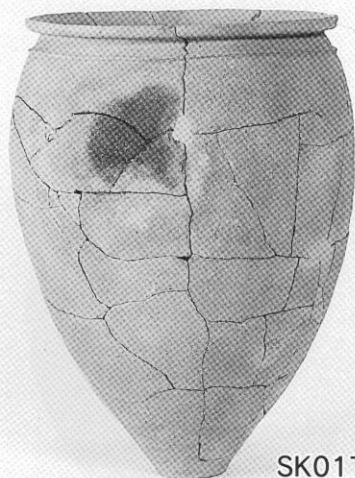
SK01上



SK03



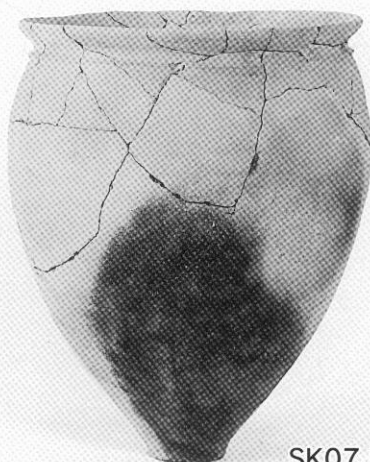
SK05



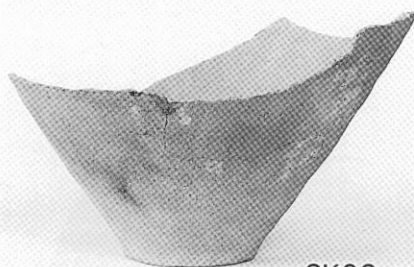
SK01下



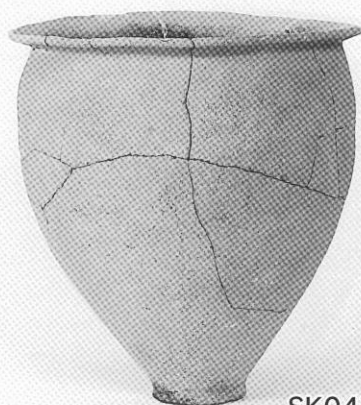
SK04上



SK07上



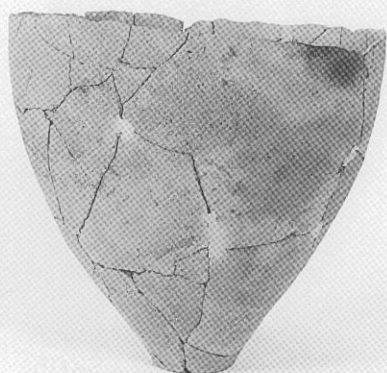
SK02



SK04下



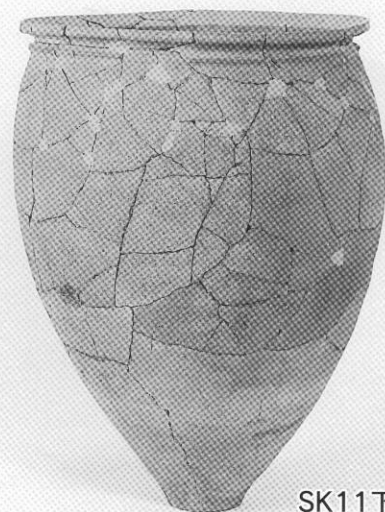
SK07下



SK08上



SK10上



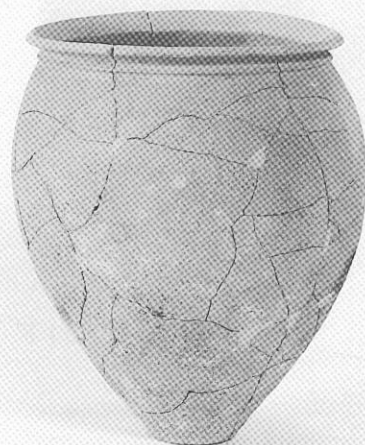
SK11下



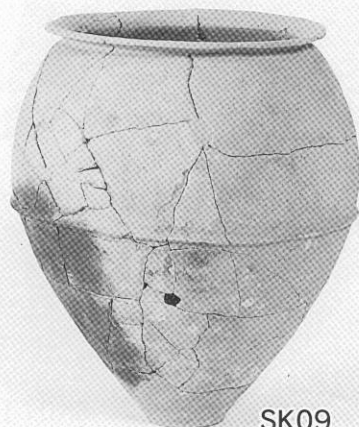
SK08下



SK10下



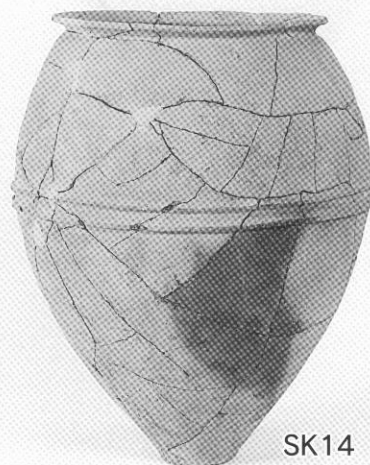
SK12



SK09



SK11上



SK14



SK15上



SK17上



SK19上



SK15下



SK17下



SK19下



SK16



SK18



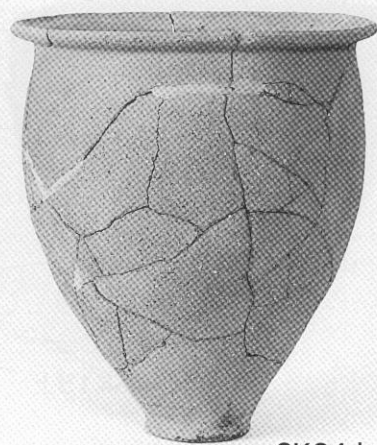
SK20



SK21上



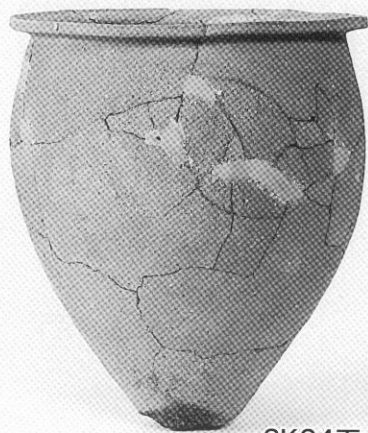
SK23



SK24上



SK21下



SK24下

報告書抄録

ふりがな	ゆのきいせき							
書名	柚ノ木遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第67集							
編集者名	奥村俊久							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1番1号 TEL 092 (923) 1111							
発行年月日	平成13年9月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期 間	調査 面積 (m ²)	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
ゆのき 柚ノ木 遺 跡	福岡県 筑紫野市 阿志岐	402176	170185 170186 170187	33° 29' 40"	130° 32' 56"	890402 ～ 890721	700	宅地 造成
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
柚ノ木遺跡	墓地 古墳	弥生時代 古墳時代	甕棺墓 木棺墓 土壙墓 木槨墓 古墳	甕棺 土師器 鉄器				

柚ノ木遺跡

筑紫野市文化財調査報告書

第 67 集

平成13年11月1日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会

〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1-1

TEL 092-923-1111(代)

FAX 092-923-9644

印 刷 株式会社 三光

〒812-0015 福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4

TEL 092-475-6271

FAX 092-475-6274